

# 野村川湯小学校 卒業アルバム

## 野村川湯ユース・ホステル写真文集

### 謝辞

この本作りの着想は、野村川湯ユース・ホステルで4年間（1976年－79年）ペアレントを務められた父さん（上田上さん）と母さん（久子さん）夫妻はじめ、上田家の皆さんへの、改めての感謝の気持ちを伝えよう、というところからスタートしました。

ところが、たくさんの懐かしい写真や、仲間たちの思いの詰まった原稿が集まりだして形を成すにつれ、これはただの写真や文字の羅列ではなくて、この本作りに参加している人それぞれの物語がそこにあり、生きてきた足跡となっていることに気がつきました。みんなの人生の断片や縮図がここに刻まれている、と思えるのです。

このページからはじまるそんな様々な歩みや、大人になってからやっと気がついたこと、また忘れかかっていた遠いあの日の思い出、恥ずかしいこともちょっとした自慢話や、泣いちゃったことなんかも、この本を開く川湯の仲間たちとそれらを共感できたとしたら、私たちはとても幸せなはずです。

そして結局、こういう機会を自然に、なんとなく用意してくれたのは、やっぱり父さんと母さんのお陰だと思うのです。重ねて感謝申し上げます。

父さん、母さん、ありがとう。

野村川湯ユース・ホステル  
宿泊者一同



# 父さん 母さん

兄さん（上田 進 Ueda Susumu）

父さんは今年11月で、91  
身体が細くなり、背中がまあるくなった  
時々、ソファで座ったまま、うたた寝をしている  
耳がとおくなり、補聴器が手放せない  
目もかすむようになり治療、回復したよう  
毎朝、最近買った電気シェーバーで髭を剃る  
毎日、綿棒で耳と鼻に薬を塗っている  
母さん用に取り付けた手すりで、ストレッチをしている  
去年の誕生日前まで運転して、ふたりで買い物に出かけていた  
去年、ようやく運転免許を返上、外に出る機会が減った  
調子のいいときは、毎日バーボンを飲んでいる  
時々、散歩に出るようだが、いつも天気が悪いとき  
母さんは、ぼけてきたと言っている

母さんは今年6月で、86  
少しは痩せたが、相変わらずまあるい  
ケーキなど甘い物が大好き、でも太ることを気にしている  
それでも、血液検査の結果には異常がない  
時々、テレビの前で横になりうたた寝をしている  
週に2回、デイサービスに行つてストレス解消している  
数カ月ごとに美容室に出かけている  
足腰が弱くなり、部屋やトイレに手すりを付けた  
少し前まで草花の手入れをしていたが、今はない  
今もふたりの食事は母さんが作っている  
時々、おはぎや煮物を作るが、さすが味は変わらない  
自分たちの身の回りの物をリサイクルしている  
最近、自分の身の回りの断捨離を始めた

ふたりとも野村川湯ユースでの皆さんとの出会いと楽しかった日々の思い出が、今も心にあると思います。  
野村川湯ユースで出会ったホステラー1人ひとりの記憶の中に、父さんと母さんが残っていてくれたことを嬉しく思います。ありがとうございます。■



# 私の家はユースホステル

直ちゃん（松田直子 Matsuda Naoko 旧姓・上田）

あれから40年!! まさかこんな機会が来るとは思ってもみませんでした。今日は、当時のことを思い出してみようと思います。

……私は中学3年になる春に、3人兄弟の内1人だけ親について、中標津から川湯に移り住むことになりました。新たに住む家はといえば木造のボロボロで、学校へは4キロ以上ある道のりを自転車で通い、国道から脇に入る砂利道では、夏にはよく蛇が出て「ぎゃっ〜」と叫びながら帰って来た記憶があります。

家に帰ってくるとヘルパーたちが、こずかい部屋で「おかえり〜」と、ホステラーたちとは全然違うテンションで迎えてくれたものです。

夜は毎日のようにキャンプファイヤーが焚かれ、フォークダンスや歌を唄ったり。山の中で近所迷惑もなにも関係ないのでやりたい放題だったけど、父さんと母さんもやりたいことを好きにやらせてたような気がします。父さんは感情をあまり顔に出さないタイプだけれど、若い人たちと一緒に色々やられて、楽しかったんじゃないのかなあ〜?

母さんは、みんなの母さんって感じで、口うるさくとも慕われていて、女の複雑な人生とか相談されたりしてたと思います。毎日、休みもなく大変だったと思うものの、まだふたりとも若かったし、皆さんに助けてもらってたから出来てたのかもかもしれません。

確か、私が19歳の時、父さんが体調を崩して病院へ行ったら、肺結核と診断されました。病院では隔離され、長い闘病になるためにユースのペアレントを辞めざるを得なくなって、次のペアレントに替わったのです。短いユース時代だったけれど、私はほかの中高生たちに経験出来ないことがたくさんやれたし、全国に知り合いもいて、今でも連絡を取りあったり、会うことも出来て本当によかったと思っています。

何人もいたヘルパーの中で、真くんがヘルパーになるって聞いた時に、私がイヤだといったのは、多分、本当だと思います。なんとなく大人っぽくて、恐かったから……真くん、ごめんね。フッコは優しく、私のお気に入りでしたけどね。

卒業旅行では、毒リンゴとみゆきちゃんと私とで、はじめての飛行機に乗って札幌から東京へ行き、皆さんにお世話になりましたよね。ホーサーが部屋を貸してくれて、泊まった記憶があります。その節は、お世話になりました。残念ながら毒リンゴとは、もうこんな思い出話ができないのが、今は悲しいです。

いつかまた会おう、なんていってたら歳を取って動けなくなるので、出来るだけ早い時期に再会出来ればと、願っています。

この度は、こうして川湯文集の刊行の機会を作っていただき、きっと父さん母さんも幸せだろうと思っています。皆さん、本当にありがとうございます。■



# 私の父さんと、母さんと

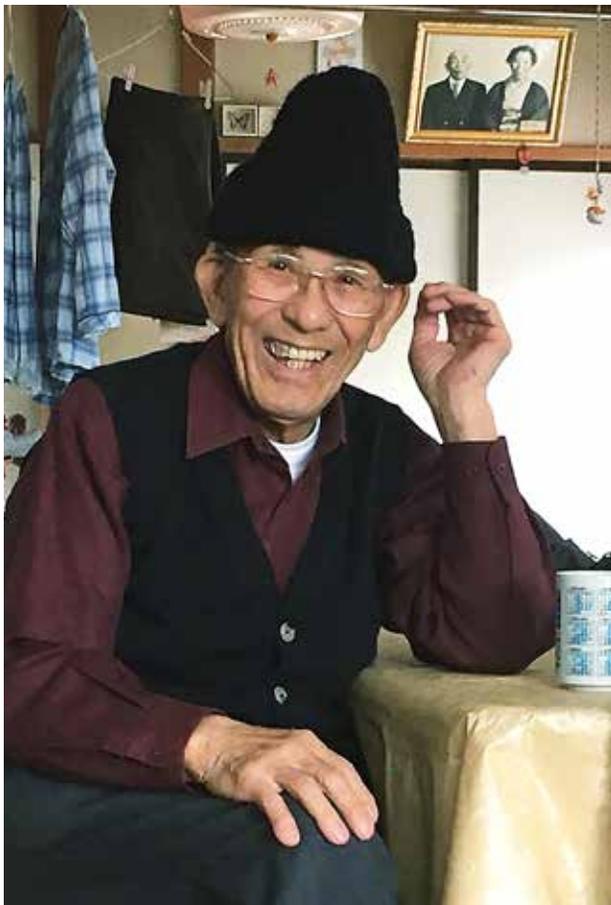
友ちゃん（高木友子 Takagi Tomoko 旧姓・産田）

ひと言でいえば、出会えてよかった。

父さんは心が広いし、母さんは、あったかい。そして側にいると、ほっとします。そんなふたりと一緒に時を過ごせたことが、とても幸せです。

今、振り返ると、こんな私を、受け入れてもらって、ありがとうございます。随分、図々しく、わがママをやっていたと思います。帰る時は「じゃあ、またね、行って来ます」と、お邪魔する時は「ただいまあ〜」のひと言だけをいえばすべてが終わり、また、すべてが始まっていたような気がします。そんな千切れた雲のように気まぐれな私を、変わらない笑顔で、いつも迎えてくれてありがとうございました。

いつまでも私は、父さんと母さんが大好きです。この気持ちは、出会った頃からずっと変わらないのです。■



2017.12.31



2017.11.19 ひ孫のチナミと

# 私たちの父さんと、母さんと



「野村川湯小学校卒業アルバム」  
野村川湯ユース・ホステル写真文集

目 次

- 2 兄さん 上田 進 父さん 母さん  
3 直ちゃん 松田直子 私の家はユースホステル  
4 友ちゃん 高木友子 私の父さんと、母さんと

1 謝辞

- 9 オレたちの財産がここにある  
真くん 堀 真也 + フッコ 横関福好  
「野村川湯小学校」初代ヘルパー対談  
11 ヘルさん 板垣秀雄 イヤならいいんだよ  
18 フッコ 横関福好 奇妙な仕事とイクラ丼の味

20,32 卒業写真

70,122 思い出写真集  
28 「俺の川湯」より

- 43 1970年代とは、どんな時代だったか

- 29 ゴミ 萩原正徳 出て行っちゃった女王蜂  
29 ながたにえん ……もしかすると  
30 野上秀人 逞しき男たちよ、「岩保木」の読み方を知れ  
30 大橋正美 できれば入学したかった野村川湯小学校  
30 ナガサカ 長坂肇 オレの朝立ち  
31 ももひき 長谷川浩司 尻にお注射  
31 フォード 小川正寿 ついに泊まった川湯  
31 長井康江 その後、あなたのポストはどうなった？  
31 H. K ユースがなくなるかも！

44 川湯 in 東京  
49 川湯遺産

- 50 川湯の文化遺産  
50 和ちゃん 林 和子 連歌集 北の風光  
51 たみ子さん 桜井たみ子 旅費の足しにでも、と思って  
52 センパイ 多田 淳 俺が書いた「林間学校」の看板  
53 フッコ 横関福好 1977年の暑い夏の日  
54 野村川湯の「野村」は、野村徳七だ！

- 55 川湯の自然遺産  
55 でんしんぼー 伊藤徳俊 オレは、どこかにきつという  
56 ナガ 長坂 肇 北歌の色  
58 ヒデキ 武山秀樹 川湯発 野村川湯ユース・ホステルの今昔  
今日までそして明日から

- 60 タンツボ 後藤功史郎 硫黄山のフサフサ精  
55 川湯に集う「チョウ屋」たち

- 61 川湯の無形遺産  
61 ミリ 村松美里 人目を気にしながら口ずさむ「旗踊り」  
62 チョビ 堀江 均 川湯名物キャンプファイア  
63 でんちゃん 新田紀男 「風呂焚き爺さん」を口ずさみ続けるひとり旅  
64 レイコ 川村礼子 川湯で迎えた誕生日



- 65 ナベちゃん 土川貴美子 母さんから教わった石狩「ナベ」の味  
 66 ダックス 加藤仁久 40年前の思い出  
 67 加古さん 加古 一 キャンプファイアと電灯との関係について  
 68 橋本 優 人生を広く、大きくしてくれたユース  
 82 夕食の定番！ 本格カツの作り方  
 調理：直ちゃん 松田直子 監修：母さん 上田久子

## 90 記憶遺産

- 92 滑稽・ひょうきん  
 92 タヌキ 丹羽来美 ピーマンさんは運命の人  
 93 おばけ 大川教子 昔も今も、郵便局はそこにある  
 94 みほ 高杉美穂 あの頃は許せてしまった品のなさ  
 95 エンダン 川瀬保裕 パンツ一丁で泳いで、あれから40年  
 96 チャック 高松栄子 摩周湖の遊覧船乗り場は、どこ？  
 97 岐阜 西部銀雄 あッ、オマエ、屁しただろう！  
 98 真くん 堀真也＋フッコ 横関福好 下関の不思議な話  
 99 ランユウ 石川 衛 影を背負って通う道
- 100 エロス・優雅  
 100 キリン 長谷川浩司 オバケが好きな理由  
 101 ねむいの 大川泰則 バイオレットは恋の色  
 102 三公 矢尾板直樹 ひとり歩きした迷惑な「噂」  
 103 よしみ 大熊佳美 忘れられない夜の摩周湖の星々
- 104 英雄・偉人  
 104 のりちゃん 畑中範子 旅人たちを集める魅力  
 105 下関 一柳 仁 ヘルパーとしては、なにもせなんだよ  
 106 真くん 堀 真也 問わず語りの川湯風景  
 107 真くん 堀 真也 のうま君「のうまくえん」と呼ばれた男
- 108 烈女・女傑  
 108 友ちゃん 高木友子 女ヘルパーが泣いたのは1度だけ  
 109 オグス 小楠厚子 自由って素晴らしい  
 110 らんさあ 国分秀夫 清美の思い出  
 111 あうみ姫 正木愛弓 私にとっての宿命的なユース
- 112 硬派・軟派  
 112 土方さん 佐竹正明 ユース内での異性間交遊について思う  
 113 千歳 新関睦子 李下に冠を正さず  
 114 ミルキィ 福田尚司 お姉さんに伝えられてないお礼  
 113 フッコ 横関福好 川湯は、斜里と兄弟ユース？
- 115 熱狂・休息  
 115 難民 金城新生 夢中で話した1年先の旅の計画  
 116 りょうこ 佐々木良子 全盛期を体感したかった  
 117 マヤちゃん 福井真也子 私を変えた野村川湯小学校での出会い  
 118 保野和司 駅前ソフトボール大会  
 120 ネズミ 藤原夕歌里 笑えるように、がんばれた  
 121 ヤマハ 根上京巳 一生忘れられないおもてなし

- 131 無頼・漂泊  
131 加藤くん 草薙修二 今も忘れられない高田さんの言葉  
132 コケムシ 嫁兼啓司 ヒリつく背中痛みと、楽しい日々  
133 後輩 宮地鎮雄 北海道に住んでいます  
134 土方さん 佐竹正明 煙草屋の角を曲がって見たら……  
「野村川湯 YH 写真文集」発刊に寄せて  
136 加藤敏子+荒井充子 この道をずーっと行ったら……  
137 カメラ魔 川井 聡 周遊券のはなし  
138 あさ子 岡部あさ子 都市にも生きる野村川湯ユースの気っ風  
139 加奈ちゃん 小川加奈子 ワイルドな男子たちとの出会い  
139 久美ちゃん 吉原久美子 気がつけば連泊してた私
- 140 落涙・寂寥  
140 キンタ 木下 透 男っばい大胆不敵と、優柔不断 追悼・毒リンゴ  
141 みゆきちゃん 工藤みゆき 毒との思い出  
畑本貴子（旧姓・堀越）さんを悼んで  
142 ナガ 長坂 肇 声の届かなくなった友たちへ  
143 テツヤ 森下泰文 いつの間にか疎遠になっていて 板垣和子さんを悼む  
144 テツヤ 森下泰文 オンネットー遠足の思い出 尚ちゃんを悼んで  
145 ホンダ 山本正吉 俺の男泣き  
146 けいちゃん 土元桂子 切ない気持ちを秘めて過ごした川湯
- 147 経年変化  
147 ちんぺえ 坂牛 聡 楽しかった野生のような暮らし  
147 Z2 三宅広雄 残されたままの錆びたバイクの片端  
148 ドテラ 藤崎勝士 9年間ユースを見続けた生き証人として  
149 トモノ 友野 正 高田芳雄さんの生き方  
150 ホーサー 吉川 誠 厨房から見えるユースの風景
- 152 トモノ 友野 正 プラトモノ  
155 感謝状 友野正殿  
154 小伝・川湯の立役者たち 「カスガイ」の本懐
- 156 風呂焚き爺さん  
158 はないちもんめ／旅の終わり  
159 硫黄山音頭／あの山に登ろう

■凡例：写真中の「」は、主に原稿の筆者、また当該原稿の主題となっている人物、あるいは原稿中に登場する人物などを示しています

■注：多くの原稿は、古い記憶や思い出だけを頼りに書かれていますので、当時の現実・事実、名称などと異なっている場合もありますが、どうか寛容にご理解下さい

## オレたちの財産がここにある

### 「野村川湯小学校」初代ヘルパー対談

真くん（堀 真也 Hori Shinya）＋フッコ（横関福好 Yokozeki Fukuyoshi）

あの年、野村川湯ユース・ホテルが、どのようにして「小学校」へと変じて再生し、北海道を旅する人々に知られ、魅了していったのか。創造主・真くんとフッコに、その草創期を語ってもらううちに見えてきたのは、ふたりの人生の転換点と、心意気だったのだ。



左より、フッコと真くん。ふたりの話術はかつてと変わらず衰え知らずだった。

### 北海道は 真っ黄色です

真くん（S）●1974年の8月、野村川湯ユースで、ヘルさん（板垣秀雄さん）とパーさん（内藤公彦さん）に出会ったのが、オレたちのすべてのはじまりだった、そこからだったね。

田舎の高校3年生が、海外に近いような北海道に行って、やること見るもの全部がはじめての経験で、楽しくて、面白くてしかたなかったんだよ。

フッコ（F）●面白かったから、オレたちは川湯で連泊しようと思ったんだよなあ。

S●ヘルさんとパーさんに、独特な雰囲気があって、それが新鮮で、楽しくて。ああ、こんな世界があるんだなあ、とオレは思ったねえ。

ユースを使って北海道を廻っていて、そしたらどこかのユースで、川湯が面白かったよと聞いたもんだから、次の予定をキャンセルしてオレたちは川湯に行くことにしたんだよ。そこんところは、最初は、みんなと同じようなもんだわね。

F●当時の川湯は、ヘルさんがボケ？ パーさんが突っ込み？ だったよなあ。

S●そうだね、……どっちかっていうとな。

F●パーさんはとても知的で、航空管制官とかを目指すよう

な人でね。話題が豊富で知識も広くて、とにかく博識だったよね。たとえば星座の話とかよく知っててね、とても詳しい。ミーティングのときに、そういういろんな話をしてくれるんだけど、口癖が「愛してまーす」だった。オレたちもヘルパーやってたときは真似して「愛してまーす」っていったよなあ。S●そういえば、そうだったねえ。

F●ヘルさんはそれに対してボケで対応する人で、とにかく軽妙で面白かった。で、オレたちは、川湯に入って2日目の夜くらいに、弟子入りするみたいになって、すぐにオレがヘル・ダッシュ、真くんがパー・ダッシュとしてミーティングに参加してたんだよ。

なんでか知らないけど可愛がってもらってさ、ミーティングにホストとして出てたんだよ。

ミーティングのオープニングは、「ヘルでーす、パーでーす、2人合わせてヘルパーでーす」からはじまったんだよ。

で、オレたちが参加してやりはじめたときには、「ヘルでーす、パーでーす、2人合わせてヘルパーでーす、アンド ヘル・ダッシュでーす、パーダッシュでーす、2人合わせてヘルパー・ダッシュでーす」といってはじめてね。……そこから、だよ。

S●そのときも、オレたちがやったときは、打ち合わせしたことは、ないよなあ。



コラージュ制作 ネズミ（藤原夕歌里）

F●オレたちはなんかはじめるときは、いつも思いつきではじまっちゃって、その流れのなかでやっていく、で、なんとかなるって感じかな、いつも大体。

だからさあ、オレたちはふたりともお調子者なんだって、多分ね。お互いを褒めたりして、だんだん調子に乗ると、エンターテナー振りみたいなのが発揮されてくるんじゃないのかなあ。

S●いきなりだったけど、ヘル・ダッシュ、パー・ダッシュをやってみて、そりゃあ面白かったよねえ。で、なにが面白かったか、というと、まず注目を浴びるし。それに、なにをやってもよかつもんね、そういう自由さも心地よかった。

それとその頃からすでに外でミーティングをやってて、当時は火はなくて、木の椅子に座って、真っ暗ななかでやっていて、心に訴えるようなしっとりとした空気感があったような、ね。

F●旅情を感じさせる雰囲気があったよな。

それで、物語やコントみたいなを作るのは、ヘルさんだったと思うなあ。コントは具体的には覚えてないけど、とにかく笑わせてくれて、面白かったよ。

S●オレの相手はフッコだったから、ものすごく楽だったよね。だってさ、任せときゃあいんだもの。全部、面白いことやってくれるから（笑）。オレはそれを受けて、ちょろっと補助役をやったりゃあいいのよ、どーんどんリードしてやってってくれるからね。

F●オレはね、の一ま君とヘルパーやったときに、多分、ぎこちなかったような気がするもん。の一ま君は才能があるから、でもオレはどっちかという素人肌なんやけど、の一ま君はいろんなものがプロ級なのよ、喋りもギターもね。それがやりにくかったような覚えがある。そこいくと真くんは素人で、とてもやりやすい（笑）。

S●計算できないから、それが楽だったんだろうなあ。

F●楽というか、……感覚が合ったよね、掛け声がうまく掛けられたよね。

それに見てる場所が同じだったし。例えば、ネタを作ろうとして川湯温泉の熊牧場なんかに行っても、見てる場所が一緒みたいでさ。オレが熊になって、熊のケンカを振ると、もうすでに真くんはその相手の熊になって、ちゃんとオレに向かってくるんだよ。だから、すごいやりやすい。細かいところをよく観察していて、視点が一緒だったし。

つまりね、オレと同じように面白さや、痛みや喜びを感じたり、受け取ったりしてくれてたんじゃないのかなあ、きっと。そういうのがあって、川湯でもうまくつながってた気がするしねえ。

S●川湯でね、ヘルパーをやった理由はね、ようはモテたかったんだよ（笑）。だってそりゃあ、そうでしょ。ただね、女の子だけじゃなくてね、オレたちは男からもモテたかったんだよな。

F●オレはヘルさんとパーさんに会って、北海道に憧れちゃったからね。そんなふたりの姿に憧れて、よし、北海道へ行こうと思ったのよ。

高3の夏にはじめて行って、で、卒業して就職するでしょ。仕事しながら2回くらい北海道へ行ってて、その頃、真くんはデザイン学校へ通ってたんだよな。

それでオレは母親に、仕事を辞めて北海道に行ってくるよといったら、大学に行ったつもりで遊んできたなら、っていわれてさ。北海道が大学みたいな、人生勉強みたいなのをしてきたら、といわれたんだよ。だからオレは、「北海道大学」に行ったつもりなんだよ。

そこまでを自分で決めてから、で、オレは北海道へ行って、向こうでしばらく過ごそうと思うんだけど、みたいなことを、真くん相談しに行ったことがあった。

そうすると真くんは、いやあ、オレは学校を卒業したいから、とかいって、結構、真面目なのよ。じゃあ、オレ、ひとりで行くわっ、とかいってね……。

それで、ひとり北海道へ渡って、最初に、バイト兼泊まる場

# イヤならいいんだよ

ヘルさん (板垣秀雄 Itagaki Hideo)

所というか、それが斜里コースで、そこでいろんな人に会うんだけど。そこを基点にしてバイトしてお金を貯めてさ。それでちょっとの間、北海道をぐるっと廻った。

で、その旅の間に、真くんにはガキを書いて送ったんだよ。根室の近くで見たとても印象深い風景を「北海道は真っ黄色です」と、ただそれだけを書いて出したことがあった。感動と郷愁と、ひとりである寂しさみたいなものもあったのかもね。とにかく、たんぼぼが一面に咲き乱れていて、それはもうホントに美しい光景だったしねえ。

S●フッコから北海道に行くと相談されて、誘われてさ、焦りはしなかったけど、正直、羨ましかったよな。

オレは親に学費を出してもらってたしね、そんな時は、卒業しなきゃ、というのが頭にあったとは思うよ。しかもまだ、フッコがヘルパーするつもりだったのも聞いてもないしさ。ただ漠然と、なんの目的もなく北海道に行ってもなあ、というのはオレにはあったとは思うんだよ。

それでフッコからのそのガキを読んだら、ああ、楽しそうにやってるな、って、羨ましい気持ちにはなったと思うよな。

でね、その直後に、フッコから電話があったんだよ。その電話の内容はね、川湯でヘルパーをするよ、だった。オレはそれを電話口で聞いた瞬間に、「なんでオレを誘わん」と、即座にいった、その場で決断して。……学校？ そりゃあ諦めたよな。

F●へえ……オレ、電話なんかしたかなあ？ 覚えてないけど、でも、よかったよなあ、オレは電話して (笑)。

S●実はね、オレの通ってたデザイン学校のクラスメイトたちは、結構、本気で勉強しててね。オレは遊び半分だったけど、彼らは真剣だった。たまたま仲の良かったヤツが、ご両親が亡くなって、働きながら学校に通ってた。それは、ものすごく大変なことだったんだよ。でも、夢があるから勉強し続ける、というような話を聞いたくらいから、オレは遊び半分の体たらくで、一体、なにをやっとるんかなあ、と生き方

北海道を旅していて、私はヘルパー募集に応募して採用され、原生花園コースに配属された、とばかり思っていました。

そのつもりでいたら知らせが届き、野村川湯のヘルパーとしてやってくれないか、と頼まれました。なにか、協会側にも都合があったんでしょうね。私は、以前に野村川湯に泊まったことがあったので、これもなにかの縁だと思って、一路、川湯に向かいました。

行ってみると、そこに相方のヘルパーとしていたのが、パーさん (内藤公彦さん) でした。彼の方が5つか6つばかり歳下でしたが、すぐに息が合いましたね。

で、そんな私たちのところへふらふらとやって来たのが、岐阜から来た真くとフッコでした。そうですねえ、第一印象としては、高校生にしては落ち着いてるな、でしょうか。でも、

を疑問に感じはじめてたんだよ。そういう時に、たまたまフッコからの電話があったんだよな。

それで高校時代の楽しい思い出が一気に蘇ってくるし、で反射的に、「なんで誘わん」っていったら、そしたらフッコは「来い！」って電話口で叫んだんだよな。

F●あれえ、オレ、そんなこといったっけなあ (笑)、いやあ、覚えてないなあ…… (笑)。

S●それでオレはオヤジの前で、学校を辞めさせて下さい、北海道へ行ってやりたいことがあるんだ、ってね。オヤジからは、どうせただ遊びに行くだけだろうっていわれて、取り合ってくれずに、卒業しろの一点張りだったね。

その夜、しょんぼりしてるオレにお袋が、「オヤジひとり説得できないような男に、この先なにができる」といわれちゃった。そいで、次の日も、お願いします、と頭を下げてオヤジに頼んだら、そしたら最後には、勝手にしろ、といわれたんだよ。

それで学校に、休学届を出して行こうと思ってたの。そしたら、今度はオレの姉貴が、「そんな中途半端なことするな」といった (笑)。それで自主退学してからバイトして、旅費分だけのお金を貯めて、オレも北海道に向かったんだよ。

コースに電話を入れて、ヘルパーをやらせて下さい、とだけ頼んでおいて、でも、フッコはその間のオレの気持ちや事情はまったく知らないよ、オレもヘルパーをするのもまだその時は。だって連絡方法もないしさ。

で、オレはあの川湯のコースでヘルパーができるんだ、って興奮しながら、北海道に渡ったよ。名古屋港からフェリーで苫小牧に着いて、そして札幌駅で偶然フッコに会ったんだよな。ビックリしたよそりゃ、オレはフッコはもう川湯にいるもんだと思ってたし、フッコはなんでオレが北海道にいるんだ？ と思ったんだよな。

F●いやほんとにビックリした。川湯でヘルパーするって聞いて、さらにビックリだよ。



左より、パー（内藤公彦）さんと、ヘル（板垣秀雄）さん。このふたりに、真くとフッコは強い影響を受け、人生を歩む角度が変わった。

## 1年限りの 「野村川湯小学校」

F●それでいよいよふたりで川湯に入っていくわけなんだけど、覚悟とかいうよりも、まあ、責任感も多少はあったものの、なんせ遊び半分だからねえ。

その頃、北海道では4バカ・ユース（桃岩荘、エリモ、岩尾別、積丹かもい）というのがあって、そういうのをやりたいっていうことを、汽車のなかで真くとと話しながら川湯に向かったような気はするね。それを目指して、オレは下調べみたいな感じで、いろんなユースを廻ってたわけよ。

S●オレはといえば、とにかくドキドキしてたね。これからやってやるぞ、という高ぶり以上に、緊張というか、怖かった、というかなあ。

フッコは他のユースを廻ってたからね、ところがオレはいきなりだったし、高校生の頃のことしか知らなかったわけでね、だからドキドキしてたよな。

だって、前はヘルさんとパーさんがいたからね、オレたちは身軽に、気ままにやってたけど、でも今度は、その立場になるわけなんでね、責任もあるし、怖かったよな。だから最初のミーティングなんて、もうドッキドキだったんじゃないかなあ。

F●川湯での最初の夜に、ホステラーに挨拶したじゃん、食堂でさ。チョウ屋さんたちが泊まって。それでふたりでテーブルの一番端っこに立って、今日から、ヘルパーをやらせていただきます……みたいなことってさ、もうふたりとも必死だったんだよね。

S●オレたちは、そりゃあ緊張してたんだと思うよ。

F●それが、第1日目だったと思う。それで仕事も、どういふことをするのかよく分かってなくて、教えてもらったような気がするし。

若者らしく、いつも元気に騒いでましたよ。

細かくは覚えてないのですが、私たちにすぐに馴染んで親しくなって、いろいろと仕事を手伝ってくれたりしましてね。……そういわれれば、ミーティングなんかでも私たちの横に立って、活躍していたような気がしますねえ。

そういえば、こんなことがありましてね。ある日、ふたりが受付を手伝ってくれてました。

そしたら、宿泊予定の4、5人のホステラーのグループが来たそうです。そのなかのひとりが、きょろきょろと周囲を見廻して「ここは、汚いユースだなあ」というようなことを口に出していったんだそうです。すると、フッコか真くんかは忘れましたが、とにかく「イヤならいいんだよ」と、即座に切り返したんだそうです。それで旅人たちは、「じゃあ、いいや」とだけ

オレは、北海道を廻るときに、荷物を預かってもらうために川湯に1度、立ち寄っていて、1泊くらいはしてたのかな。その時にはじめて、ちらっと上田の父さんと母さんに会ってる。ヘルパーをやることは前に頼んでいたし、改めて、よろしくお願いします、みたいなことだったと思うけど。

そんなときの父さんは、普通の人（笑）。……ごく普通のおじさんだったね。普通の経営者って感じかな。母さんは、最初からあのまんまの感じだったしね。

S●……そうだね、はじめて父さんに会っても、オレはとくになにも思わなかったねえ（笑）。印象が薄い、というか。

F●実は、あんな面白い人だとは思ってもみなくて。面白い人だと思ったのは、真くと一緒に、父さんに『キチガイ・ユース』にしてもいいですか、って訴えたときかな。

父さんも新米ペアレントで、きっと『キチガイ・ユース』ってどんなものか、なにもイメージできなかったと思うんだけど、やっていいですか？ って聞いたら、「おう、ええどー」って、軽くいわれちゃった（笑）。

それになにをしても怒られないし、好き勝手にしろ、みたいな感じで、この人、ホンマかいなみたいな人なんだけど、父さんも母さんも、一見、な一にも考えてないような感じでさ。それでその時、父さんはこのユースは1年しかやれないから、好きにしろ、っていったんだよなあ。

だからオレは、1年しかやれないんだから、なにをやってもいいよな、とか父さんに相談することもなく、どうせ壊すんだったらええワと思って、オレは勝手に壁に落書きをしたりしてた。で、父さんはその落書きをパッと見て、こりゃあなんだ、みたいな顔をしたので、「だって、1年で終わっちゃうんでしょ？」といったら、「そうであ」とひといいって、それで終わり（笑）。はあー、面白いなあ、この人、なにやってもいいんだな、みたいなことでそれ以降、どんどん進んでいった。

いい残して、受付もせずにそのまま帰っていったそうです。  
私は、そのことを後から聞きましたが、ふたりはあまり動じて  
もいなかったような、そんな感じでしたかね。そういう人もい  
るさ、ということでしょう、仕方ありませんね。それに、ふた  
りの野村川湯への矜持のようなものすら感じられて、なんと  
も頼もしいですよ。

そのように、フッコと真くんは、高校生らしくギャーギャーと  
元気に騒ぐけれど、しっかり者でもありました。その彼らが、  
2年後に私たちと同じように川湯でヘルパーをして、「野村川  
湯小学校」を作り、それがまた次へとつながっていった、と聞  
いて、私は人生の機微や、縁の深さを感じます。原生花園じゃ  
なくて、よかったのかも知れませんが。(談)



ヘルさんとフッコ(右)。1974年

S●とにかくなにやっても、父さんに怒られたことは1度  
もないよね。信頼関係みたいなのがあったのか、オレたちを  
放任する度量みたいなのが、父さんにあったのかもね。

でね、ユースを「野村川湯小学校」にしようとしたときだっ  
てね、ちょっとは相談したような気がするけど、名前を小学  
校にしたいんですけど、みたいなことをね。相談というより  
も、そうしますよ、みたいな追認だよ。そしたら「ああ、  
そうかあ」だよ。いいね、ともいわないし、ダメだともも  
ちろんいわない。オマエたちのやりたいようにやっていけ、っ  
ていう感じだったと思う。ありがたいよね。

F●小学校にするとって、部屋名も変えたし、校舎に看板  
を作るのも、全部、なーんにもいわないし、指示もない。宿  
泊者名簿も校舎毎に変えて作ったりして、こうしたい、とか、  
細かな説明もしなかったし、勝手にやっちゃったのを見て、  
後から父さんたちがついてくる、みたいな感じで、ホントに、  
ホントに怒られなかったね。

もうオレたちに預けちゃった、その方が楽だったかも知れ  
んし、みたいな感じだったかもね、変なヤツらがヘルパーに  
来ちゃったなあ(笑)、というかね。

S●どうせ1年で終わるから、というのも父さんから聞いた  
かどうか、オレははっきりしてないところもあるんだけど、  
オレはこのユースが何年も続いていけばいいなあ、なんてこ  
とは、その時点ではまったく思ってもいないわけだね。

とにかく後のことは、全然、考えてないんだから。今年、こ  
の夏が楽しきやいいワ、と刹那的にしか思っていないわけなん  
だね。

F●今から思うと、それが結構、パワーになったかもしれん  
よねえ。

父さんも母さんも、それにオレたちも、運命共同体で、よし、  
この1年で燃え尽きるぞ！みたいなね。そういう勢いとか、  
一体感があったかも知れんなあ。

結局、上田の父さんは、76年から78年の3年間、ペアレ  
ントをやって、79年に美幌に入院したんだよねえ。もしそ  
れがなかったら、ずっとユースをやってたかも知れんよねえ。

S●当時とはとにかく、ユースが閉鎖されるなんてことは、ユ  
ース側の問題であって、オレには関係ないわけだね、だからオ  
レはなんにも思ってもなかったね。

F●オレにしたら、えっ、1年で終わるって、ラッキー！っ  
て感じ。好き勝手できるな、ってさ。

ユースってのはなんぞや、ってのは、真くんとはよく話し合  
ってたけど。桃岩荘とかニセコなんてのが頭にあって、それ  
を越えるには、はちゃめちゃにしようぜ、みたいになっていっ  
て骨格が形作られていったんだと思うよ。

S●とくに後半、よくいったのは、だんだん連泊者がたく  
さんできてきて、そういう連泊してる人たちにお願いをして  
たのは、1泊で帰る人たちとも仲良くしてね、というメッセ  
ージだったよね。だから、オレたちは単泊の人たちを意識して、  
輪のなかに入れて旅を楽しんでもらうようにしてたつもりな  
んだよ。

それから、元々あのユースを小学校にしようとしたのはね、  
よくは覚えてないけれど、真ん中にグラウンドがあって、校舎  
が散らばって建ってて、あのロケーションなのかな。どちら  
からともなく、学校みたいだよなって、いいだしたんだらう  
なあ……？

F●キャンプファイアの焚き火はさ、あれは父さんがはじめ  
たんじゃなかったのかなあ。ということは、あれは父さんの  
アイデアってことだよな。

オレたちがはじめて川湯を訪れた1974年当時は、真っ暗  
ななかでのミーティングだったからねえ。で父さんは、バッ  
クアップしてくれて、暗いところはダメだろうということで、  
どこかに木を採りに行ってさあ。あれは全部、父さんがやっ  
てくれて、オレたちにのっかってくれたんだよな、いわば父

「直ちゃんに最初に会ったとき、『あんな人は、私はイヤだ』といわれたんだよな」（真くん）



さんは、3人目のヘルパーみたいなもんでね（笑）。

S●オレたちとは、父さんとも母さんともそうだし、上田家の皆さんとはまったく違和感もなく、最初っからじっくりと来てたからね。兄さんも姉さんともね、いい感じだったし。ただ直ちゃんだけがなあ、一番最初にオレに会ったとき、「あんな人は、私はイヤだ」といったんだよな（笑）。ちょっとガツカリしたかなあ、ギクシャクというと、まあ、それぐらいじゃねえかあ。

F●だからオレたちは、直ちゃんには嫌われないようにしてたよな。

S●そうだよな、なにせ直ちゃんが一番偉かったんだからさ（笑）。それとね、ミーティングはね、最初は人も少なかったんでね、食堂でやってたんだよな。で、掛け合いの漫才のようなスタイルになっててね。で、父さんが今度、このふたりは漫才師としてデビューするんだあ、みたいなことをいっててね。そうするとね、結構、ホステラーは本気にして信じてさあ（笑）。そんなふうに父さんは、ぼそっと、面白いんだよ（笑）。

F●あー、そうだね、確かにいってたなあ、そんなことを（笑）。

S●で、人が多くなるにつれて、外でやるようになっていったんだよ。

F●初っばなから飛ばして、なにをやっても受けてたよな。フォークダンスは、ヘルさん、パーさんの時代からやっていて、それしか知らなかったから、それは継承してやることにして。

で、フォークダンスをやって男女が、どうもどうもこんにちは、とかいいながら入れ替わっていきつつ踊って行って、そこで口説いて下さいよ、って話をするためには、もっとその前から、ポーンとのっていった方がいいんじゃない、ということになって、それで多分、旗を作ったんだと思うよ。まず旗踊りをやってから、ってことでさ。

S●……硫黄山音頭は、硫黄山をふたりで歩いていてね、マップみたいなのを作ったらどうだ、なんていってたら、そしたらフッコがいきなり、「山に登って～」って歌い出してさ。ウンチを踏んじゃった、なんていうもんだから、アツ、面白いねえって話になって、じゃあフリ付けしよう、となったんだよなあ。で、みんなで踊ろう、となったのよね。

F●あれの最初のところは、欽ちゃん（萩本欽一）のだからね、出だしの部分はね。

それで、花いちもんめをはじめたのは、いつ頃からだったんだろうなあ？

S●うーん、全然、覚えてないなあ……。

F●もうひとつ、ミーティングにワン・パーツを入れようということになったんだろうねえ、多分。それで子供の頃の遊びがいいな、となったんだろうか？

S●……そうなんだろうね。それでだんだんミーティングの手応えが、それなりに出てきていてね。そのうちにホステラーが、口コミで来てくれるようになったしね、そうなってくると、実感としてもものすごく手応えを感じたよな。

でね、雨なんかで外でやれない日があるでしょ。そうすると、ホステラーがすごく残念がってくれてねえ、そのために来たのに、みたいなのがあったよな。となると、オレたちうまくやってるな、という気にもなったしさあ。そりゃあ、そういう気にもなるよなあ。

F●もう、オレたち天狗になってたもんね（笑）、完全に。オレたちは、今、北海道で1番だ、みたいなね。実際に、旅行者が読む情報誌みたいなのに、8月7日に七夕をやって野村川湯が1番だ、みたいなのを読んだとか聞いたりしてたから、もう天狗でしょう。

S●桃岩荘に泊まった人たちが、川湯の方が面白いよってしてくれてたし、ね。そんな時は、嬉しかったなあ。

「もうオレたち、完全に天狗になってたもんね」(フッコ)



F●オレたちが川湯を出る時なんて、桃岩から来いよ、とか誘われて、スカウトされたもんね、行かなかったけど。そうやって、結構、道内で川湯は噂になっていったみたい。

## 上田家の人々と、その後

S●結局さ、あれこれいっても、ヘルパーをやってモテたいというのはあったんだよ。男女関係なくね、人にモテたいというのがあるんじゃないのかなあ。そりゃあ、知らない人たちと親しくなってさ、それで慕ってきてくれれば嬉しいしさあ。オレたちだって、ヘルさん、パーさんが大好きでね、惚れてたわけだからさ。知らない人たちと出会って、人間関係が築ける魅力があるといい換えてもいいのかもねえ。

F●オレは覚えてないけれど、真くんがいうにはね、オレはオマエに、帰れ、っていわれたんだぞ、っていうのよ。オレは全然覚えてないけどさ、その原因ってのも、もう忘れちゃったけど……。

S●「オマエはなにしにここに来た、帰れ！」ってフッコにいわれたのよ。

F●その原因を、ホントに忘れちゃってね(笑)。ほんのちょっとした、なんでそんなことくらいでそこまでいわれなあかんのや、ってことくらいだったと思うよ、……多分。

S●結構、ユースにいると女の子にモテちゃうもんだからさあ、田舎の青年がそうやってモテてちやほやされたら、そりゃあ、いい気にもなっちゃうでしょう。

そんなんで、女の子とふたりで散歩に行ったりした素行不良を、フッコから注意されたんだよ。私、帰りたくないワ、とかいわれてさあ、泣かれたりして……、アレ、違うかなあ？

とにかく簡単にいうとね、ユースに対する思い入れがね、オレよりもフッコの方がちょっとばかり強かったんだろうね、今から思えばね。

……そりゃあねえ、オレもいい気になっちゃってさあ(笑)、なった、なった、そりゃあそうだよ(笑)。フッコも同じだと思うけどさあ。

F●オレは、自分には甘いけど、人は厳しく非難するからね(笑)。だって、ふしだらなことをしようと思ったら、いくらでもできたと思うし、でも、そりゃあいかんでしょ。

だから、ユースにいる間はね、ミーティングとかで思いっきり騒いでたし、いわゆる性的な衝動みたいなものは、オレは完全に抑えきってたといっていると思うよ、リリイというメス犬もおったしな(笑)。

S●あのね、やっぱりここはユースだ、というのが頭にしっかりと置いてあるんだよね。オレたちも、変なところが真面目でね(笑)。10時には消灯だ、寝なきゃいけないとかね、それが絶対に離れずにあるから、だから女の子と散歩に行った程度みたいなのはあるけれど、それ以上はないし、なにかしようとも思わなかったしね。えっ、違う？(笑)

やっぱり、それだけ川湯というユースが、オレたちは好きで、大切だったんだろうね。なによりユースを守りたかったし、それに父さんからの信頼を裏切れないし、余計な心配もかけられないでしょう。それにフッコに叱られたときは、オレは猛省したもんね。あっ、こりゃあいかんワ、と思ってねえ(笑)。F●オレたちはやっぱり、根は、真面目なんやって。父さんや母さんに叱られたことも、オレはまったくないしね、ヘルパーとしてちゃんと精勤してたってことだよ。

S●オレは1度だけ、阿寒湖の方にホステラーたちをユースのバスに乗せて遊びに行こうとしていて、運転手のオレがついスピードを出しちゃってね。そんなときに横に座ってた父さ



コラージュ制作 ネズミ (藤原夕歌里)

んから、「真くん、ちょっと出し過ぎだあ」って、ちょろっといわれたね (笑)。……それだけ。叱られたといえば、それが唯一。

兄さんは、最初っからオレたちを全部受け入れてくれたんでね。ユースの受付をやってくれて、兄さんが来てからは、オレもフッコも外に出られたんで、会計とか事務とか一切やってくれて、とても助かったよね。兄さんはいつもにこにこしてるし、ホントに兄さんって感じの、寛容な人だよ。……感謝しかないよ。

F●直ちゃんの人柄はね、結構、辛口なんだよ (笑)。かなりキツイよな。そういうのにいつも、オレたちはガンとやられていた感じがあったよね。

兄さんは、すーっと来て、すーっと馴染んで浸透していく感じで、痒いところに手が届いてなんでもやってくれたからね。楽というか、便利? (笑) というか。オレたちが、やりたくないことを進んでやってくれたからね、ホント助かったよね。

S●兄さんが、オレたちと一緒にって騒いでたりしたら、あのユースはダメになっただろうしさ、反対に、オレはこの息子なんだぞ、みたいなのがちょっとでも前に出ててもダメだったろうし。そういうことから分かるように、あの人はとても賢明だし、気持ちの広い人だよ。まさに北海道の大地みたいな人だわ。

F●上田家の人たちは、なんでか知らないけどみんなオレたちを信頼して後押ししてくれたよね。こうしろ、ああしろもまったくないし。

父さんたちは、それまで誰か別の人と組んでユースホテル経営をやったというわけでもなく、オレたちがはじめてのヘルパーで、すべてが初の試みだから、ユースってなんかよく分からなかったんじゃないの? (笑)。あれ、なんか変だなあ……と思いつながらね。

そうだなあ……、オレにとっての上田の父さん母さんは、世話になったというだけじゃなくて、もっと深い思い入れがある、ってことなんだよね。

父さんは、気遣いの人で、持てなし上手だと思うよ、優しいし。

それにオレたちなんて、結局は、ホステラーを楽しませるための駒として、お釈迦様のように父さんの掌のうでで動かされてた、ってのもあるんだろうしさあ。そうやって使ってもらって、嬉しいよね。それと母さんに感謝してるのは、とにかく料理上手で、なんでも美味かったよね、とくに味噌汁は、オレのお袋の味にもなったし。だからいよいよ川湯を出るときにお願いして飲ませてもらったのも、やっぱり味噌汁だったんだよ。

いわば上田の父さんと母さんは、オレにとって第2の父母で、育ての親みたいなもんなんだよ。だから感謝とか、ありがとうという凡庸な言葉でなんかとてもいい現せない、深い思いが胸の奥に沈んでいて、それはずっと、なにがあっても変わらないねえ。

S●オレもフッコも、学校の夏休みに来たアルバイトじゃないから、大袈裟だけど結果出さなきゃ帰れないくらいの、変な覚悟はあったと思うよ。そんなふたりをどーんと受けとめて、いつも少し離れたところから見てくれた父さん母さんには、絶対、頭が上がらないよね。

当時は「お世話になりました」だけど、今はホントに「ありがとうございました」だよ。オレもフッコも野村川湯小学校は特別で、絶対なんだ。そしてそれは、あの父さん母さんじゃなかったら出来なかったものであり、よくぞペアレントでいて下さいました、だよ。考えてみると、感謝の気持ちは今が一番強いかもしれないね。だってこうして集まって、お互い老けた顔を笑いあってこんなに幸せな気持ちになれるのは、しみじみ父さん母さんのお陰だあって。おふたりへの恩返しができるとすれば、42年経ってもオレたちは仲良しな川湯っ子だよって、伝えられることかな。

F●そうだよな、オレもそんな感じ、しみじみそう思う。

S●それでヘルパーをやった翌年、77年の夏は、オレたちは弟子屈にいて、ユースのすぐ近くにいて、今度は、自分たちのやりたい夢を追いかけてやろうとしてたんだよ。だから、ユースには、オレは行ってないよ。

F●バイトしながら、オレたちは民宿を作ろうと思って設計



この対談は、懐かしいユース仲間たちが集まって公開で行われた。その後は大宴会へと移行し、フリートークは深夜まで延々と続いた。真くんは「いいちこ」で大いに酔っ払った。

図を描いてた。それが忙しかったんだろうねえ。でもオレは何回かは、ゲストとしてユースにも行ったりしてたような気がするけど。の一ま君とミーティングをやった覚えがあるしさあ。

S●それにさ、ユースにはその年の顔というか、色があって当然だしね。先輩ヘルパーだぞ、みたいな、そういうのもオレは絶対にイヤだしさ。

ユースにはその年のカラーがあるし、その年だけのホステラーも当然いるしね、精神を引き継いでやっているとはいえ、オレは毎年、別もんだと思うんで。

ただそれでもね、野村川湯小学校というのが継承されてそこにあるのは、ものすごく嬉しいわけで。だから正確に言えば、あえて行かなかったっていう気はないんだけど、あえて行こうともしていなかった、ともいえるのかな。

F●オレは76年から77年にかけての冬にもユースにいたからさ、お手伝いという感覚で、ミーティングにも出てたと思うしね。

ところで、オレたちが弟子屈に作ろうとしていた民宿は、結局、挫折はしたけれど、人と人との入れ替わりみたいな感じの、あっちとこっちを往き来するみたいな宿という意味で、「花いちもんめ」という名前にしよう、と決めてはじめてんだけど。でもね、ようするに、北海道に残りたいな、という気持ちが根底にはあったんだよね、きつと。

それで民宿を作って、川湯のユースがなくなるもんやと思ってたもんだからね。ユースがそのまま続けば、ユースに残っていたんだろうけれど。

野村川湯ユースが存続してて、積丹のかもいみたいだね、その後5年、10年と続いていけばよかったんだけど、ユースがなくなっちゃうんなら、民宿でも作るほかないよねえ、……だよな？

S●うん、そりゃあやっぱり自分でやる宿って、ほしいよね、って思ってたね。好きにできるもん。ホントに憧れ。で、ちょうどたまたま知り合った旅仲間が、北海道で民宿とかはじめてヤツとかもいたんでね、それにも刺激されたし。

で、弟子屈に土地がある、って話があったんで、これはチャンスだなと思ったんだね。

……それにしても、楽しかった時代だよな。全然、もちろん悔いはないし。

お陰さまで、今がこうしてあるから、悔いがないともいえるんだろうけど。でもね、川湯があったからこそ、いろんな人とのつながりができてるし、それで今があるから。もし川湯がなかったら、違う形にはなってただろうけど、オレにとっては、川湯にいた頃は誇れる時代だったといえるなあ。

そりゃあさあ、もちろん今でも時々、川湯のことを思い出さ。いつも前向きな印象としてオレのなかに色濃く残っているし。……あの頃はモテたよな（笑）、とかね。

F●オレにとっては、川湯イコール北海道だね。

北海道が、すべて川湯につながっちゃうほど、川湯の存在は大きいよね。

父さん母さんはもちろん、上田家の皆さんにはとても世話になったし、重くて、分厚い1ページなんだよ。

S●オレとフッコなんて、そんな大したこととしてなくてね、ひと夏を楽しんだってことなだけだよ。でね、残念ながら野村川湯ユース・ホステルは廃止されてなくなってしまったけど、思いっきりバカな時間をともに過ごした仲間がたくさんいたことと、その思い出を今でも大切にしている仲間たちがいることは、オレたちの財産でもあるんだよ。

しかも、今でもこうして情熱と才気ある人たちがちゃんと残っていて、みんなで協力して集まって「野村川湯小学校」の写真文集が作れるだなんて、オレたち川湯の仲間は、なんて幸せなんだろうと思うよ。

そしてなにより、そういう基盤を作って後ろからしっかりと支えてくれてた父さんと母さん、上田家の皆さんには、改めて感謝の言葉しかありません。ありがとうございました。

(構成・編集部)

(2018年5月 岐阜県関市にて収録)

# 奇妙な仕事とイクラ丼の味

フッコ (横関福好 Yokozeki Fukuyoshi)

ある日の朝、オレが道を歩いてたら、2台の車がキューって横に止まって、「ねえねえ、お兄さん、どこ行くの?」って聞かれたんだよ。「別に、どこかに行く予定はないんですけど……」といったら、「じゃあ、時間ある? 急だけど、バイトしない?」って誘われたので、オレは軽く、「いいっすよ」と返事した。すると、「じゃあ、乗って、乗って」とかいわれてねえ。で、なぜか鞆だけを後ろの車のトランクに入れられて、それで、オレが前の車に乗り込むと、ドアを勢いよく閉められたんだよ。後部座席にオレと並んで座ってた若い男に、「で、これ、なんですか?」と聞いたら、「いやあ、分からないんですけど……」というし、「えっ、オレたちどうなるの?」と尋ねると、「いや、よく分からないんですけどお」ってことで、そのまま連れて行かれたんだよ。で、すごいダダっ広いところに着いて、そしたらそこに大きな穴が空いていて、オレたちは降ろされた。この穴には

電線が埋まってるから、とにかく穴を埋めてくれればいから、とかいわれて。で、ふたりで作業を黙々と続けたら、そこそこ埋まったんだね。やがて夕方近くになると、また車がやって来て、おおよそ埋め戻された穴の様子を眺めて、「おっ、これならいいじゃん、これでいいさ」とかいわれて、「ありがとねえ」とか礼までいわれちゃって。バイト代はいくら貰ったかなんて、まったく覚えてないんだけど、ちゃんとくれたのは確かで、じゃあ、飯を喰いに行こう、って、また車に乗せられてね。それは多分、根室の近くのような、港町だったと思うんだけど。そこから車で10分くらいの、どう見ても酒場というか、スナックみたいな、船員たちがお客として集まるようなところに連れて行かれたんだよ。そこでオレたちの雇い主が、カウンターの椅子にどかっと座って、「おっ

かあ、おい、おっかあー」とか奥を覗きながら、叫んでたね。そしたらお姉さんが出てきて、「おい、飯を喰わせてやってくれや」とか、いってさ。しばらく待っていると、「こんなもんくらいしか、今はないけど」とかいいながら、山盛りの、てんこ盛りのイクラ丼が目の前に、ドンと出てきたんだよ。で、ひと口頬張ってみたところ、これがたまたま美味くてねえ。最高の味を、腹一杯食べさせてもらったよ。思い起こせば、あの日は1日中、現実と夢の間で起こった出来事が同時進行してるような、妙にふわふわした感覚だったんだよなあ。その雇い主は、オレがイクラ丼を食べ終えたら、ちゃんと駅まで送ってくれたんだと思うよ。あれは、どこの駅で、オレは、それからどこへ向かったのかも、もうまったく思い出せないんだけど。ひょっとしてあれは夢だった? ああ、そうかもねえ。(談)



# 川湯に着いたら

# オーチャードグラス

オーチャードグラス (Orchard Grass)とは、カモガヤの英名で、イネ科の多年草、牧草として広く利用されている。レストランの名に、なぜその名を冠したかといえば、オーナーの武山秀樹が、かつて川湯レジャー牧場の主であったことと、満更、無関係ではなかったはずだ。旧国鉄の川湯駅舎の雰囲気や留めつつ、装いをレストランに改めて利用し、千客万来にに応じている。すでに釧網線沿線ではつとに知られた名店となり、殊に看板メニューのビーフシチューを食すために、遠路を訪ねるグルメたちも後を絶たないという。傍らで川湯や周辺地の観光案内、地域文化の情報発信に貢献している。野村川湯ユース・ホテルの番外史など直に主人から聞きながら、口腹を満たすのも一興である。(文・不如帰)



ビーフシチュー



姉妹店 森のホール



手作りケーキ

JR川湯駅構内 オーナー武山秀樹(元川湯レジャー牧場経営者) 営業時間 10:00-18:00 定休日 毎週 火曜日  
野村川湯小学校連泊者には摩周湖の水で珈琲淹れます。



のちに日付板まで作られて、毎朝、出発前に撮影するのが恒例になった卒業写真は、1976年当時は、その都度、適宜に集合がかかって撮影されていたようだ。とくにこの日は父さんと母さんも加わり、これが「卒業写真」の原点となったと思われる記念碑的なワンカットだ。



■ 卒業写真 ■













# 「俺の川湯」より

らんさあが、ユースに置いたノートから採録

1979年1月から8月にかけて、らんさあ（国分秀夫）が、旅の日記のような、または備忘録や訪問記録として、川湯を訪れたホステラーたちに、自由に、気ままに、感想など書いてもらうためのノート「俺の川湯」をユース内に置いていた。

旅先なのだし、多少の感傷は誰にでもあるにしても、今、そこに書き残された文章を読むと、書き手たちの、当時のドタバタや焦燥、あるいは胸のなかの揺れなども伝わってくるようで、面白い。短い、ちょっとしたため息のような言葉の端々に、人生の断片が語られているような気もするのだ。気になった数編を抜粋し、採録しておきたいと思う。

冬から夏の間、約8カ月間ユースに置かれていた割に、書いた人はそう多くはないな、と感じたのが、回収時の、らんさあの正直な第一印象だったそうだ。

## 出て行っちゃった女王蜂

ゴミ（萩原正徳 Hagiwara Masanori）

元旦に女王蜂とけんかしちゃったですよ。  
これというのも土方さんがこないからでしゅよ。  
女王蜂は出てっちゃったですよ。彼女もひとり旅の方が楽しいって、気づいたんでしゅよ。彼女も1歩、大人に前進したでしゅよ。ゴミもガンバですよ。

（1979.1.2「俺の川湯」より）

## ……もしかすると

ながたにえん＝コーネリアス（氏名不詳）

北海道の20日間、またこのYHで2週間を過ごしてしまった。

ものすごく早かった。でも、夏に来るよ。

もしかすると、初夏にくるかもしれないぞ。

（1979.3.30「俺の川湯」より）

薄っぺらな大学ノートなんかでなくて、分厚く立派な、ビニールカバー付のこのノートは、旅立つ前に買って準備して川湯に向かった、と、らんさあはいう。置いてみたら、どうかなあ、なにが書かれるかなあ、という単純な動機のみで、他意はない、ともいう。「俺の川湯」というタイトルには、とくに思いや意味もなく、なんとなく、つけたらしいが、わずかに排他的な、やや占有的な雰囲気を感じるのは、気のせいだろうか。



## 遅しき男たちよ、「岩保木」の読み方を知れ

野上秀人（Nogami Hideto）

けさは、くしろからきました。くしろのゆーす・ほすてるにとまって、いわぼつき（注・釧路郡釧路町／標高120m）というやまにきました。とてもたかかったです。

そしてから、きしゃにのって、このかわゆにきました。とてもさむいのです。

でもこのかわゆのゆーす・ほすてるは、とてもよいところです。

こうちょうせんせいもいいひとです。おもしろいひとがいておもしろいんですよ。このゆーす、ぼくはすきになりました。まだわかかったら、あるばいとをやって、はたらきたいです。（1979.2.17「俺の川湯」より）

## できれば入学したかった野村川湯小学校

大橋正美 (Ohashi Masami)

北海道！ それは実に雄大で美しい。オレは生まれながらの道産子だが、自分の骨もこの土地にうずめるだろう。

朝のうちはすごい風雪にあって死ぬ目にあった。16年間もここに住んでいてもちょっとないようなものだ。北海道以外の人ならたぶん1歩も歩けないだろう。

川湯の風呂がとてもイカッタ〜。本当は今日中に斜里まで行きたかったのだがここにとどまってとてもよかった。

1年前にここに来たが、その時は霧のために摩周湖を見ることができなかった。今回も時間のつごうで見ることはできないだろう。

オレもできることなら、野村川湯小学校に入学したかった。ざんねん。

今日の泊まり客はオレと相棒のふたりだけ。ちょっとさびしいが、それもいいだろう。

このとうさんとかあさんは、とてもいい人たちだ。キミもおもいきり甘えるといいだろう。そしてまた必ずいつかここに来ることをオレと約束しよう。

春休みを利用して来たオレたちだが、あと4日しかオレたちにのこされた時間はない。その間で、なんとか稚内をまわって帰らなければならないのだ。それではみんながんばれよ。

(1979.3.26「俺の川湯」より)



## オレの朝立ち

ナガサカ (長坂 肇 Nagasaka Hajime)

オレの旅立ち さあ 帰るぞ  
今夜は「大雪10号」YH

(1979.4.3「俺の川湯」より)

## 尻にお注射

ももひき (=キリン 長谷川浩司 Hasegawa Koji)

あばしりの病院へ行ったら、おしりにちゅうしゃされた おわり

(1979.3.20「俺の川湯」より)

## ついに泊まった川湯

フォード (小川正寿 Ogawa Masatoshi)

ついに川湯に泊まってしまった。

でもここはいい。

きのうは16歳(実は20歳)の京女とさわぎまくった。かわいい子でした。

俺はサイクリスト、自転車はいい。

自由だ、フリーダ。

俺は北海道でとれたから、北海道のきびしさを、よお知っとる。

夏の北海道だけが北海道じゃない。

それを知りたきゃ、冬に再び来るべし。

どこでも白くつづく雪が君をまっている。(1979.8.6「俺の川湯」より)

## その後、あなたのポストはどうなった?

長井康江 (Nagae Yasue)

恐怖の野村川湯YH、連泊の「おしどまり」です。

またアホになってしまった……。もうこれで学校職員のポストがあぶなくなったようすな。

またきます。いえ、またくると思います。できればまたきたい。(1979.8.14「俺の川湯」より)

## ユースがなくなるかも!

H. K (氏名不詳)

3連泊して今、出て行きます。

ここがなくなるかも! と聞き、とても悲しいです。

とても楽しく、とても周りが美しく、よかったです。

さようなら。(1979.8.16「俺の川湯」より)



























## 1970年代とは、どんな時代だったか

私たちが北海道を旅して、川湯で騒いで、笑っていた主に70年代後半は、どんな時代だったんだろうか。データを見よう。

70年代に入ってから、日本のファッションは多様化したといわれるようだ。なかでもとくに注目されたのが、ジーンズだった。当時は、まだGパンとか呼ばれていて、普段着のアイテムとして完全に定着した。一緒になってトレーナーやオーバーオールなどもかなり流行った。アメリカからテニスやサーフィンも入って来て一般に流行りはじめ、ファッションにも影響を与えていった。

「an・an」の創刊が70年、「non-no」は71年創刊で、「アンノン族」と呼ばれる人たちも、またこの頃にニュートラやハマトラも生まれた。ベルボトルというラッパ型のズボンや、ホットパンツもかなり流行ったが、残念ながら北海道ではあんまり見なかったような気がするよなあ。

ユースでのあだ名や、流れていた歌などにも、時代の流行が機敏に取り入れられていたようだ。「欽ちゃんのどこまでやるの!？」(76年から)、「3年B組金八先生」(79年から)が放送されはじめた。フォークソングが大流行したのは周知の通りであり、併行してキャンディーズが大ブレイクしていて、「スター誕生!」はアイドルを次々と輩出した。

70年代半ば頃からはニューミュージックが台頭し、バンドブームも起こった。矢沢永吉(75年からソロ)、アリス、

中島みゆき、松山千春、ツイスト、それに78年にサザンオールスターズが「勝手にシンドバッド」でデビューした。ピンク・レディー、沢田研二(71年からソロ)などの活躍も目立った。洋楽では、アバ、カーペンターズ、ボズ・スキャッグス、イーグルス、クイーン、エルトン・ジョン、ビリー・ジョエルなど。

食品では71年に日清カップヌードル、75年にペヤングソース焼きそばや、きのこの山が売れ、78年はとんがりコーン、赤いきつねと緑のたぬきなどがヒットした。

社会・文化に関心を転じてみると、田中角栄首相逮捕(76年)、有珠山噴火(77年)、ダッカ日航機ハイジャック事件、インベーダーゲームが大流行したのは78年。79年には東京サミットが開かれている。「およげ!たいやきくん」がミリオンセラーになった76年には、村上龍の「限りなく透明に近いブルー」もベストセラー。ガルブレイスの著作「不確実性の時代」が売れた78年は、ピンク・レディーの「UFO」「サウスポー」「モンスター」の3曲もミリオンになっていてビックリ。意外にも松山千春の書いた本「足寄より」が、79年の書籍のベストセラーの10位に食い込んでいて、当時のファン層の厚さを感じたりもする。(か)

# 川湯 in 東京

1979.3.4

野村川湯のイン東京は、これまで4度開かれた。

礼文の桃岩荘や積丹のかもいなどのコースでは、度々、東京や大阪でホステラーたちが集まっている、と聞き及び、では、川湯でも、と一気に沸騰したのではなかったか。それに多少の、それらのコースへの対抗心もあったかも知れないし。

会場となった新宿の西口の広っぱは、当時、シロツメ草なんかも生えている広大な空き地で、もちろん集会や利用の許可も求められずに、のんびりとした場所だった。

今はもう、すっかり整備されて変貌してしまっただが、たまに横を通ると、ここで「硫黄山音頭」を踊ったことがあったよなあ、と、時々、思い出すこともある。



副都心として高層ビルが建って林立する現在の西新宿。空はうんと狭くなった。



2018.4.15



ところで、4度目を終えてから、イン東京が開かれなかったのは、これで止めよう、というような決断があったわけではなく、ただ、なんとなくやらなくなったのが、真相のような気がする。形を変えてなのだが、4回目以降のイン東京は、非公式に、小振りな規模になったとはいえ、今も時々、あちこちの居酒屋などで開かれているらしい。



1979.10.14



広場で踊り、唄い、ひとしきり騒いだ後は、大体、新宿駅の方へ、騒がしく列を作って歩いたりしたものだ。

途中、マイアミなど収容力のある喫茶店に移動して、全員が違う注文をし、店を慌てさせたりしたこともあった。そこで時間がある人は、飽きるまでみんなと話をし、懐かしみ、笑った。北海道やら九州からも、仲間が集まって来ていた。夕方近くになると、誰かのアパートになだれ込み、玄関先は脱いだ靴であふれていて、ドアを締めるのにひと苦労したほどだ。そしてなお、喋り疲れて眠くなるまで、情熱は止まなかった。



1978.9.23



1980.11.2

# 背中 中で座る椅子

背あたりの良さを追求した椅子です。  
背もたれの両端に付けた短めの肘あてが、好評です。



川湯連泊者特典

連泊者には名前入れサービス



素材 北海道中川町産クルミ材  
巾460X奥行520X高さ760

工房 宮地

代表 宮地鎮雄（後輩） 北海道上川郡東川町西2号北10番地  
TEL.FAX 0166-82-2167 miyaji86@agate.plala.or.jp  
<http://www13.plala.or.jp/kouboumiyaji/index.html>

# ■ 川湯遺産 ■



# 連歌集 北の風光

和ちゃん (林 和子 Hayashi Kazuko 旧姓・成田)

受け付けの熱き彼らに巻き込まれ つい連泊の波にのりけり  
広やかな青さの下に集まりぬ 眩しいほどのあの夏、君ら  
朱朱と照り返す輪の呼ぶ声に 誰が抜けたか花いちもんめ  
教室の裏側に咲く花の名を 教えて去りぬそれからは見ず  
ひとり行きまたひとり行き見送るは 鮮やかな緑と風と光  
川湯発弟子屈行きのヒッチレース ゴールはいつもの人形の家でと  
かまぐらの暖かさ知る白い夜 ギター音聞こゆ雪の気配に  
\*  
とつとつと北の言葉を話すひと 響きそのまま甦り来る



# 旅費の足しにでも、 と 思 っ て

たみ子さん (桜井たみ子 Sakurai Tamiko 元「人形の家」オーナー)

ユースに泊まってる人たちは、たくさん店に寄ってくれて、そりゃあ嬉しかったですよ。夏場はとくに多くて、それにお正月の前後もね。

お金もないのにさあ、と、いつも私は思っていて、だからちょっとでも旅費の足しにでも、ってね、ホステラーにバイトを頼んでやってもらったこともありましたよ。バイトといえば、そうねえ、真君が長かったかなあー。そんないろんなことが、とても懐かしいです。

揺椅子の堅さが心地よく 優しくあなたを抱きしめて  
膝にひろげた「愛の詩集」 心の葛藤もひときわ燃える  
白く塗り込められた窓飾りの雪も 素朴な温もりを伝えます

木肌の巧みにかもすエキゾチズム

人形の家

洒落た茶碗をもった手に 香る熱い珈琲……心も溶けて……

皆さん、ありがとう、ありがとう、ありがとうね。(談)

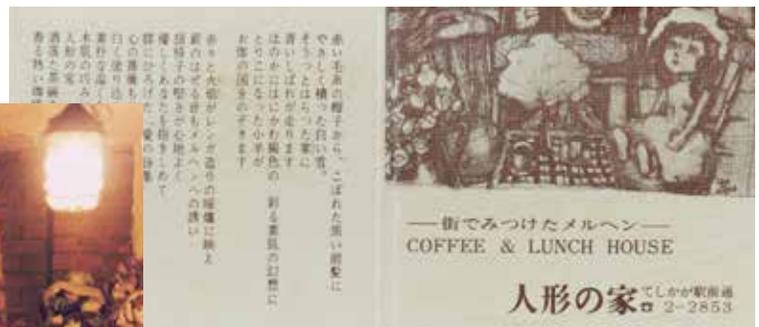


仕事の合間をぬって食事する、たみ子さん。あー、腹減ったあ。



仕事に精を出すアルバイトの真くん。

川湯の文化遺産



店に相応しい、美しい詩が印刷されたブックマッチのカバー。



# 俺が書いた「林間学校」の看板

センパイ (多田 淳 Tada Jun)



79年夏に、コウハイと北海道へ向かった。川湯へ行ったのがいつ頃だったかは定かでないが、10日頃に行ったような気がする。そして、なぜか連泊。何がそうさせたのか、まったく記憶にない。俺はここに残るといって、コウハイを巻き込んだような気がする。気がつけば後半はヘルパーとして、夏の終わりまで川湯にいた。

80年もまた川湯へ向かう。野村川湯小学校の看板は、白く塗り消されていて唖然とした。そして、野村川湯林間学校と書き直した。ひと夏中ヘルパーをして、馬鹿騒ぎをしていたような……。何年も来ている常連の仲間たち、79年、80年に来た新しい仲間たちと過ごした夏が懐かしい。

そして、イン東京。夏に出会った仲間が再び集まるなんて、いい思い出だ。まだ都庁もなく、新宿中央公園に原っぱが残っていた頃だった。帰り道、一列になって新宿駅方面へ歩いた覚えがある。

イン日間賀の日間賀島は、コウハイの故郷の島で、誰が言い出したのか？ 開催することに。それでも20人ほどが集まってくれた。なにをやったのかほとんど覚えていないが、ワイワイガヤガヤと騒いでいたような。少しだけ記憶に残ってるのは、コウハイの実家の周りが、ほとんどコウハイと同じ名字だったことと、キリンが定期船がなくなった後で、漁船に頼み込んで島へ渡ってきたような気がする。当時の写真を見て、何人か分かる顔はあるが、分からない人が大部分。懐かしさだけで、記憶が薄れていっている。時間が経つとこんなものかな。大学卒業後、しばらくは連絡を取っていたが、だんだんと疎遠になってしまった。

これを機会に、また顔を合わせることが出来たらと思う。顔と名前、ニックネームが一致しない人がかなりいるかもしれないが、会ってみたいものだ。■

## 川湯の文化遺産



コウハイの実家がある日間賀島（愛知県知多郡）で開かれた「野村川湯イン日間賀島」（1980年3月）での記念撮影。



川湯の文化遺産

# 1977年の 暑い夏の日

フッコ (横関福好 Yokozeki Fukuyoshi)

「人形の家」でバイトしてる頃、オーナーのたみ子さん経由の話として、弟子屈飛行場（町営 2009年廃止）の前の土地を使ってみないか、といわれてね。

それで、よし、民宿をやろう！ と思ったことがあった。それが「花いちもんめ」なんだよ。自由集団、なんてコンセプトだったっけな。

その頃、ドロンコとか、デロ、エエロウとかいう、北海道をうろろうしてるヤツらがいて一緒にやってた。泊まる場所は、「はまちょう」の2階でみんなで雑魚寝してて、そうこうしてるところに真君も戻ってきて合流してね。

最初のハードルは、まず町役場に建築確認申請をすることだったんだよ。それで建築図面を、ずーっと描いていて、でも、何回も、何回も持って行ってもいろいろといわれてダメ出しばかりされていて、ちっとも許可が出なかった。

そんなある日、夏場の、暑ーい日があっさ、北海道なのにえらくクソ暑い、もう牛も羊も溶けそうなほどの猛暑だったんだよ。

その日もオレは図面を持って役場に申請に行ったら、たまたまクーラーが壊れていて、扇風機をぶんぶん廻し、職員は汗をタレ流しながら茹で蛸のようになって仕事してた。

すると窓口に出てきたいつもの担当者が、暑いなあ、とかいいながら汗を拭きつつ、またオマエかあ。ああ、何度持って来てもダメなんだよなあ、はあ、もうしょうがないなあ……、とかいわれて。オレは、今日もこりゃあアカンな、とあきらめてたら、担当者は「まあいいわ、作れ！」とかっていきなりいわれちゃって、異常な酷暑の日に、するっと確認申請が下りちゃった。

そうした偶然とオレたちの努力が重なって実り、いざ作るようになったんだけど資金の問題もあったし、とりあえず整地だけはしとこうよ、ってことでね。

大工さんにブルを借りて、ちょっと整地したくらいで、やっぱり、まず資金を稼ごう、という方針になった。それでオレたちは、次に製糖工場にバイトに出ることにしたんだよ。

77年の、暑い夏のことだった……。 (談)





## 野村川湯の「野村」は、野村徳七だ！

硫黄山（標高508メートル）はアイヌの言葉でアトサ・ヌプリといい、裸の山の意味だ。

ハイマツとイソツツジが生える程度で樹木は棲息していないから、裸の名称にも合点がいく。この活火山の硫黄に最初に目を付けたのは、釧路の網元だったという。明治のはじめ頃のことらしい。だが事業としては軌道に乗らず、じきに採掘権は安田財閥へと移った。以降、囚人を坑夫として働かせて採掘が活発になり、また安田鉱山鉄道（後の釧路鉄道）を敷設しての輸送もはじまった。ところが中毒による死者が出たりしたことや、資源枯渇などのために、明治30年には採掘がいったん中止されている。

昭和に入っすぐ、新たに跡佐登（あとさぬぶり）鉱業株式会社が設立されて、操業が再開し、戦後1951（昭和26）年には、北海道で水銀鉱山なども経営していた野村鉱業株式会社の子会社となってなお採掘が続けられ、

1970（昭和45）年に閉山した。やっここで「野村」が出てきた。この野村とは、野村徳七によって築かれた日本の15大財閥のひとつ、野村財閥のことだ。戦後、財閥は解体されたが、その流れを汲む野村証券、野村不動産、アセットマネジメント、りそな銀行などのいわゆる旧野村財閥の系列に野村鉱業も含まれる。ということは、野村川湯の「野村」は、野村徳七の野村なのである。野村川湯ユースが日本ユース・ホテル協会（JYH）に登録・開設されたのが1964（昭和39）年なので、操業の規模はよく分からないが、当時、まだ硫黄の鉱山は採掘中だったはずだ。

斜陽となりつつある硫黄採掘を見ながら思案し、その脇には、恐らく、坑夫たちが利用していた宿舎や食堂、風呂など施設や運営ノウハウがあり、これを巧く流用して、世の中に流行りだしているユース・ホステ

ルをひとつ経営してみてもどうか、と、ひょっとしたら聡い野村の若手社員が社内で提案したのかも知れない。実際にユースで使われていた「2年生校舎」は、坑夫たちの福利厚生のための映画館だったというし、敷地内には野球グラウンドや神社まで建てられていたという本格仕立てだったのだから。

日本のユースは、戦後1951年にJYHが設立されて以降、全国で開業が相次ぎ、1974（昭和49）年がピークで、全国に587施設あった（2018年現在＝185館）。その後の野村川湯ユース・ホテルは、経営者（母体）など不明だが1990（平成2）年に閉館・廃業、とJYHに届けが出されているという。

なお、野村鉱業株式会社は、1975（昭和50）年に野村興産株式会社と社名を変えて、今も東京・日本橋堀留町に本社が存在し、特殊なりサイクル事業など企業活動を継続している。（ら）

# オレは、どこかに きつといる

でんしんぼー (伊藤徳俊 Ito Narutoshi)



Youtubeの動画や写真をみても、自分が写っているのかもわからない状態です。

でも確かにその時期に、そこにいたはず……???

記憶はある。友野は知ってる、みゆきちゃんや毒りんごがいたと思う。こまわり君の漫画から飛び出てきたような、軍曹さんがいた記憶も。ほぼ同時期にいたオコッペ、ユースではサザンのアルバムが、毎日流れていた。

レストランでバイトしていて、とんかつを大きく見せるため、木の棒でたたいて伸ばしていた記憶。白樺の皮を剥いてきてハミガキのかわりに使ったり。

しかし、動画の中に自分をみつけられません。

それでも、卒業写真文集に参加していいのかな？ いや、参加させてください、隅っこでもいいから、よろしくです。

(メール文より転載)

## 川湯の自然遺産

## 川湯に集う 「チョウ屋」たち

初夏の川湯には、「チョウ屋」と呼ばれ、趣味としてチョウを自らで採集し、収集する目的の、主に学生たちが全国から集まってきていた。

当時の分類では、北海道の土着の特産種とされるチョウは、15種とされていた。

なかで、大雪山系などに棲息するウスバキチョウ、アサヒヒヨウモン、ダイセツタカネヒカゲの3種と、日高山系のアポイ岳などにいるヒメチャマダラセセリは特別天然記念物に指定されていて、採集は禁止されている。となると、できれば残りの11種を全部、しかも、できればたくさん採集したいと思うのは、皆、同じだった。

北海道の東部に位置する川湯には、地の利があった。カラフトタカネキマダラセセリ、リンゴシジミなどの特産種、北海道亜種のイシダシジミ、特産種ではないものの人気のあったオオイチモンジなどの主産地や好採集ポイントは、ほとんどが道東に散在していたからだ。とくに、釧網線や廃線になった標茶線の各駅には川湯からは、都合よく出かけられ、野村川湯ユースはさながらベース・キャンプのようになり、申し合わせたかのようにチョウ屋たちが集まってきていた。

それにユースの近辺でも、たとえば目の前の国道沿いを歩けば、当時は、ヒメウスバシロ



チョウやカラフトヒヨウモン、ホソバヒヨウモンなどが容易に採れたし、リンゴシジミがヒメジョオンやセリなどの花上でしばしば吸蜜していた。

やっと雨が止み、気温が急上昇したある日の午後、ユースから川湯の温泉街に向かって歩いていたら、硫黄山の麓の、屈斜路湖方面へと抜ける脇道を見つけて入ってみたことがあった。

その林道は割と幅のある未舗装で、周囲は樹々に覆われていて漏れ陽が差し込み、その日は、雨後という条件も加わってとくに湿気を強く感じた。それに、たまたま道路工事用のシャベルカーが入ったばかりのようで、表面の土を薄く削ったようになっていて、もわっとした土の臭いや、強い草いきれでむせ返っていた。

歩きはじめてすぐ、大型のタテハチョウが樹

冠から旋回しながら降りて来て、あるいは膝高の辺りをなめらかに滑空する影たちが、いくつも、同時に視界に入ってきた。

黒い翅に、人の前歯のような白い文様がくっきりと際だって見えた。オオイチモンジだった。日本では、本州中部のごく一部と、北海道にしか分布していないチョウだ。青臭い草と土の臭いに誘引されて、林道に降りて来ていたのだ。

しかも北見のチミケップ湖や丸瀬布などの有名な採集ポイントは、その年は大凶作で、あまり採れていなかったから、ますます高揚した。それから2時間ばかり、ネットを振り続けた。幸運だった。

ユースに戻ってその成果を控えめに話したのに、別の場所に出かけていた多くのチョウ屋たちから酷く妬まれたのは、いうまでもない。

(の)

# 北歌の色

ナガ (長坂 肇 Nagasaka Hajime)

## 朝のレジャー牧場

毎朝早く起きて、馬の餌やりと手入れが終わる頃、ユースから乗馬&牛乳のホステラーがやってくる。いつもど  
ういう訳か女の子とおとなしい男の子が多かった。  
前の晩のミーティングで知り合った人もいて、馬を引い  
て一周する間の会話がとても楽しかった。気持ち良い川  
湯の朝だった。

因みに大概の良く知っている連泊連中は朝来ない。夏の  
昼下がり、タダで馬に乗ってユースで戻っていくのだ。



## 3月の野村川湯

春の高校選抜の頃、ガラス張りの川湯ユースから見る踏  
切は信じられないたくさんの雪。ユースには「夢の人」  
というアルバムがあり、イルカのなごり雪が流れてる。  
当時の北海道でいろんな旅行者を見てるけど、姫路の方  
から革ジャン着て旅してるのは珍しいなと思った。  
その年の夏、あの変な革ジャンの紹介があって、僕の牧  
場生活が始まった。



川湯の自然遺産

## 白熊探検隊

人形の家から川湯への帰り、キリンと弟子屈から汽車に  
乗ると、そこに白熊探検隊がいた。

この人は僕の高校時代の先輩なのだが、いつも薄汚い。  
彼はどこかで知り合ったらしい、綺麗な女性と一緒にい  
て、彼女はソフトクリームを食べていた。ここからがキ  
リンさんの本領発揮!

弟子屈から川湯到着まで延々とウンコの話をし続け、ソ  
フトクリーム女性と白熊探検隊を唸らせたのだった。

今だにその先輩からはお小言を頂戴するのだが、当時写  
真好きの彼は写真集を何冊も出すようなカメラマンに  
なって夢を实らせた。

## 大瀧詠一

その年に「A LONG VACATION」は大ヒット。若旦那は  
ユースから来たかわいい女の子二人に、自分のスバル  
360を洗車させていた。

「カナリア諸島にて」を聴きながら牧場の木陰で女の子  
たちがはしゃぎながら車に水をかけている。キラキラし  
た夏がそこにはあった。



## VanVan

牧場に入った初めての夏、VanVan という 50cc のバイ  
クがあった。僕はそれを借りて、いつも足代わりに使っ  
ていた。

ある日ふと気がつくトラベルの VanVan50 シールの 50  
の文字が剥がされている。あれ?と思ひそこをよく見ると  
薄く 75 とある。ナンバーの登録は 50cc だし、原付  
で登録しちゃったんだなきっと。そんないい加減な、良  
い時代だったんだ、70年代は。

牧場のあぜ道を走る VanVan75、あの夏の気持ちよさと  
VanVan の音は、今でも身体に残ってる。



## 松山千春のパンツ

牧場での日々。観光の女の子を乗せて馬引き、当時人気だった松山千春の話題に。俺、友達だからチハルのパンツ持ってんだ〜、嘘ばかりの若旦那。

「えー、見せて見せて！」なんて彼女たちに言われ、適当に自分のパンツ見せてたんだろうか。

汚いパンツを見て満足して帰っていった女の子も、孫を抱いてニコニコしているような良いおばあちゃんになっているのだろうか。

## ホームにて

牧場の若旦那ヒデキは、中島みゆきの「ホームにて」が大好きだった。当時僕が持っていたSONYのカセットデンスケを牧場のラウンドスピーカーに繋いで、毎日100万回くらいかけていたはずだ。

良く冷えた瓶のコーラと煙草とホームにて。

強い日差しの昼下がり、向こうから馬タダ乗りコンビ、とものとキンタがやって来る



## 飛行機が落ちた

夏のある日、セスナ機が隣の牧場に落ちた。バイトのナカムラ君が客待ちのレジャー牧場で青い空を眺めていると、飛行機が降りてきて、あれよあれよと言う間に牧草畑に着陸し、そのまま盛上った農道に突っ込んで止まった。ナカムラ君が「あー！ あー！ あー！ ヒコーキ落ちたー！」と騒いでいるうちに消防や救急とかが集まって、静かな牧場は大騒ぎとなった。

やがて新聞記者も来て、牧場のおやじさんにインタビュー。

「空を見てるとヒコーキが落ちてきてあれよあれよという間に・・・」と臨場感たっぷりに応えていたのだが。おやじさんは丁度その時うんこをしていて何も見ていなかった、のをナカムラ君は知っていた。



川湯の自然遺産

## 牧場の夜

牧場2年目の夏。僕たちバイトは原野の中の古い一軒家に寄宿していた。夜眠りに帰るだけで誰も掃除などしない。ユースのミーティングが終わった後、皆が遊びに来て、大貧民をやったりした。

牧場には信じられないくらい沢山の蠅がいて、その家のトイレは、蠅の死骸だらけ。蠅を沢山踏まないとしゃがめない。オグスチャックヨシミ達はキャーキャー言いながらも結構楽しんでいるようで、そんな所で用を足していた。

男連中は満点の星空を眺めながら、外で立小便。 ■

# 川湯発 野村川湯ユース・ホステルの今昔

## 今日までそして明日から

ヒデキ (武山秀樹 Takeyama Hideki)  
「オーチャードグラス」オーナー

今から40年ほど前、硫黄山の麓にちょっとオチャラケた、面白い若者たちが集うユースホステルがあった。数年前までは、建物は朽ちながらも面影を残していたが、今は跡形もない(ちなみに東京の不動産王という奴が公園を作るといって撤去したが、ここは阿寒摩周国立公園である)。

まだ建物があつた頃、あの場所に立つと遠い昔のことなのに、ほんの少し前の出来事のように懐かしかった。受付小屋は大きな白樺にもたれかかり立っていた。ぼろぼろの畳、ミーティングで使ったギター、野村のシンボル旗、入り口わきの壊れたベンチ、拓郎のレコード、沢山の白黒写真。そして思いを寄せた落書き、「ねずみ大スキ」。ねずみとは女なのか男か、会ってみたいものだ。キャンプファイヤーの跡、高田さん(青森在住)とやった焼肉の跡など、当時の痕跡がノスタルジックに最近まで残っていた。

私と、野村川湯の関係を説明しよう。当時、私の家はユースの近くで観光牧場を経営しており、馬引きのアルバイトを募集すると野村川湯から手伝いに来てくれた。仕事の内容は、馬の世話、客を乗せた馬をひたすら引く。何時から何時ではなく、朝から寝るまで、時給1000円ではなく1日1000円、今の時代ではブラック牧場といわれますね。でもあの頃は問題視されるわけでもなく、労使互いに、楽しく過ごしたような気がします。



ユースに宣伝・勧誘にやって来た牧場のスタッフたちと。

ユースの紹介で、またバイトのお兄ちゃんがやって来ました。

私の父親は最初、皆アルバイトのお兄ちゃんと呼びます。名前を覚えきれないのでしょう。

背丈のそう大きくない、顔の不健康そうな、痩せたアルバイトのお兄ちゃんでした。

父「どっから来たの？」

お兄ちゃん「埼玉」

父「馬に水やれえ」

お兄ちゃん「とりあえず「ハイ」

父「あと、仕事教えとけえ」

私「わかった」

父「埼玉のどこ？」

お兄ちゃん「草加です」

父「あの石みたいなせんべいな〜、カナヅチで割らあな、食べねえべや〜」

……ちょっと話を盛りましたが、大体こんな感じです。このアルバイトのお兄ちゃんが、長坂肇です。その夜、長坂君のいろいろな話を聞きました。いつ、どのようにして来たのか、目的は、食事のことなど、ビール片手に根掘り葉掘りと。鉄道写真を撮るために夏休みに入り周遊券で上野から北海道を目指した、ごく普通の撮り鉄の旅人であるが……。

ここからが凄かった……。食事はどうしたの？ 上野発の夜行列車に乗り、頭の中は中島みゆきの「ホームにて」が繰り返し流れ、北海道へ向かう。いわずと知れた貧乏旅行、腹がへると1粒のピーナッツを3時間かけて、舐めるように食したそう。ピーナッツ5粒で札幌到着、駅より徒歩で北海道大学の生協に向う。最大の目的は360円のサービスランチであり、ここから長坂君の撮

## 川湯の自然遺産



野村川湯レジャー牧場の「馬車」に乗る、いつも陽気なヒデキ。

り鉄の旅が始まるのだ。

まずは札幌から網走へ。途中下車しながら網走着、腹が減ると8時間掛けて札幌に戻るのだ（ピーナッツ2粒半）。向かうは360円のサービスランチである。上野～札幌～旭川～網走～札幌、彼はピーナッツ7粒半、北大生協のサービスランチ2食で3日間撮り鉄の旅を楽しみ、札幌～釧路～札幌、札幌～稚内～札幌、と彼の撮り鉄の旅は続いたが、釧路線に入ったところでお金が尽き、野村川湯より牧場へアルバイトのお兄ちゃんとして派遣されて来たのだ。あれから40年も付き合いが続くとは、当時は思ってもみなかった。

長坂君とはよく夜のミーティングへも、牧場の営業のために行きました。初めて営業に行った時、長坂君が「どうも～」と声をかけると、受付小屋の中から若者が出て来て、「お、お、お、お、どうも、どうも、あと20分な」。彼を見て私は、一瞬、ムンクの「叫び」を思い出した。ミーティングも終わりに近づき、拓郎の「落陽」を大合唱、そして長坂君の牧場営業が始まりです。馬の乗り方を、身体全体でやるパフォーマンスは大うけ、次の日の朝はユースから沢山のお客さんが来てくれた。営業部長・長坂君ありがとうございました。

友の君とも40年途切れず、付き合いが続いている。野村川湯の時から、多くの友人と繋げくれたのも友のた

る。交友は派手なものではないが、いつもどこかに存在し、たまにポツとイボのように出てくるが、決して邪魔にならない存在である。これからもこのイボは大事にしたい。友の、これからもよろしくお願ひします。

最近まで、友のの長男イブキが川湯に来ていた。必ず高田さん、オグスとペペのことが話題にあがり、30年以上も会っていないのに、なぜか身近に感じる。

最近仕事忙しいよう来ていないが、来ると3ヶ月から半年間、バイトのお兄ちゃんをしながら川湯温泉地域のイベントを手伝ってくれる。パソコンから大工仕事まで器用にこなし、不器用なおじさん、おばさんを助けてくれるのだ。今では川湯地域でイブキを知らない人はいない。友人の息子とあれこれと関われるのも楽しいものだ。移住を勧めたが若いお姉ちゃんがないといって帰ってしまうのは、残念だ。

こうして文章を書きながらあの頃を思う。ビーチサンダル、チューリップハット、ほつれたジーパン、川井君のちょっと酸っぱい臭いの黄色いTシャツ、長坂君の伝説のアフロヘアをニサニサ笑う今日この頃です。

世情も世相もすっかり変わってしまった。複雑でややこしい時代をパタパタ、ブツブツいいながら、明日からもこうして生きていくのだろう。■

## 川湯の自然遺産



昼間、暇があると、こうしてユースチームが牧場に遊びに行き、悪いヤツラ・チームができあがる。しかし演出なしで、自然にこのポーズが取れてしまうのはなかなかである。ドラマのワンシーンみたいだ。

# 硫黄山のフサフサ精

タンツボ（後藤功史郎 Goto Koshiro）

ヘルパーさん、ヘルパーさん、起きて下さい、起きて下さい!!  
夢の中で、遠くからマイクの声が聞こえてくる。  
ハッと目を覚ますと、周りで寝ているヘルパーたちの安らかな寝顔の数々……。  
仕方なくモゾモゾ起き出して、出発したくても出来ない宿泊客が待っているところに行き、お金の精算や宿泊証明印を押したりする。  
前夜のキャンプファイヤーで初めて出会った男女のグループが、仲良く一緒に出発するのを微笑みながら見送るのも楽しみだった。  
毎晩、毎晩、なぜあれほどまでにエネルギーを燃焼させて歌い、踊り、カップル作り？に精を出せたのか……。記憶をたどっても、そのエネルギーの根源は思い出せない。  
しかし、ハッキリ覚えていることがある。  
野村川湯YHの近くの硫黄山に登り、ヘルパー皆で掘り進めて温泉が出て来たために小さな風呂を作った日があった。暇な時にひとりで登って、湯舟に浸かりながら、その夜は何組カップルを作るか、ニヤニヤしていたフサフサの青春時代。  
あのエネルギーの元は、硫黄山の迸る噴火の如き地熱の精ではなかったか。  
当時その精は見えも聞こえもしなかったが、ヘルパー皆の迸るほどのエネルギーの根源は、確かにそこにいたのではないかと、楽しく想起する。  
当時の姿を友のお陰で、写真やライブ映像がネットで見られた時は、腰を抜かすほど驚いた。何とか腰は抜かさなかったが、40年経って肌ツヤツヤなのに、髪の毛だけは抜けている……。やっぱり硫黄山のフサフサ精は、確かにいたんだ?? ■



硫黄山に作った「野村川湯温泉」を拡張するための工事をする連泊者たち。手前は古い風呂桶。1979年

# 人目を気にしながら 口ずさむ「旗踊り」

ミリ (村松美里 Muramatsu Miri 旧姓・相田)

本当にこの先にユースはあるのだろうか……。不安な足どりで凸凹道を歩いていくと見えてきたのは、木造校舎。出迎えてくれたのは、ロン毛に髭面、眉無し、なにやら怪しい面々。

今まで描いていたユースの概念は、一気に打ち破られた。早速、荷を解き、トイレに行ってみたら、仕切りの壁には川柳の落書きが刻まれていて、確か「急ぐとも心静かに●拵 外にこぼすな白玉の露」……だったか、あるいは「吉野の桜も散れば見苦し」とも書いてあったような。ここは一体、なんだ！ と思った。

その後、満天の星の下でのキャンプファイア。一度聞いたら忘れない硫黄山音頭、切れ味バツグンの旗踊り……。

気がつけば、川湯の世界にどっぷりやられていた。当然のことながら、1泊の予定は3泊になり……。後ろ髪引かれる思いで川湯を後にしたことを覚えている。

40年経った今でも、あの時間、あの空気を思い出すたび、胸が熱くなる。

ミーティングで思いっきり踊った旗踊りは、えも言われ



目にあまる高歌放吟、無謀な酒池肉林を繰り広げたりするホステラーたちは、校長先生(父さん)に叱られて、こうして校舎の外に立たされ、ウナ垂れることもあったりして、ね。

ぬ心地良さがあったし、あの解放感ときたら、私の躰のなかに熾火のように残っており、それが時々、疼くのだ。その証左として、街中で旗を見かけると、人目を気にしながらも「ハータ持って、ハータ持って」と小声で口ずさむし、あの硫黄山音頭においては、今でもきっちり歌詞を記憶し歌える川湯女のひとりとして、密かに都市に潜伏し、逞しく生きているのである。■



# 川湯名物 キャンプファイア

チョビ (堀江 均 Horie Hitoshi)

私は、の一ま君 (田中仁さん) の後輩という縁で、大学2年の時、1977 (昭和52) 年の夏にはじめて川湯を訪れました。

この時は、到着するなり父さんにバイトをお願いし、ドライブインで働かせてもらいました。もちろん夜はミーティングにも参加していたし、他のホステラーとも交遊し、楽しく過ごせました。きっとそういう刺激的な日々や体験が面白かったんでしょう、翌年の夏には、8月20日から1カ月間ほど、川湯に滞在しました。

そういえばあの時代は、旅行とはいわずに、旅というのが普通でしたよね。

野村川湯は、ひとり旅の人も多くて、真面目に自分探しをしながら放浪している旅人たちが集まってくるような、そんな場所だったんじゃないでしょうか。

悪ふざけもたくさんして、笑ったし、一方で、シリアスな話をしようと思えばそれはそれでじっくりとできて、同じ旅人としての仲間意識も強く、一体感もありましたよね。私にとってそういう場所は、とても居心地がよかったです。

それに屋外の広場で、キャンプファイアを囲みながらミーティングをやってるユースなんて、ほかに知りませんしね。名物ですよ。ああいう雰囲気は独特だったし、そんなところが川湯の魅力なんじゃないでしょうか。

8月が終わろうとする頃、友のやテツヤたちが帰ってしまうと、後を受けてマッキーを助け、私もヘルパーのひとりに加わりました。

学生の立場でも、ホステラーとしても、いつも私は受け身の姿勢だったのに、一転、人を楽しませ、する側に立場が入れ替わりました。ミーティングも精一杯やりましたし。

翌朝、ホステラーから、お世話になりました、ありがとう、とかいわれて、それまで感じたことのない達成感のようなものが、ふわっと私のなかに湧き上がりましたね。そして私が帰るときになり、父さんから給料袋が手渡され、とても驚きました。食事や宿代の面倒をみてもらうだけで充分なのに、まさか対価がいただけるなんて思ってもみなかったからです。私なりに、ホステラーには来年も川湯を訪れてもらえるよう、いい思い出を作りたい、楽しんでもらいたい、と一生懸命ではありましたが。

そんなことなどが父さんに評価されたようで嬉しくて、しかもわずかばかりではあっても、それがお金という形になった手応えは、今も私の記憶に刻まれてしっかりと残っています。

……それと蛇足ながら、あだ名の元になった私の鼻の下のヒゲは、就職してから20年ほどは生やしていませんでしたが、40歳を過ぎた頃から、再び伸ばしていますよ。今ではずいぶんと、白いものが混じるようになりましたけどね。(談)



川湯の無形遺産

# 「風呂焚き爺さん」 を口ずさみ続ける ひとり旅

でんちゃん (新田紀男 Nitta Norio)

40年の月日が流れたはずなのに、あの頃の出来事が鮮明に、仲間の笑い声とともに思い出されます。当時は八戸に住んでいて、冬と春だけ川湯に出発していました。なんと呼ばれてたかが思い出せませんが、春に出会って人には「でんちゃん」と呼ばれていた別名「新田」です。

長坂さんから依頼があり、少し思い出話でも。

冬の摩周湖に行った時、ふと立ち寄った川湯YH、年末近かった時ですね。フッコや真くん、しものせきなどいかつい男子、オーバーオールのにりちゃん、くみちゃんなどなど素敵な女子がいっぱい集まっていました。常連さんなんだろうな～と思いながらも、少しづつ会話に参加させていただき、歌を歌い、川湯駅に出迎え、見送りと、とても楽しく過ごせました。……そんなきっかけから行き始めた川湯。

思い出1：弟子屈「人形の家」へのヒッチハイク合戦。ペプシコーラのトラックが止まってくれて、向かう途中で荷台からペプシをサービスしてくれた。

思い出2：大晦日、みんなで一晩中大声で歌い、新年日替りしてから川湯の神社へ初詣。車が来ると道路脇に1列に並んで「おめでとう～」を連呼して、一台一台止め

てたなあ。

思い出3：川湯の銭湯、夜みんなで銭湯に行き（男子、女子双方貸切状態を確認してから）洗面器に汲んだ水を女子側に一齐にバシャ～ン→「きゃ～っ」→洗面器をかぶって湯船で待機→仕返しバシャ～ン→申し訳ないので声だけ「きゃ～っ」→停戦。

携帯ももちろんない時代、帰ってから写真送ったり、手紙書いたり、お互い遊びに行ったり来たり。そんなこともあってか、3月の川湯で出会った(可愛い)女の子と(ほとんど会ってなかったのに)結婚して、今は秋田に暮らしています。

もちろんひとり旅は続けてます。徒歩宿やゲストハウスを使いながら青春18で九州行ったり、年中ふらふら北へ南へ。

……そんな近況もあわせて、思い出話とさせていただきます。

お父さん、お母さん、なおちゃんもみんな元気との話も教えていただき、YouTubeはじめ先頭に立ってまとめて頂いている「とものさん」ありがとうございます。

ジュリー、ホンダさん、ナヨロ……みんな頑張ってるんだろうな。なかなか会う機会はありませんが、お互い共通の青春時代の思い出としていれば良いんでしょうね。

これからも「友よ」や「遠い世界に」「風呂焚き爺さんの歌」を口ずさみながら、ひとり旅を続けます。

ともの！ ありがとう！ まとめ役大変でしょうが、よろしくお願いします。■



# 川湯で迎えた誕生日

レイコ (川村礼子 Kawamura Reiko)

はじめて川湯に立ち寄ったのは、高校生の時、友人とのふたり旅でした。真君とフッコに出会ったのも、その時です。

大方の人たちがそうであるように、最初は1泊だけの予定が3泊になり、このまま川湯に気持ちを残したままでも……、とあって私たちは川湯を後にしたのです。そして結局、また川湯に戻りました。ヘルさんとパーさんに、会いたいと思ったからです。

すると、ヘルさんとパーさんの後ろにくっついて歩く、真君とフッコがいました。そして、ヘルパー代理みたいなことを一生懸命やっていて、そのふたりの熱心さには、ほんのちょっとだけですけれど感心しましたね。少しだけ……カッコよかったかも。

でもそれよりも、ヘルさんとパーさんに、人間的な魅力があって私の気持ちを引きつけたのです。パーさんは、空や天文への造詣がとくに深く、ミーティングでの話題の選び方も出色でした。後に航空管制官になって航空会社に勤めている方です。ヘルさんは今も北海道に住んでいて、私たちとはいまだに交流があります。ふたりの話は、当たり障りのない表層的なものでなく、いつの間にか本質にまで及んで深まっていき、豊かな内容でしたね。もちろんユーモアの精神もあって、いつもそれらが

絶妙なバランスを保っていました。そんな大人っぽさが、きっと女子高生の私たちの気持ちに強く響いたんだろうとも思います。

8月1日になりました。この日は、私の誕生日でした。ヘル・ダッシュとパー・ダッシュのフッコと真君は、私のためにその日、釧路まで出かけて行って、バースデーケーキを買ってきてくれたのです。

まさか旅先で、川湯で、こんなふうになんか誕生日を祝ってくれるだなんて、私は思ってもいなくて、驚きました。誕生祝いの歌を聞きつつ、ろうそくの光の揺らめきを眺めていたら、もう胸が一杯になって思いがあふれそうでした。

本当なら、百の言葉を費やして「ありがとう」を伝えたかったのに、当時の私は、それをうまく表現できずに気恥ずかしいような感じもあって、押し黙ったままでした。感情表現が未熟だったんでしょう。以来、その日の誕生日のことは、私のなかにずっと残っていて忘れられませんか。

ただし真君たちからは、わざわざ釧路までケーキを買いに行ったのに、お礼のひとつもいわないヤツなんだよな、と、今でもからかわれます。

そしてフッコが私をバイクに乗せて、川湯駅まで見送ってくれての別れは、やっぱり辛かった……。まさに「旅の終わり」でした。

そんな野村川湯コースは、私の大切な場所で、淡い思いがギュッと詰まった特別なコースホテルなのです。(談)



川湯の無形遺産

後左から3人目が、ヘル(板垣秀雄)さん、続いて真くん、フッコ。1974年

# 母さんから教わった 石狩「ナベ」の味

ナベちゃん（土川貴美子 Tsuchikawa Kimiko 旧姓・渡辺）

私が川湯に行ったのは、のりちゃんとふたりで。旅の計画のほとんどすべては、のりちゃんにお任せでした。だから宿泊先で次の予定地を尋ねられても、まったく答えられなくてね、完全な依存状態でした。

そんななか川湯に泊まったら、最初、真君とフッコのあの熱烈歓迎振りに戸惑ってしまって、つい身構えて、私は引いちゃったりしましたねえ。だってあの暑苦しいほどのパワーと、さあ、みんなも一緒に！ みたいなのところかな。

でもね、帰るときには、派手な、気持ちのこもったお見送りをしてくれて、次の予定地からまたすぐに出戻っちゃって、そこから私たちの旅のプランがズレちゃった。そうしたら礼文のユースに父から電話が掛かってきて、「予定と違うやないか！」とか、凄い剣幕で怒られたことがあってね。なんせ私はひとりっ子だったし、おまけに父親は厳格で容赦がなかったから。父の過保護と愛はほどほどにしてほしい、……ホント参りましたよ。

その年の冬にも、また川湯に行きました。

お正月だったから、お餅が出る。でも、実は私は、お餅

が苦手なのね。それならばとって母さんが、私のために餅の代わりにイモ団子のぜんざいを作ってくれたのよ。これがまた絶妙に美味しくてさあ。

そしたらこのジャガイモが美味しいんだからって、父さんがわざわざ私の家まで送ってくれたことがあって、で、その美味しさに今度は両親が感動しちゃったのよ。

するとウチの爺父は、ここはひとつ、川湯の上田さんになんとしてでもお礼をいわねばなるまいな、となっちゃうわけ。それで初夏になると、北海道のツアー旅行に参加しちゃって、わざわざ川湯のホテルに泊ったみたいなのね。お礼をいいにユースまで行くつもりで、すっかり準備を整えてた。そしたらそれに先んじて、父さんと母さんがわざわざ温泉街のホテルまで会いに来てくれたんだって。なんだか申し訳ないやら、ありがたいやらでねえ。ところでその時、ウチの頑固オヤジと上田の父さんたちは、一体、どんな話をしてたんでしょうねえ。えっ、私のこと？ やっぱりジャガイモでしょう。

それから冬にね、いつも父さんと母さんによくしてもらってるからって、和ちゃんとのりちゃんと私とで、荒巻シャケを買って行ったことがあったのね。そしたらそれを使ってね、母さんが手早く石狩鍋を作ってくれてさあ。それが舌鼓を打つほど美味しくてねえ、醤油味なんだけどさ。もちろん、母さんに作り方をしっかりと教わったのは、いうまでもありません。

……あれ？ なんか私、さっきからずーっと食べ物の話ばかりしてるみたいなんだけど、こんなんでもいいのかしら。（談）



川湯の無形遺産



## 40年前の思い出

ダックス (加藤仁久 Kato Hitohisa)

若い頃はバイクが好きで、日本全国をバイクで旅行するのを毎年繰り返していました。

北海道を巡るひとり旅をしようと計画したとき、大型バイクよりも小さなバイクでよちよちと道内を廻ったら、きっと面白いんじゃないかなあ、と、思いつきました。当時、「ゆっくり走ろう北海道」という安全推進キャンペーンがあって、黄緑色の地に、白抜き文字のステッカーを貼って走る車もたくさんいました。スピードの追求が一部で見直されはじめていた時期で、それに若者特有な反骨精神みたいなのも、あったのかも知れませんね。とにかく私は、ほとんどの車やバイクの後塵を拝しながら、70CCのダックスというバイクに跨がって、ゆっくりと北海道に向かいました。

私の家は印刷会社を営んでいて、父がたまたま北海道のお客さんと一緒に、川湯温泉に泊まって湯浴みする予定になっていました。そんなわけで、旅の途中の私もそこに合流しました。1976（昭和51）年の夏でした。川湯の温泉宿に1泊した私は、父たちとは別れてまたひとり旅に出発したのですが、出たすぐの峠の登り坂で、バイクが故障してしまいました。なんとか川湯のバイク屋まで引っぱっていったら、部品を取り寄せたりして修理に2週間はかかる、といわれました。お金もなく、思案顔をしてたら、バイク屋の主人が、この近くのユースでバイトを探してたから当たってみたら、と親切に教えてくれました。

それで早速ユースを訪ねて父さんに会い、駅にホステラーを送迎したり、弟子屈のスーパーへの買い出し、1日ツアーなどの運転手、さらに風呂焚きや掃除などの雑役も含めて、働かせてもらうことになりました。

私の仕事は、例えば1人1,000円で阿寒湖ツアーを企画し、付録として、普通は行くことができないオンネトーにも行くよ、と募集します。すると皆さんは交通費を計算し、川湯に戻ってもお得なのがすぐにわかり、ほとんどの人が連泊しましたね。そして結局、多くの女性ホステラーから感謝もされました。

いつも駅員に怒られてた列車の見送り、発車間際になり、連泊してた女性たちが涙を流すのを見て、ついもらい泣きしちゃったりして。朝、レジャー牧場に送迎し、飲んだ新鮮な牛乳の味も忘れられません。

真くんとフッコのミーティングでの盛り上げ方や、場の作り方に感心したこと、「人形の家」で行く度に流れていたビリー・ジョエルの曲、硫黄山に作った野村川湯露天風呂からの眺望など、40年経ってもたくさんの思い出が残っています。

今回、こうしてこの写真文集作りにも直接参加でき、また、父から私の代へと引き継いだ会社が、学校卒業アルバムをメインに製作している会社で、今回の野村川湯小学校卒業アルバム製作にあたり、印刷と製本などお手伝いさせていただくことにしました。

たまたまバイクが故障した縁が取り持ち、こうして再び、川湯の仲間たちが集って卒業文集作りをすることになるなんて、と、人生の不思議を実感しているこの頃です。  
(談)

# キャンプファイアと電灯との関係について

加古さん（加古 — Kako Hajime）

私が野村川湯YHを訪れたのは、1978年の夏と冬（だったと思う）。まだ携帯電話もデジカメもCDもパソコンも、電子メールもインターネットもテレビゲームもない、完璧なアナログ時代。ホームページやSNSという便利な道具はなく、旅人はガイドブックと口コミを頼りにYHに集う。人とのコミュニケーションは、テキストのやりとりではなく、必ず会話から始まる時代。デジタル機器と呼べるものは、電卓くらいであったろうか。あれから40年が経ち、トモノさんをはじめYHスタッフの皆さんのご尽力により、そしてSNSのお陰もあって、再び皆さんとお会いでき、このように寄稿させて頂く機会を得られたことに感謝しております。

寄稿にあたり、テツヤさんから頂いたお題は、「キャンプファイアとべんき」。さすが野村川湯！ と思ったら、「キャンプファイアとでんき」の聞き間違いでした（^\_^;）。

キャンプファイアは、歌ありダンスあり、の全員参加型の小劇場。電灯を消し、揺らぐ炎の明かりと温かさの下で、暗闇さえもそのコントラストによってステージを盛り上げる、心と心が共鳴し、笑いや感動を共にする世界。

おそらく、現代のデジタル技術、電気電子の技術を駆使しても、代えることができない世界。

YHのキャンプファイアは、多くは初顔合わせのメンバーが集うという点で、コミュニケーションの序章に過ぎない。キャンプファイアが終わった後の白熱電灯、あるいはランプの下での語らひは、メンバー同士の心をつなぐ。そして、翌日の太陽の下での野外活動では、古くからの友人と過ごしているような気持ちになっている。野村川湯YHの魅力は、何だったのだろうか？ 私も夏は出戻りを経験しているし、冬にも再び訪れている。もう1度訪れたくなる魅力とは、何だったのだろうか？

40年経った今、ぼんやりとしか思い出せないところもあるが、YHのスタッフの皆さんの「おもてなし」のおかげで、誰もが自分の居場所を見つけられる、なぜか懐かしく思える雰囲気。それによって、YHが旅の手段（途中の宿泊地）ではなく、そこで時間を過ごすこと自体が目的となれる場所。まさに小学校。それが野村川湯YHの魅力なのだと思う。

野村川湯小学校イン東京では、YHで同じ時間を過ごしていないメンバーとの交流もあったが、何故か昔からの知り合いのように思えたのも、野村川湯という場所を心の中で共有できていたからであろう。

ところで、私は、昔買ったレコードをまだ捨てられずにいるが、「旅の終わり」の入ったレコードだけは残しておこうと思う。「人と人との出会いなんていつも別れで終わる♪」という歌詞は、このデジタル時代には通用しない。この出会いはいつまでも大切にしたい。■



川湯の無形遺産

# 人生を広く、大きくしてくれたユース

川湯の無形遺産

橋本 優 (Hashimoto Masaru)

大学3回生の夏、高校の同級生5人と北海道旅行に行きました。弟子屈駅前でレンタカーを借りて、観光をしながら野村川湯ユースホステルで連泊。

桃岩荘やえりも岬のきちがいユースは噂で聞いてたけど、怪しそうな小学校の雰囲気には圧倒されてココもか？ と思ったものの、すごい楽しめたわ。全員でのキャンプファイアやフォークダンスは楽しく盛り上がったし、100人位でやった「花いちもんめ」には大感動、「もらってほしい花いちもんめ♪」は、ココだけやったな！

最後に踊った硫黄山音頭は、今もしっかりと、正確に歌詞も踊りも覚えてる自信あるし。1泊目の朝は、親しくなった仲間と車2台で摩周湖まで日の出を見にいったけど、雲が厚くて残念そうな記念写真だけが残ってるわ。

野村川湯YHの楽しい思い出が印象に残って、それからひとりで日本中を旅することになり、常連ユースも出来たりして。独身時代にはユースホステルに160泊して、会員証が本のように分厚くなって、広げると2メートル位になりました。私の人生を、広く大きくしてくれたのが、野村川湯ユースホステルでした。■



# 私 ホンダが 責任を持って配管します。

川湯連泊者には水道管1本サービス



なんと入口は自動ドア  
社員11名の株式会社。

社長の山本正吉です。



## 泉設備 株式会社

〒433-8124  
静岡県浜松市中区泉3-15-1  
TEL 053-473-2401

管工事業 水道施設工事業 土木工事業 承ります。



ユースからほど近い著名な観光地のひとつ摩周湖には、頻繁に皆でツアーを組んで出掛けていたから、思い出も多いはずだ。これは陽の出を見に行った際の記念撮影というが、はたして本当だろうか。とても早起きするとは思えない人々が、参加しているからだ。



・ 思い出写真集 ・





若者







ルビの一日





誰が呼んだか硫黄山「野グソ峠」に、新たに看板を設置する。



摩周湖から望む硫黄山はこの日は少し霞んでいた。いつも堂々としている。



だんだん無口になる。熊落としまでは、さあ、もうすぐだ。



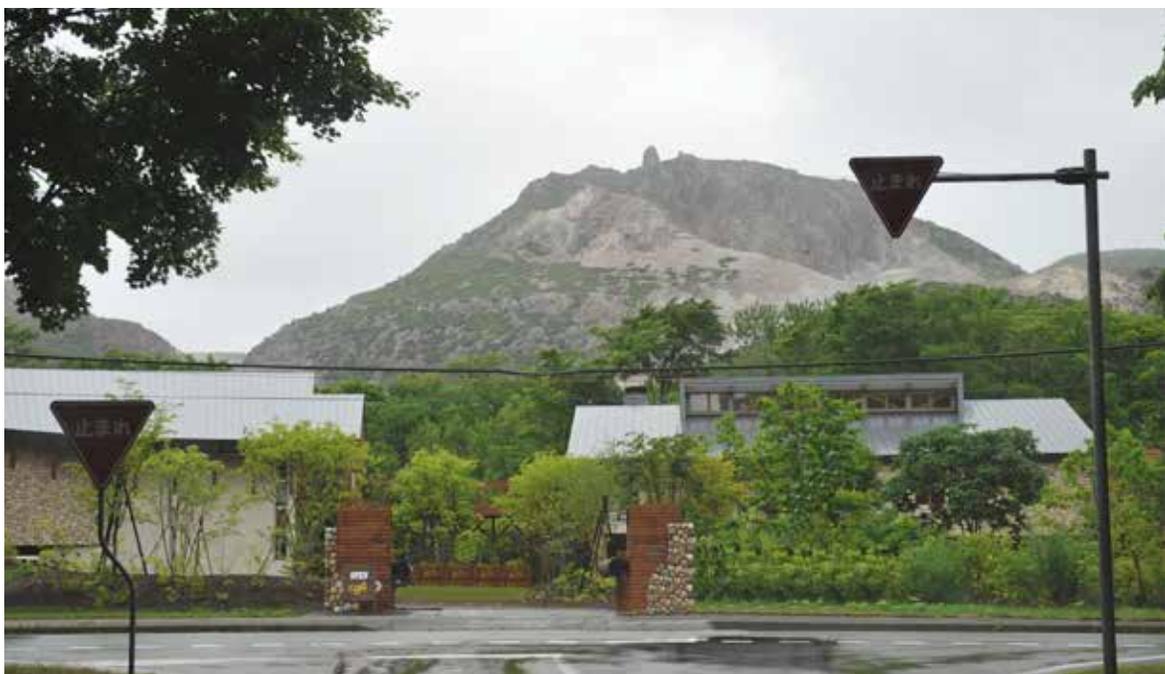
ユースのグラウンドにあったバックネット越しに仰ぐ硫黄山は、雄大だ。



ロウソク岩には、我がユースの旗が風になびいてとてもよく似合う。



人面岩のうえに立つと、身がすくんだものだ。



ユースの跡地に作られた投資家による喫茶店とペンションは、じきに閉店し廃墟となったままだ。



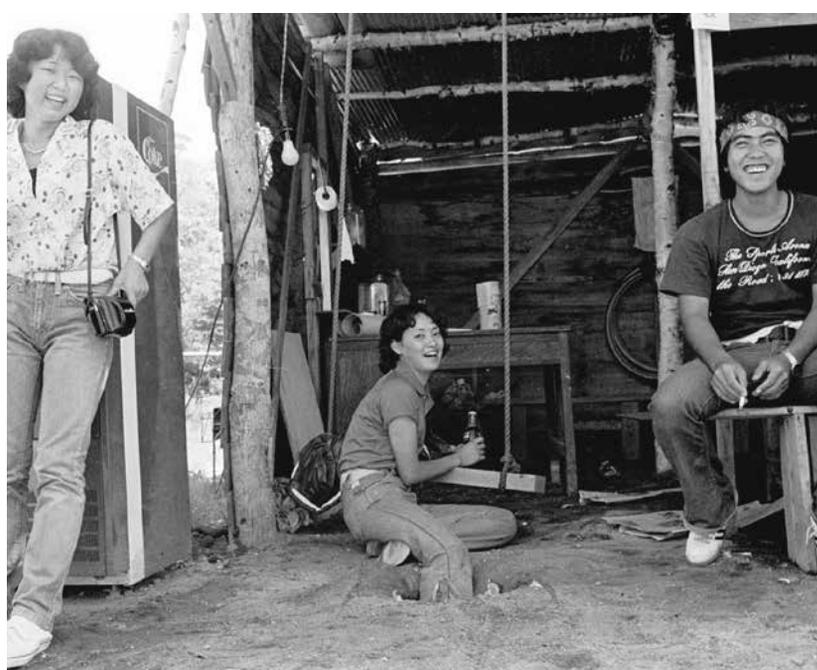
荒地にいち早く進入してくるシラカバが、いんらん広場でも勢力を延ばしていた。



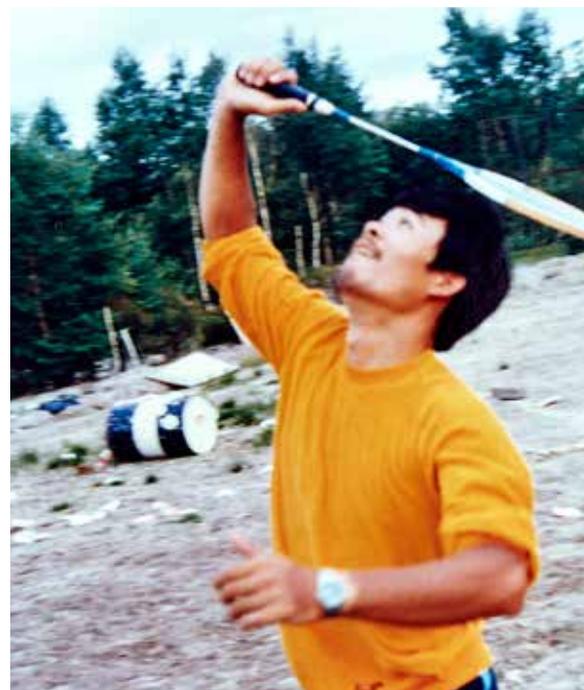
かつてのグランドから眺める硫黄山の口ウソク岩。もう風の音しか聞こえなかった。まさに、夢の跡だった。3点とも2009年7月の撮影



高田さんの愛車・ハスラーにまたがる毒を、心配そうに見るキンタ。  
これは愛なのか？



ミーティング後のこずかい部屋には、独特な火照りと残り香が漂っていたものだ。  
78



硬派なはずの土方さんが、なんだかニヤけて楽しそう。  
で、誰とやってるのサ？



ミーティングが終わると、いざ、背広を着た父さんが登場し、連絡・注意事項や、翌朝、レジャー牧場に行って馬に乗って牛乳を飲むツアーへの誘いなどがある。立て板に水である。ほんの時々、ついでに軽い冗談をいったりして、自分で大ウケする。



時々、ジェンカがどうしても覚えられない人もいたりして。意外に外国人はリズム感が悪く、列を乱したりしていたなあ。



昼間っからフッコの踊る元祖・旗踊りの足さばきに、自然に拍手が湧いた。



ミーティングに陶醉するご機嫌なナガサカ。人間なんてららら〜





しつてらっしーし



# 夕食の定番！本格カツの作り方

調理 直ちゃん（松田直子 Matsuda Naoko 旧姓・上田）  
監修 母さん（上田久子 Ueda Hisako）



材料 4人分

豚バラロース・・・・・・・・・・4枚  
小麦粉・・・・・・・・・・カップ4  
ウズラ卵・・・・・・・・・・2個  
パン粉・・・・・・・・・・150グラム  
油・・・・・・・・・・適当  
塩・コショウ・・・・・・・・・・少々  
月桂樹の葉・・・・・・・・・・2枚  
硫黄山粉・・・・・・・・・・大さじ3  
薄力粉・・・・・・・・・・適当  
  
トマト・・・・・・・・・・1個  
キャベツ・・・・・・・・・・1/2個



1, まず弟子屈のAコープ精肉部で買ってきた肉を、じっと眺める。どれほどまで叩いて薄く伸ばすかを、ここで沈黙思考し構想を固めるのである。しかし現実的には、夕食まであまり時間がないので、素早く大体的見当をつける。そして、叩きの準備をはじめめるのだ。



4, 油の揚げ温度は160度～170度。普通、油に投入したらいじらないが、薄いカツの場合、すぐに浮いてきたりするので、箸などで油のなかに押し込む。これを怠ると、いい感じの揚げ色がつかなくなる。ここは気を抜かないように、緊張感を持続して頑張るのだ。



2, 母さんからは「叩きまくって、紙のように薄く伸ばすんだあ」といわれる。厨房では、誰も母さんには逆らえない。すりごぎ、包丁の背などで肉を叩く音が響き渡れば、母さんはとても満足する。向こう側が透けるほど伸ばしたら、塩・コショウ。味付はこれのみ。



5, こんな感じに揚がるのが、理想。食欲を刺激し、美味そうに見えることが大切である。肉が生では具合が悪いが、繁忙期には150名を越えるホステラーがおり、次々と揚げなければならぬので、揚げ時間はどちらかというのと短め。揚げ色と、雰囲気で見極める。



3, パン粉は、写真のようにさらっとまぶす程度だが、揚げると意外に厚く見えるように工夫する。矛盾していてもそれをやり遂げる。つなぎはほとんど使わないようにし、肉が本来持つ粘り気を利用しパン粉をくっつけるよう努力しよう。余分なパン粉は払い落とす。



6, 当時の夕食の盛付け再現例。カツの付け合わせとしてはキャベツと、夏場、とくに安価に出回るトマトをなるべく細く切って使う。味噌汁の具は、ワカメと分葱のみ。奴豆腐は当然、夏のメニューとしてのものである。ご飯はもちろんお替わり自由で、盛り放題だ！

## コツとポイント

吉田拓郎の「人間なんて」を口ずさみながら飽きるほど肉を薄く叩くことと、揚げはじめたら浮いてこないように注意深く見守り、箸などで沈めることの2点がポイント。さらに揚げたカツは6カットにする。これが川湯の定番だ。作業を手早くするために、10枚ほど重ねて切ってもよく、その方が効率はよい。







七夕











炭火を熾してトタン板のうえでラム肉や野菜を焼いて、みんなで食べたジンギスカン。準備も食材も、父さんがすっかり段取りしてくれて、振る舞ってくれた。若い我らは、ただ肉をガツガツと貪る幸せに耽溺する。父さん、ごちそうさまでした！



■ 記憶遺產 ■

# ピーマンさんは 運命の人

タヌキ (丹羽来美 Niwa Kurumi 旧姓・平野)

私と野村川湯ユースの出会いは、……こんな感じでした。もともと北海道へは、姉(香)が友人と行くつもりだったのがダメになり、では私と一緒に、と話がすぐにまとまりました。さらに、なかなか行く機会がないだろうと思って、従妹のねずみ(中3)も誘って、3人で出かけることにしました。

北海道遊覧中、支笏湖ユースで「ピーマンですよ、ピーマンですね」といったりして、口癖なのか、変人なのかはサッパリ分かりませんでした。とにかく、えらく風変わりなピーマン(エチケットとも呼ばれる)さんと知り合いになりました。

それで明日はどこに行くの、とか尋ねられて、襟裳岬に行く予定です、と正直にいいました。すると、あそこは電車で行くのは大変なんだよね、と教えてくれて、だけど自分は急いでいるので、あなたたちを乗せて行ってあげることは出来ないから、ともいうのです。

そしてなんと、私たちを車に乗せて連れて行ってくれる人を探し出して、しっかりと交渉してくれたのです。確かに風変わりなんですけど、意外に親切な人でしたね。



また、野村川湯ユースがとっても楽しいから、行ってみたいだろう、と、話をされました。アドバイスというか、推薦みたいな感じでもあったのかな。当時は素直で、木綿のシーツのように真っ白な私たちは、すぐさま予定を変更し、一路、迷うことなく野村川湯ユースに向かったのです。

で、行ってみると、高校生の私にとって刺激の多い、今までの生活とはまったく異質な世界がそこには広がっていました。とにかくすべてがとても楽しかったのです。そんなわけで、私たちを川湯と引き合わせてくれた運命の人は、ピーマンさんなんです。行ってみたら、といってくれたあのひと言だったんですよ。ピーマンさん、ありがとうございました。 ■



滑稽・ひょうきん

# 昔も今も、 郵便局はそこにある

おばけ (大川教子 Okawa Kyoko)

1978年夏、私は道東を巡る旅をしていた。高1の時、礼文島にある伝説のユースホステル桃岩荘に泊まり、「愛と涙の8時間」というハイキングに参加した。その時の楽しさが忘れられず、大学に入ったら「北海道を電車でまわろう」と夢を膨らませていた。

そして、その時がやってきた。知床から入り、摩周湖を見て、次は阿寒湖に行く予定であった。あくまでも川湯は、通過点に過ぎなかった。

川湯のヘルパーは、当時 テツヤさんだった。川湯に、なんの思い入れのない私にとっては、1泊で十分の宿であった。

その時の会話……。

テツヤ「明日、どこ行くの？」

私「阿寒湖です。ところで、お金少なくなってきたので、郵便局に行きたいんですが、阿寒湖に郵便局、ありますか？」

確かその日は、土曜日。旅の資金が心細くなった私は、郵便局でお金を下ろそうと思っていたのである。

テツヤ「阿寒湖は観光地だから、郵便局は、ないよ。あるのは土産物屋だけだね。もう1泊すれば、月曜日になるから、川湯の駅前には、郵便局があるしねえ」

私は、なんて親切な人なんだ。聞いて良かったワ、と思いい、「じゃあ、もう1泊！」。

……そんなわけないですよええ。

もちろん、阿寒湖にも郵便局はあった。当時、とても素直で、世間知らずの私は、テツヤさんの話術にすっかりハマってしまい、川湯に2泊することになった。

そして、川湯のミーティングは、楽しかった。

私が求めてきた北海道の、ユースホステルのミーティングだった。

川湯に2泊して、カンボジア（川湯にハマり、連泊を重ねていたホステラー）と一緒にヒッチハイクをして、阿寒湖に向かい、阿寒湖ユースホステルに泊まったが、そこは、何とも静かなユースホステルだった。

そして、川湯の魔力にすっかり魅了された私は、楽しさが忘れられずに、翌日、川湯に戻り、北海道にいられるタイムリミットまで連泊することとなった。

連泊中は、車を持っている人を捕まえては、色々などこ



私がモテた頃。

ろへ連れて行ってもらった。

知床五湖、裏摩周、オンネトー、ここで、応援団は泳いだ。友ちゃんが、でっかいおにぎりを作ってくれ、みんなで頬ばった。美味しかった！

川湯を旅立つ時、踏切からみんなが見送ってくれたのが忘れられず、電車の中で泣きながら釧路に向かった夏の終わりだった。

こうして、私は、川湯にハマってしまい、78年冬、79年の夏・冬と川湯通いがはじまったのだった。

YouTubeの川湯のスライドショーには、当時の様子が、ふんだんに盛り込まれ、涙なくして見られなかった。

お金はなかったけど、時間と自由がたっぷりあり、本当に、本当に楽しい旅だった。

それを暖かく見守ってくれた、父さん、母さん、なおちゃん、ありがとう！

私にとっては、かけがえのない青春の日々だった。■

滑稽・ひょうきん



クリスマスが終わる頃には秋風が立ち、人も減って寂しくなる。

# あの頃は許せてしまった品のなさ

みほ (高杉美穂 Takasugi Miho 旧姓・森田)

約40年前の夏、川湯に2、3泊して、礼文島の有名なユースにいざ出発!

けれど礼文に渡って見たものの、なんか面白くない! 有名過ぎて面白くないのか? 期待し過ぎて面白くないのか? 自分の正直な気持ちさえはっきり分からないまま、友達と「次、どこ行こうか?」と、時刻表を見ていたら、何となく「出戻ってみる?」という話に傾斜していきました。それで偽名を使い、予約の電話をして川湯に戻った時、みんながビックリしてたことがあったな〜!

そんな川湯にあるいい加減さ、ほわっとした緩さ、あまり大人びてもいない雰囲気、それとサイズ感みたいなものが、私たちにちょうど合っていたんだと思いますね、きっと。

それに、普段の暮らしでは接しないような適度な野蛮さ、やや不潔な感じ、粗野、ちょっとした品の悪さみたいなものあって、怖いもの見たさの興味半分もあったのかし



滑稽・ひょうきん

ら。結局、旅の行程の大半を川湯で過ごしてしまい、ハプニング続きの面白い旅だった。

東京に帰ってきてからも、ユースの仲間たちにはよく遊んでもらったワ!

例えば、今でもどこに連れて行かれたのかよく分からない名古屋のお寺での、川湯イン名古屋? イン東京の場所は、今はビルだらけになってしまったしね。

そういえば、蓼科の別荘にツアーを組んで遠足したことがありました。その日の夜、余興のひとつとして、キリンがスキップを披露しました。キリンのスキップはとにかくリズム感がなく、テンポが半分ほどズレてゆっくりと飛び上がるため、とてもぎこちなく、そして大いに滑稽なのです。あの強面でもって、老いたカエルが痙攣したように間延びして跳ね上がるものですから、見た人はほぼ大笑いです。私はこれまで、キリンのスキップを見て笑わない人を知りません。それほど可笑しいのです。蓼科でもそうでした。スキップがはじまると同時に、ワツと弾けるようにみんながお腹を抱えて笑った瞬間、名誉のために名は記しませんが、「ぶーう」と、雷鳴が響きました。つい下腹に力が入り、緩んだのでしょう。その音は、キリンのスキップにさらに油を注いってしまったようなもので、私は後頭部と、顎の筋肉と腹筋がとても痛かったです。

そういう独特な品のなさ、悪さも、あの頃は許せたのだと思います。えっ、今ですか? ……それはお答えできませんねえ。

とにかく今回、こうして声を掛けていただき、懐かしいあの頃、何やっていたんだか、と、ニヤっとしながら思い出しています。いまだわけの分からない楽しかった日々が、とてもとても懐かしく思い出されます。川湯にいた数日間が、こうして40年後に繋がるとは想像もつかなかったわ! 声を掛けてくれてありがとう! ■



# パンツ一丁で泳いで、あれから40年

エンダン (川瀬保裕 Kawase Yasuhiro)

厳冬の休日の朝、電話のむこうから「ペアレント」「ヘルパー」という、とても懐かしい言葉とともに、今回の文集への寄稿依頼を受けました。

約40年前、私は多くのクラブに所属(応援団・サイクリング部・美術部・ダンス同好会)しており、サイクリング部の友人(神原繁くん)とふたりで、1978年8月に夜行急行「きたぐに」等乗り継ぎ、大学のある姫路より、札幌まで分解した自転車を持ち込みました。札幌から自転車に乗り、旭川・層雲峡経由で、北海道6日目にして野村川湯ユースホステルにたどり着き、居心地の良さに帰る日まで10連泊しました。(YHでは、ヘルパーさんや連泊仲間に「応援団」から「エンダン」と呼ばれていました)

野村川湯YHでの思い出は、トタン板でのバーベキューや、連泊者・ヘルパーさんとの昼間のお出掛けなどです。

いちばん心に残っているのは、遊泳禁止のオンネトーで、パンツ一丁で泳いだことです。水から上がった後に、周囲の人たちに知らされて、法律違反者? になったと自覚しました。

また、私の連泊中に、礼文島YHから現役ヘルパーさんたちが来られました。夕食後のレクリエーション時には何かを発表? されていました。内容は全く覚えていませんが、かなりの敵対心を持って接していたように覚えています。野村川湯YH愛が強く、申し訳ありませんでした。

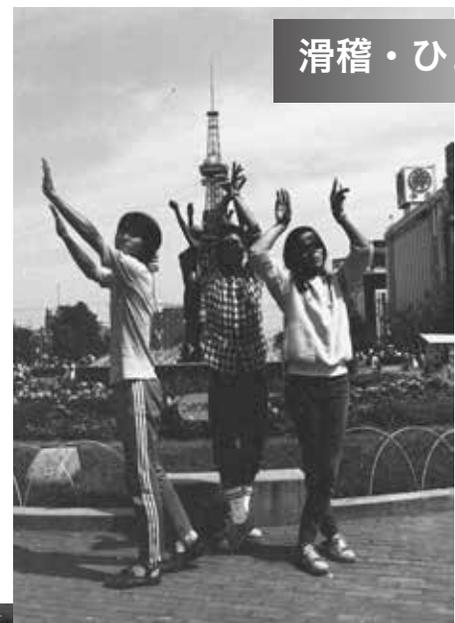
さらに、翌年の3月に開催された同窓会(イン東京)にも出席してもらいました。その後は、学年が上がり、応援団の幹部で忙しくなり、学生最後の遠出となったこともあり、我ながら当時のことをよく覚えていると思います。

野村川湯小学校の校歌? 「旅の終わり」も、いまでも一部は口ずさめます。

還暦を迎え、いまだ現役の会社員をしている平凡な毎日に、思いもよらぬ刺激をいただき感謝します。今後も、野村川湯YHのペアレントだった上田様、ヘルパー、宿泊者の皆様のご健康とご長寿をお祈りしています。■



遊泳禁止の湖でひと泳ぎしたあとの、ああ、達成感よ。股間や乳首を慌てて隠すことになるのなら、ハダカになんかなるんじゃないよ!



滑稽・ひょうきん



# 摩周湖の遊覧船乗り場は、どこ？

チャック（高松栄子 Takamatsu Eiko 旧姓・東谷）

私は今、ユースの会員証を捜し当て、それを見ながら当時を思い出しています。

1979（昭和54）年8月1日と2日、4日から7日、野村川湯ユースに宿泊した日です。

高3の夏休み、世間では受験なのに、オグスと私は、7月26日から2週間、大きなリュックを背負い、旅に出ました。部活に明け暮れた日常から離れ、大好きな友人と旅に出る。なんて自由で楽しかったか！

川湯駅に到着。迎えの車に乗り、ユースへ。ともの、キンタが来てくれたのか？前泊のユースで出会った新宿高と名古屋の蕎麦屋の息子、オグスと私の4人で、摩周湖へ行きたいと話すと、ヒッチハイクで男女ペアになって「摩周湖の遊覧船乗り場で待ち合わせたらいいよ！」と教えてもらい、4人で摩周湖に向かう道路を歩きはじめました。私たちは、騙されたのにも気づかず、ヒッチハイクの車に乗り込んだのです。それが、すべてのはじまりでした。

「遠い世界に」「旅の終わり」、A B B Aの曲、ヒッチハイク、ユースの冷たい水、ミーティング、UNO、面接会場、硫黄山、そして摩周湖の遊覧船乗り場。

ユース滞在中には楽しいことが、たくさん。忘れられない場所、人たちになってしまいました。■

## 滑稽・ひょうきん





滑稽・ひょうきん

## あッ、オマエ、 屁しただろウ！

岐阜（西部銀雄 Nishibu Kaneo 旧姓・田畑）

ユースに入ると、職員室でヘルパーと連泊者たちが、トランプをやっていました。変わったところだなあ、と感じましたね。勝手もよく分からないので、やや遠巻きに眺めていると、どうも大貧民みたいでした。

するといきなり、そのなかのひとりが立ち上がり、オレに向かって指を差し「あッ、オマエ、今、屁しただろウ！」といわれたんですよ。だろウ？ でなく、だろウ！です。

かなり断定的にいわれて、狼狽しましたよ。だってオレは、オナラはおろか、アクビもクシャミもしてませんでしたから、えらく驚きましたよねえ。いきなりの冤罪です。おろおろしながらも、しかしここはキツパリと、必死に、否定し続けました。

すると、ニヤニヤと見ていた廻りの人たちがいっせいに大笑いしだして、……あれ、騙されたかな？ とやっと気がつきましたね。誰かに、屁をしただろウ、というのが、大貧民のバツゲームだったんですよ。そしてオレは、「なんだ、こいつらは」と思ったのが、正直な第一印象ですね。それが野村川湯ユースとオレとの、最初の出会いでした。

その年は、高校の同級生（岐阜弁・森川哲志）と北海道旅行をしていて川湯を訪れ、そんなこんなで足が止まっ

てしまいました。1泊のはずが、20日くらいいたと思います。79年のことです。他のユースと違って、やっていたことが普通じゃなかったし、とにかく自由で、面白かったんですねえ。強烈なインパクトでした。

だから翌年は、夏が近づくにつれて気持ちも昂ぶり、今度はひとりで、いきなり川湯を目指しました。上野駅で夜行に乗ったら、心はもう川湯気分でしたね。そのために、たまたま列車に乗り合わせた名古屋の女の子に、川湯のことなど熱弁を振るってプレゼンしたつもりです、……割と可愛い子だったし。

その彼女は北海道を回る予定もあったので、いきなり川湯に強引には誘わず、オレはずっと川湯にいるから寄ってくれよ、とかなんとかいって函館でさらっと別れました。その後は、ユースで遊んでいても、なにをにしても、その子の顔が眼裏からちっとも離れませんでしたね。それで10日くらい経ってから、彼女がユースにやって来た時には、控えめにガッツポーズしましたよ。以来その子のあだ名は、岐阜女（じょ）と呼ばれて、嬉しいやら、申し訳ないやら、恥ずかしいやらで、でも、決して気分は悪くありませんでしたけど。

帰ってから、岐阜弁にちょっと自慢してそんな話をしてやり、もしおまえに彼女ができたなら、「岐阜弁女（じょ）」と呼ばれるぞ、とかいって、オレは余裕の有頂天でした。しかしその彼女とは、オレの消極的な態度もよくなって、1度のつき会もなく自然消滅してしまいましたね。ところがそういうすべてのことが幸いし、今の可愛い、恋女房と出会えたんだらうからと、オレはひとり思って悦に入っていますから。（談）

# 下関の不思議な話

真くん (堀 真也 Hori Shinya) + フッコ (横関福好 Yokozeki Fukuyoshi)

父さんに、下関はヒゲが似合うな、といわれてたよねえ。ホントはさ、カミソリを買うお金がなかっただけなんだってね。

上野駅の地下通路に止めてあった郵便台車に腰を下ろして、下関は休んでいたのかな。夜行の急行はキツイしね。そしたら、上野公園をめぐらにしてそうな、レゲー風の、ラモスのようなおじさんが、ふらふらとした足取りで近づいてきた。

「おい、兄ちゃん、ええ若いもんが、こんなところでどうしたあ。これでまあ、飯でも喰えやあ」といって、手に握っていた100円玉を下関に渡してくれた。それを下関は、黙って受け取ったんだよな。

そのこともそうだけど、下関は40年経ったら、その出

来事をすっかり忘れてることに、驚くよね。

それでその時、下関の横には久美ちゃん（後の下関の奥さん）がいたか、いなかったのかは、はっきりとしないんだよなあ？

直ちゃんに、えらく怒られたことがあった。

弟子屈で、下関はユースのバスを走らせていた。すると、ちょうど学校帰りの直ちゃんとスレ違ったのに、それにまったく気がつかずに通り過ぎてしまった。

直ちゃんは大きく手を振って、大声で「乗せてーッ」で叫んでたらしいよ。そりゃあ、怒られるわなあ。

意外にも、下関がヘルパーしてた年には、とくに女の子から手紙がたくさん来てたそうなんだよ。その手紙を、処分もせずにつつまでも置いてた、とかいって、久美ちゃんのご立腹だったよ。

下関が、なにを考えたのか分からない様子に、女の子たちは引っかかるのよ、ともいってたし。久美ちゃんだけは、そうじゃないと思うよ。(談)



滑稽・ひょうきん

# 影を背負って通う道

ランユウ (石川 衛 Ishikawa Mamoru)

1977年の夏。初めての川湯。

高校時代の友人4人と、車で北海道をめざしたのが、最初の年です。

車で、北海道の広い大地の中を……。あるあるの、大学生のパターンそのままです。

4人のうちのひとりが、国分(らんさー)でした。一般的なルートで、時計まわりに廻っていったような気がします。何カ所かのYHを廻り、偶然、立ち寄ったのが川湯です。

らんさーは、その前の年にも川湯を訪れていて、仲間が大勢いることに驚き、このことが後に影響し、自分らはらんさーの影を踏んでしか川湯を歩けなくなりました。

その常識外れな人々の集まる、非常識なYHにびっくりし、でも、どっぷりと馴染んだのが最初の川湯です。フッコ、のうまくえん……。

1978年の夏、2度目の川湯。

川湯の思い出、出会った友人との思い出を抱えて1年を過ごし、また川湯を目指します。

去年の4人のうち、3人がそれぞれの計画で、川湯を目指していきました。途中、何カ所かのYHを経由しますが、目的地は川湯でした。多くの仲間たちと、また会え

るのを楽しみに、走っていた気がします。トモノ、テツヤ、ホーサー、らんさー、土方さん、小坊主。

夕食のカツレツ、吉田拓郎の「夏休み」、松山千春。

1978年の冬、3度目の川湯。

何がきっかけだったかは、よく覚えていません。ただ、冬に川湯に集まろう、の掛け声で出かけたような気がします。

暮れも押し詰まったころの列車だったので、大変混んでいたにもかかわらず、冬の北海道に向かうために、どこか物寂しいような気がした思い出があります。

とくに釧路からの釧網線は人もまばらで、ちゃんと皆集まっているだろうか？ と不安になったのを覚えています。携帯もありませんでしたし、そのころは。

父さん、母さん、直ちゃん。懐かしいような時間でした。トモノ、チョコビ、高田さん、そして、らんさー。冬の摩周湖。

いつからそう呼ばれるようになったかはっきりしませんが、川湯では自分は、らんさーの友の意味として「ランユウ」と呼ばれます。乱遊と当てる人もいますが、それは後付けの屁理屈です。国分の影をずーっと背負うというのは、正直、気分はあんまりよくはないのですが、しかしそれを容認し、「ランユウ」と誰かに呼ばれたら、つい笑って返事をしてしまう自分がいるのも事実なんです。■

滑稽・ひょうきん



# オバケが好きな理由

キリン (長谷川浩司 Hasegawa Koji)

オレは北海道へは、高校2年の夏にはじめて行きました。翌3年生の時、ひとり旅で、今度は道東まで足を伸ばして、たまたま川湯を訪れました。1978(昭和53)年のことでした。

オレの高校生としての日常生活は、どちらかといえば素行不良というか、やや斜めになりかかっている、公道を改造バイクに乗っては爆音とともに走り回ったりもして、生活指導や当局のお世話になりかかることも度々でした。いつもどこかに、「怒り」があったからです。そんな夏休みに、多くの旅人たちがそうであるように、野村川湯は1泊の予定で、翌朝には大勢のホステラーに混じって次の訪問先へと向かって出発しましたが、他のユースには馴染めず、オレにとっての心地よい居場所はほとんどありませんでした。

川湯には世俗を超えたような、雲のようなふんわりとした雰囲気、のんびりと、ゆったりとした時間が流れているようで、とても気に入りました。独特の空気でした。

どうやら気持ちは川湯に残したままなのに、オレは旅行者になっていた居心地の悪さや不自然さに、ふと、気がつきました。それで次の日には、自分の意志で川湯に戻り、そうしてそこから、オレの長い連泊がはじまりました。滞在が長引くにつれて、たくさんの友や仲間ができました。川湯でできた仲間はたくさんいますが、やっぱり筆頭は、ナガサカ(長坂肇)ですね。歳も同じで、人としてのタ

イプや生き方はまるで違っていても、とても波長が合います。それと、もうひとりをどうしても挙げるとすれば、オバケ(大川教子)でしょうか。

オバケはもちろん女性です。ですが、女性性を感じさせないところがなんとも特異で、最も強い魅力のひとつです。平たくいえば、オンナでありながら女っぽくないために、これまで多年に渡り、仲間として親しく交わられたのだと感じています。つまり、余計な気を使わなくてよく、しかしシンパシーを感じるし、安心して、楽につき合える仲間のひとりなのです。人間的な、深いつき合いができる、とてもいいヤツなんです。

オバケは素直で、まっすぐな性格で、感激屋ですね。もちろん、面倒な男女間の駆け引きみたいなものも必要ないし、だから細かなことなんて聞かなくていい。オレとは、男女を超越した稀な関係が成立していて、誤解を怖れずにいえば、人として好きです。こういうオンナは、周囲を見回してもほかにはいないという意味で、至宝ともいえます。

このように川湯では、よい仲間たちと出会えて、長く、ずっとつき合いが続いています。

あの日、ふらっと川湯を訪れた強面の、新参者のオレにも、ほかのみんなと分け隔てなく、父さんに親身に声をかけてもらって、オレは嬉しかった。よかった。……たくさんの川湯の人々に、心から感謝しています。(談)



エロス・優雅

# バイオレットは恋の色

ねむいの (大川泰則 Okawa Yasunori)

俺が最初に川湯に行ったのは、ドテラと一緒に周遊券で行きました。1週間くらいの予定だったんじゃないかと思う。でもね、なんとなく息苦しいような感じがあったんですよ。それはなにかといたら、足がなかったのですね、自由に動き回れなかったってことだと思いついたわけです。

はっきりいって俺たちは、旅や観光は、まあ二の次で、つまり元々やや不純というか、半分以上なら騙してもいいから、とにかく女の子と親しくなりたかったんですよ。景色や冷涼な気候や、旅の別れとか出会い、人間的な触れ合いなんかでなくて、平たくいえばね、ナンパな旅だったわけです。

それに対応策を練って、次の年は、白いバイオレット(日産車)で川湯に行ったんですね。その年は川湯には、20日間くらいいたのかなあ。そこで妻(恵子 旧姓・沢井)との最初の出会いがあったわけなんですけどね。妻とのことは脇に置いて、俺たちの川湯での日常とていば、とにかく次々と連泊者の女の子に声を掛けて、行ってみたい希望の観光地をそれとなく聞き出して、そこへ連れて行ったりして、ずーっと遊んでた。もう俺た

ちは本能の赴くまま、それしかなかったですからね。屈斜路湖、摩周湖、美幌峠、オンネトー、知床なんかまで、女の子がいれば、もうどこへでも乗せてっちゃってたわけなんです。

そんなナンパな精神は、川湯から大阪の家に帰る途中でもいかに発揮されて、今度は川湯で知りあった連泊者の家に、次々と泊めてもらったりしてました。東京に遊びに行ったときも、いろんな人の家に世話になって、泊めてもらってたんですね。

ある日、高崎のトラさんの家に厄介になってたら、厳格なお父さんがどこの馬の骨か分からない俺を異様に警戒して、度々、様子を見に来てたりしてた。後に、焼鳥屋に連れて行ってもらえるような仲にはなりましたけどね。

それから、ジャッキーのアパートに泊めてもらった時には、すごく綺麗なお姉さんが一緒に住んでいて、ビックリしましたね。その夜は、なぜか俺は、ピアノの横に寝ることになったんですよ。そしたら夜中に、割と大きな地震があって、俺はピアノに潰されるんじゃないかって思って、えらく怖かった。でも本音をいえばね、その美人のお姉さんに押し潰されたかったんだけどなあ……なんて思ったりしてね。

イン東京やイン大阪、イン日間賀島とかでも、いろんな人の家に行っては世話になってましたよね。そんな行き来のなか、俺の奥さんともスキーに行ったりして、やがて関係が深まって、今に至ってるわけなんです。だから俺の今があるのは、白いバイオレットと、川湯のお陰なんですよ。川湯には、深く感謝申し上げます。(談)



エロス・優雅

# ひとり歩きした 迷惑な「噂」

三公 (矢尾板直樹 Yaoita Naoki)

小学校の頃からひとり旅には慣れていて、川湯にもひとりで、偶然行って泊まりました。高校2年の時でした。で、ユースに着いてみたら、これがすごいところで、場所も人も見た瞬間に、オレには合わないと感じ、すぐに荷物をまとめて帰ろうかと思ったくらいでしたね。

その夜に体験したミーティングもまた強烈で、いきなり「硫黄山音頭」とか踊るわけですよ。当時、シャイだったし、オレはここにいる人間ではないと感じるでしょ、普通でも。だから2歩も3歩も引いて、ミーティングの輪に加わりつつもただ啞然と眺めてましたね。すると、オレよりもはるかにお兄さんやお姉さんたちは、かなり楽しそうに、笑って踊ってたりして、これが大人の世界なのか、皆、現実の生活を離れ、旅してることをひたすら楽しんでる、日常とは違う世界を純粋に楽しんでるんだろうなあ、と感じ、生意気なようですが、ちょっとした悟りの境地でしたよね。

ところが、ひと晩寝て起きたら、明らかに印象が変わってたんです。これは理屈では巧く説明できないんですけど、自分でも意外な感じはあった。ああ、やっぱりこういうところに、ひょっとしたらオレの居場所があるんじゃないかと、気がついたんですよ。

2日目の夜のミーティングでは、無理矢理に旗を持たされてしまいました。仕方なく、「旗踊り」をやりましたよ。そんなことを数日やってるうちに、いつの間にか、北の

狂乱に麻薬的にはまってしまったんです。つまり、オレがバカになれるところは、東京の家や学校など普通の暮らしのなかにはなかったんだ、と気がつきました。

以来、毎夏のように川湯に通い、冬にも春にも行きました。ただ川湯に行けば誰か、きっと仲間がいるだろうという思いだけでした。オレは夏よりも、喧騒のない、静かな冬の川湯がもっと好きでした。もちろん夏が楽しくなかったわけではないですが、なぜかというところに集まった仲間は、少人数で語り合い、お互いのことをよく知りあえる場であったように思えるからです。それに当たり前ですが、道東らしくキーンと寒いのもいいし。

冬に毎晩、父さんが連れて行ってくれた共同浴場の温泉に浸かっていると、そうだ、オレはここにいっていいんだ、と、心底思えたものでした。当時は、おふざけばかりに感じられたものですが、今から思うと、野村川湯ユースの本質は、すべてにおいて真面目だった、ということにオレはもう気づいています。

それから最後にひと言、川湯の卒業生の皆さんに伝えたいことがあります。

オレは、川湯のジゴロとか、ドン・ファンみたいにいわれているようですが、それはホントにないですから。確かに、「人形の家」で知り合った地元の女子高校生から声を掛けられて、しばらくつき合ってたことはあります。でもそれにしたって、コーヒーを飲みながら他愛のない話をしたり、電話や文通をする程度でしたからね。このよからぬ噂は、多分、ナガサカとキリンのふたりが元凶ではないかと睨んでいて、それがいつの間にかひとり歩きしたのでしょう。いい迷惑なんですよ。とにかくオレは、健全なユースホステルでの旅を楽しんでいた？ のだと、この機会に伝えておきたいと思います。(談)

エロス・優雅





## 忘れられない夜の 摩周湖の星々

よしみ (大熊佳美 Ookuma Yoshimi 旧姓・山本)

私がはじめて川湯に行ったのは、高3のとき。

三笠市(夕張の隣町)の高校の、バスケット顧問の新人女子先生が、YHを使って道内を旅した写真を見せてくれたことがはじまりだった。先生とは歳も近かったし、こんな旅の方法もあるんだあ、いいね、って。

翌年、バスケット部の友達とケケと帯広、根室と回って川湯に着いた。ところがケケは周遊券をどこかで失くして、私はカメラをバスの中に置き忘れちゃってね。困ってたから、難民たちが阿寒バスの車庫まで連れてって来て、無事にカメラだけは戻った。その頃の私はひねくれてなくて素直で、それに健気で可愛らしさもあったから優しくしてもらって、誰とでもすぐに仲良くなれたんだと思う。次の日、サロマのYHまで行ってはみたものの、周遊券もないし、川湯に戻ろうよということになって戻っちゃった。そしたらちょうど川湯は七夕祭の準備で、その時、オグス、チャック、みゆきちゃん、毒、千歳たちと一緒にいたみたい。小楠とチャックは同じ歳で、バスケットもやってたことから、帰ってからも仲良くしてた。

私が就職してからは、札幌にアパートを借りて、その部屋は仲間のたまり場みたいになってて、みんなよく集まっていた。その頃、月刊川湯もやってたしね。

その年はお盆休みに、チャックとまた川湯に行った、汽車とヒッチで。チャックとはこの後もヒッチであちこち行ってる。車に乗せてもらったから、危ないから絶対にどっちかが起きてよね、と決めてたのに、ふたりともよく寝てたよなあ。北見で乗せてもらった人は、非番のお巡りさんで、「危ないから止めなさい」と指導というか、軽くお説教されたりして。

川湯にいて一番忘れられないことは、トモノに連れて行ってもらった夜の摩周湖。

その日は霧がすごくて、センターラインを見ながら運転してて、怖かった。でもね、展望台に着いたらスーッと晴れて、真っ暗な空に、針で無数の穴を開けたように数え切れないほどの、満天に星が冴え冴えと光ってて。冷気と感動の両方で、鳥肌が立つようだった。そのことだけは、忘れることができないの。すごーくロマンチック……なんだけど、チャックも他にも何人か一緒だったから、そういう甘い恋物語みたいなんじゃないからねえ、念のため。

その後、チャックや小楠、みゆきちゃんたちとは、ずっと長い付き合いが続き、今でもつながってて、なんかこういう関係って信じられないよね。ホント、よき仲間たちです。

娘が大きくなってからも、ふたりで知床とか礼文を車で回ってるの、私は助手席でビール飲んでるだけだけど。いずれ孫とそんな日が来るかもねえ。(談)

# 旅人たちを集める魅力

のりちゃん (畑中範子 Hatanaka Noriko)

ユースに着くと、屋根のうえで旗を振る様子が見えて、「おかえりなさい」と叫んでましたね。数日するとなんのことはない、今度は私たちも同じようにそうして旗を振り、新しい旅人たちを迎えていました。夏の、野村川湯の思い出のひとつです。今でもはっきりと覚えていて、印象的やねえ。

夏のユースでは、他の連泊者たちとの交友も楽しかったけど、でも、結局のところは、フッコと真君の人間的な魅力が、川湯に留まった原因やないんでしょうか。私たちばかりでなく、ほとんどの女子は、ふたりのことが好きだった、とっていいと思いますよ。上田の兄さんもかなりカッコよかったけれど、ふたりには、かなわなかったもんねえ。

私と一緒に旅をしていたなべちゃんも、真君のことがすごく好きやったしね。ファンだったのよ。

それに、冬にユースに来ていた女子は、ほとんどの人がふたりのどちらかを、密かに思ってたんじゃないかなあ、ほぼ全員がね。

で、どれくらいモテていたかという、当時の、写真を見てもらうと分かりますけど、真君とフッコの着ていたセーターは、すべて手編みですからね。

そういう熱い、皆さんの思いを感じて、私はちょっと引いちゃったこともあった、かなあ。

私？ ふふ、ふ……私のことはヒ・ミ・ツだけど、ふた

りのファンであることには違いないですから。

私は夏に続いて、1976年の暮れから正月にかけても、ユースにいました。

夏の、父さん母さんの心温まるもてなしや、直ちゃんとの触れ合いがあって、また会いたいなあ、次は、冬にも行ってみよう、という気持ちになったんだと思いますね。

そして、みんなでかまくらを作ったり、スキーをしたり、摩周湖からヒッチハイクで弟子屈の「人形の家」まで競争をしたりして、楽しい思い出もたくさんあります。

そんなある日の冬の夜、消灯時間になりました。当時のユースは、割と厳格なルールもありましたしね。

ところが、ジュリー（脇田隆行）がまだまだ喋り足らずに、もう少しだけ女の子たちと話がしたくて、女子部屋に入って来たことがあったんです。もちろん、別にイヤらしい、不純な目的なんかやなくてね、それは女子もちゃんと理解してましたしね。

そしたらそこへフッコがやって来て、「ここは、そういうところじゃないからさあ」みたいなことを、すぐ真君に、諭すようにいってましたね。

一見、軽いノリ〜という感じに見えたりして誤解されることもあるんやけど、意外にフッコは真面目な人なんやなあ、と、感じたことをよく覚えています。

あんな感じに見えても、けじめがちゃんとしている真面目な好青年だったんです。

じゃあ、真君は真面目やないのか？ って、そういうことではなくて、ともかく、野村川湯ユースは、真君とフッコのふたりの魅力であれだけの人が集まってきたユースだった、と私は思っていますから。(談)



英雄・偉人

# ヘルパーとしては、 なにもせなんだよ

下関 (一柳 仁 Hitotsuyanagi Hitoshi)



俺の場合はねえ、ほとんどいつもひとり旅やったね。バイトして、周遊券を買う分くらいのお金が貯まると、すぐ旅に出る、みたいなことをずっと繰り返しちゃったよねえ。

それで大学2年の時、はじめての北海道へのひとり旅で、函館は日観連の旅館なんか泊まっていた、だってユースなんて知らなだからさ。人に教えてもらって帯広、阿寒とユースに泊まって、3泊目が川湯やった。

そしたらさ、真君とフッコがいて、ああいうミーティングやらやっていた。

俺はねえ、変な人たちやなあ、という印象しかないんよ。俺の知り合いやらのなかには、こういう人たちはおらんしねえ。ここはえらく不思議なところやなあ、と思ってねえ。

ほしたら今から思うとね、ランサーやら、の一ま君たちとすぐに友達になってしもうて、いきなりずっと1週間くらいそのまま連泊しおったよ。まあねえ、よう覚えちゃらんけれども、そりゃあそれなりに、俺も楽しかったんやろうねえ。

それで翌年(1977年)は、ヘルパーをやったんよね。6月の終わり頃か7月の最初に川湯に入ったねえ。まだ

ホステラーは少なく、チョウ屋さんばかりで。その時に、三助というヘルパーがすでにおいて、俺と一緒になんやかんややってたんやね。そのうちに、遅れての一ま君がヘルパーとしてやって来て、そしたら三助はどっかに行ってもうた。……なんやったんやろうねえ。俺のヘルパーをやる覚悟? う〜ん、そんなもんはないしさ、なにをしようか、よう覚えとらんよ。とにかく、ぼわーとして、適当なんだよなあ。連泊者がいろいろと助けてくれるしねえ。

俺は、なにもせなんだと思うよ。ただ会員証にぼこぼこ、毎日ハンコを押したの、よう覚えとらんかなあ。それしかないわね。

ミーティングとかでもね、一応は、もちろん真君とフッコの路線を踏襲しよう、ということではあったとは思うよね。しかしねえ、の一ま君とふたり、毎日、ドジだらけのヘルパーやったんと違うんかなあ。なにより父さんは、そんな俺たちをよう首にせなんだよなあ、と思うよ。ホント、ええ人やわなあ。

それとねえ、夏場の川湯は、お盆が過ぎると、ガクッと人が少なくなるんよ、知っちょるでしょう?

そうするとあの広場でさ、夜、焚き火を囲んでさ、ほんの数人のホステラーととりとめのない、他愛のない話をずーっとするんよ。

なにを話したかは覚えとらんけれども、夏の終わりの、ゆらゆらゆらゆらと動いて定まらない時間やら夜の空気が、とにかく俺は好きやったねえ。そういう雰囲気が、あの野村川湯ユースの魅力じゃろうと、俺は思うとらんよ。(談)





英雄・偉人

## 問わず語りの 川湯風景

真くん (堀 真也 Hori Shinya)

ユースで使われてたスリーピング・シーツは、袋状のシーツのなかに体を入れて使うのを、長い間、オレは知らなかったんだよ。

いつか、女の子の部屋にいったら、シーツのなかに入って寝ていて、驚いてねえ。

それはどこの部屋かって？ 今は、いえないよなあ。

川湯にいと、ストーブを焚かないのが、7月の半ばから8月の半ばの1カ月間くらいで、8月の後半くらいになると、朝晩はもう寒くてね。

そうやってストーブを焚きはじめる頃になると、ホステラーがだんだん少なくなってきてさ、あれって寂しいんだよな、……ホント、寂しかったよなあ。

下関は、オレたちがどれだけはしゃいでいようが、一緒にいるんだよ、じっと静かなままでね。それで、楽しんでる。

いつか、オレとノーマちゃんとフッコで、ずーっとご飯を食べないでいようよってね、そうすると下関は、そのうちに腹が減ったっていうか、試してみたことがあった。そしたら、ずーっと、なーんにもいわないんだよね。自分からは発言しないんだよ、周りには合わせるけどね。下関はそういう人なんだよ。でも、そこにいるんだよ。

オレ、川湯の温泉で、父さんの背中を流したことがあったなあ。

ホステラーが少ないと、たまに温泉街に行ったりしてたでしょ。あの時は、父さんとオレと、ふたり切りだったんだよなあ。

美しく晴れ渡った冬の日の早朝、外に出た瞬間に、川湯の朝を思い出すことがある。一瞬で蘇るんだよ。(談)



## のうま君 「のうまくえん」 と呼ばれた男

真くん (堀 真也 Hori Shinya)

のうま君が野村川湯にやって来たのは1976(昭和51)年8月、大学の夏休みを利用したひとり旅だった。当時、学生のひとり旅は多かったので全員を覚えているわけもないが、頭に幅広に折ったタオルを巻いたイタリア系の彫りの深いその顔は、やけに印象に残った。「のうまくえん」という川湯ネームが付いたのはミーティングのメインである花いちもんめの時、フッコチームであった彼を私がそう呼んだのがはじまりである。脳みそをタオルで巻いた人=のうまくえん、なのだ。

その日のミーティングも盛り上がり、今夜もフッコと私は得意顔で焚火の後始末を連泊者たちとしていた。そこには「のうまくえん」というありがたくなかない名前を付けられた彼もいたが、彼は1泊だけで明日旅立つという。もちろんフッコも私も引き止めはするが、ほとんどのホステラーは1泊なのである。

さて、その翌々日である。日も暮れかけ1人2人とホステラー達が帰って来るその中に、はっきりと見覚えのある顔が「ただいまー」と、やや気の抜けた声と共に入ってきた。頭にはあのタオル。「のうまくえん」である。そして「なんか気になったんで、帰って来た」とひと言。彼は取りあえず予定通り旅立って見たが、どうにもこのYHのことが気になり、それを確かめるために帰って来

たのだという。野村川湯小学校の「のうまくえん」が唯一無二になった瞬間である。それからは他の連泊者と同様に、広大な北海道を巡ることもなく、狭いこのYHで昼間から笑い転げていたのだ。その中には人一倍明るい笑顔の女性がいた。その人こそ、後にのうまくえん夫人となる「ミキちゃん」である。

のうまくえんはこのYHの、何が気になったのだろう……。

## 民宿ふくまくえん

民宿ふくまくえんは1978年～1979年に掛け、のうま君とフッコが住んでいた静岡県清水市三保(三保の松原まで徒歩10分)のアパートである。

ある夜、実家に帰っていた私に、ふくまくえんのふたりから電話があった。久しぶりに聞く声はやたら明るく、やたらふざけていてとにかく楽しそうであった。3日後、私はそのふくまくえんにいた。学生ののうま君と、アルバイトのフッコ、そしてただのブー太郎で居候の私の3人は、毎晩、果実酒用の安い焼酎を飲みながら取り留めのない話をしていたのだろう。それはまるで青春ドラマのようであり、実際にいろんなことも起こった。

「探し物はクミちゃんに聞け事件」「フッコの元カノ襲来事件」「真くん警察官勧誘事件」等々……。詳細は控えるが、来客と笑いが絶えることのないふくまくえんは、まさにのうま君の人柄そのものであった。来客の中にはミキちゃんの姿もあり、そしてふたりの距離は一気に縮まるのである。

一方その頃九州方面では、クミちゃんが下関を押し倒していたらしい。合掌。■

# 女ヘルパーが泣いたのは1度だけ

友ちゃん（高木友子 Takagi Tomoko 旧姓・産田）

はじめて北海道を訪れたのは、確か、夏のはじめ頃だったと思います。

小樽でフェリーを降り、積丹を廻って北上し、私は礼文島の桃岩荘ユースを目指していた……つもりだった。稚内から礼文に向かう船内では、男子大学生(?)たちのグループが、盛んに桃岩荘のことなどを話題にしている、賑やかに、騒いでいたのです。

その様子を見た瞬間、私のなかの天の邪鬼がむらむらっと目覚めて起き上がり、もう桃岩に行くのは止めて、今夜は民宿にでも泊まろうぜ、と、ささやいたのです。

よし、そうしよう、と、私はふたつ返事をし、私の根性と直感に従ってそう決めたのです。そしてその体験が、私と川湯を結びつけるキーになりました。

礼文島に上陸し、行き当たりばったりに見つけて泊まった民宿は、割と繁盛していて、それにミーティングなんかもあったりして、まるでユースみたいな雰囲気宿でした。若い旅人も多く、スタッフはそれなりに忙しそう。見かねて私が食事の支度などを助けたりしたのが機縁となり、そのまま10日ばかりをお手伝いとしてそこで過ごしました。

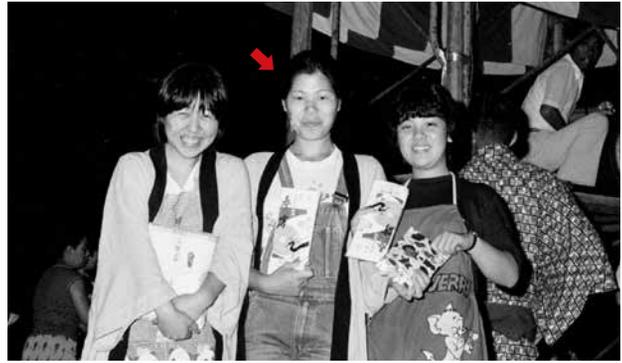
そうしてみても私は、こうして人を手助けする仕事の合間に、少しでも遊びが混じるような、いわば滞在型の旅の仕方って面白いな、という手応えを感じたんだと思います。そして次はきっと、野村川湯でヘルパーをやってみたい、と気持ちが転じていったんです。

1976(昭和51)年の春、まず、父さんに電話をかけて、女ヘルパーとして雇ってくれるようお願いし、すぐに快諾を得ました。6月の半ば頃、私は重いリュックを担いで、ひとり川湯駅に降り立ち、やや晴れがましい心持ちで大きく深呼吸をしていました。

通常、朝は5時半頃に起床して、食事の準備と後片付け。ホステラーが発発してなくなる頃から、洗濯や布団干し、連泊者にも手伝ってもらいながらの掃除……など。よく覚えているのが、しーんとしたなかで母さんと一緒にしたアイロン掛けや、繕い物なんかの裁縫かな。ふたりでいろんな話をして、驚いたり、教えられたりしたそれは有意義な時間でした。

父さんとドライブして、弟子屈の「みどりや」に食品の買い出しに行ったりもしました。

午後は、ホステラーと話したり、遊んでると、ほどなく夕食の支度がはじまります。食事の準備は、母さんと、



それに直子も手伝ってくれたりしてね。厨房の仕事はいつも喋りながらやっていて、遊びの延長にあるようなものなのでちっとも苦にはならないし、むしろそういう作業は私は得意というか、好きでしたね。意外？

旅人のお世話をして喜んでもらったり、案内をしたりとかも楽しいし、ヘルパーとしての仕事は私の性に合うというか、とにかく充実していました。

たまに、気心の知れた連泊者と陽の出前の摩周湖に登り、流れ星を追ってじっと漆黒の天を眺め続け、朝帰りしていたのもいい思い出です。たびたび裏摩周へ行っては泳いだりもしたし、真君やフッコと一緒に「人形の家」でコーヒーを飲むのも、落ち着いた至福のひとつでした。そういえば、ユースにドライブインが併設されてからは、そっちも手伝ったりしましたね。

ある時、お客さんが来たので、私が注文を取りに行きました。すると、強い訛りの青森弁のおじさんでした。本当になにをいっているのか、私にはサッパリ聞き取れず、理解でなかったの。す、すいませんがもう1度、もう1度を繰り返して、私は焦り、4、5回目になると、さすがに相手も怒り出し、私はどうしたらいいか途方に暮れて、ついに大粒の涙が自然にこぼれ出たことがありました。川湯で、……私ははじめて泣きました。

仲良しだった連泊者の送別会、駅でのたくさんの見送りや、毎年の夏の終わりに直子や父さん母さんに、さよならをいうとき。震えるように哀しい別れは何度もあったし、それでも泣かなかった強い私が、青森弁にだけは泣かされたんですよ。

そうして私は、とにかく3シーズンを川湯でヘルパーとして過ごすことができ恵まれていたし、そこまでやってみて、やっと私なりに納得もできたのだと思います。私にはそうして残したあふれるようにたくさんの旅の思い出があったから、いざ仕事に就いたら精勤し、結婚して夫と共同し、子育てを懸命にやり続けるその途中では、もう旅に出たいだなんて思わなかったし、家庭を築いて守ることに迷いなく専心できたのだと思っています。

多少、人よりも遠回りしてきた人生のような気もしますが、それが私の歩みのペース配分だったんだらうなどと、今、静かに思い返しているところです。(談)

# 自由って素晴らしい

オグス (小楠厚子 Ogusu Atsuko)

もう、あれから、40年経ちますね。  
何年経っても色褪せない刹那の時間。  
川湯小学校の体験は、その後の私の生き方にとても色濃く影響しましたよ。  
ひと言でいえば、自由って素晴らしい！ です。

とくに川湯に集ってた男たちの魅力は、明日何して過ごそうかな～、いつ北海道から帰ろうかな～、戻ってからの生活も未定。  
なんせ、会社だの結婚だの、社会の枠組にとらわれていない貴重な時間。

なんてかけがえのない、青春の一瞬だったんでしょう。  
だから、みんな笑顔が輝いて、瞳がキラキラしてたんですねえ。  
それが、川湯で時間を共有した仲間全員の魅力です。■

烈女・女傑



# 清美の思い出

らんさあ (国分秀夫 Kokubu Hideo)

1976年8月12日、昼過ぎ野村川湯YHへ着いた。まだホステラーが着くには早すぎる時刻だった。とりあえず溜まっていた洗濯をした。自宅を発ってから10日程経過していた。ひとり旅ゆえ、少々ホームシックになっていた。実は人見知りのため、初対面の人に声を掛けるのが苦手である。洗濯が終る頃、連泊者が一緒に遊ぼうと声を掛けてくれた。の一まくえん(後に、の一ま君と改名)、ダックスである。渡りに船とばかり、仲間に入れてもらい、複数バトミントン、縄跳び、缶蹴りをやった。こんな遊びは小学校以来だ。

複数バトミントンは2チームに分かれてのバトミントンだが、ラケットは2本しかないのでシャトルを打ったらチーム内の次の人にラケット渡す。これを繰り返すのだ。思ったよりハードだが面白い。

縄跳びは当然のごとく大縄跳び。縄を引っ掛けた人に罰ゲームがあったか否かは、記憶が定かではない。

20人以上での缶蹴りは傑作だった。鬼は20人を見つけ出すことは出来なかった。参加者の名前もわからないので、見つけたらその人の特徴をいって缶を足で押える。特徴とは赤い靴の彼女、などであった。特に面白かった。夜のミーティングは最高だった。ホームシックの俺をファイヤーの火が癒してくれた。中学以来のフォークダンスは、女子の手を握れるのでうれしかった。花いちもんめも楽しかった。旗を渡された時は、一生懸命自己表現をしたが誰にも褒めてもらえなかった。

そんなこんなで1日中楽しく過ごすことができた。世間とは別世界。こんな野村川湯小学校に取りつかれてしまった。

ユースホステルは旅をするための手段、中継地から、目的地へと変わっていった。ユースに行くのが旅となってしまった。



左より、辻元清美の同級生男子、将来、衆議院議員となる辻元清美、らんさあ。トドワラにて。

当時の旅のノート(1976年)に「名古屋市守山区…… 辻元清美」とブルーブラックのインクで書いてある。既に40年以上前のノートだ。誰だ? 同姓同名の国会議員を知っている。

とものがYouTubeに川湯のスライドショーをアップして、そこに「辻元清美さんの写真を探しています」とのコメントも付けた。それを見てくれたKさんから、写真付きメールが届いた。川湯の集合写真の内のひとは国会議員の辻元清美と骨格、顔のパーツが同一です、とのこと。もう1度76年の北海道のアルバムを開いてみた。だんだん思い出してきた。……そうだ、彼女だ!

確か、彼女は斜里ユースのバスでメガネを掛けた男子と来たのだ。集合写真に彼も写っている。バスを運転した斜里ユースのヘルパーも写っている。

彼女はいやにハキハキした口調でしゃべる。どう見ても、Sの彼女とMの下僕だ。彼女と男子は、名古屋の有名な高校生であるという。男子いわく、彼女は学年で1番です。連泊者のN君が「へえ、1番助べえなんだ」と切り返した。そんな会話をしながら当然のごとく連泊へと引き込んだ。

翌日の午後。

連泊者「今日はどこへ行った?」

彼女「屈斜路湖へ行ってボートに乗った。下僕が屈斜路湖で泳いだ。」

連泊者「海パンにどこで着替えた?」

彼女「フルチン」

下僕「彼女に無理やり泳がされた」

こんな風である。

数日後、俺は「フォーリーぶす」と呼ばれた4人と阿寒経由でトドワラへ行った。昼食用にとカップラーメンと焼きそばを持参した。それを食べる時に、彼女と下僕と再会してしまった。1人分足りない。下僕は指をくわえて空腹を補った。

そういえば 辻元清美、当時から今の風格を備えていた。でも、国会議員になるとは夢にも思わなかった。同じトンカツを食べた仲間、これからは応援しよう。

川湯では多くの人に出会うことができた。今でも付き合い合ってもらっている人もいる。そしてこの写真集編纂に当たり、40年振りに再会できた人もいる。思い出となってしまった人もいる。40年間会えていない人もいる。再会したいと思っている。

校舎はなくなってしまったが、思い出はなくなる。ありがとう、野村川湯小学校。■

# 私にとっての 宿命的なユース

あうみ姫 (正木愛弓 Masaki Ayumi 旧姓・高田)

1978年8月9日1泊の予約ハガキには、テツヤさんの受付サインがバシッと書かれて返ってきました。なんと、この段階では1泊の予定だった野村川湯ユース。友達のノリと、初の大旅行〈北海道1周〉の中日に出会う、とんでもないDESTINYの始まりです。

そもそもお出迎えからして不思議だった。入学式みたいな記念撮影があったり、面接会場があったり……。らんさあ、ほーせー、ともの、こぼうず、きんた、ひじかたさん、テツヤさん……(名前書き切れない、ごめんなさ

い)。みんなみんな、ずーっと昔からの友達みたいな、ほんとお兄ちゃんみたいな人たちばかりで。「次の日、どこ行く？」から始まって、オンネトーやら阿寒湖やら、ほいほい連れてってくれて、もう1泊、もう1泊、お手伝いするからもう1泊……で、とうとう8月13日の夜。

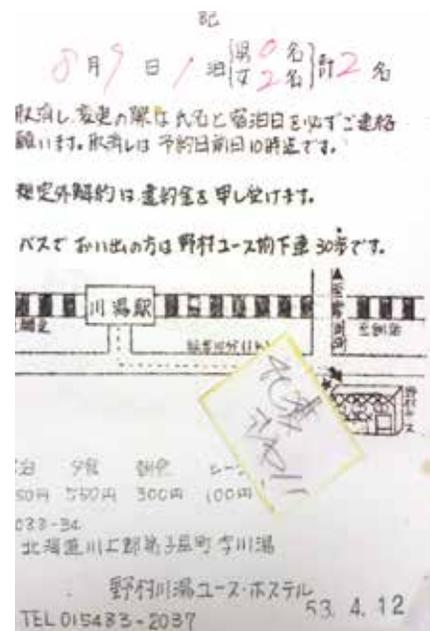
明日、帰らなきゃ周遊券が切れちゃう……。お別れのファイヤー囲んで騒いで、記念写真撮って、らんさあとジャケット交換して……泣く泣く14日の朝、野村川湯を出発しました。この時の写真、しけた顔で写ってます。泣きそうやったから……。

あれから40年……。大捜索してくれて、ありがとう。探しだしてくれて、ありがとう。見つけてくれて、ありがとう。私のこと覚えていてくれて、ありがとう。

野村川湯は、私にとって、やっぱり、とんでもないDESTINYだったんだな。■



烈女・女傑



# ユース内での異性間交遊について思う

土方さん（佐竹正明 Satake Masaaki）

硬派・軟派



野村川湯ユースに長く滞在していると、女たらしがいることに気がつきます。

例えば、三公やキンタ、麒麟の御三家は、連泊者ならほとんどの人が名を挙げるでしょうし、牧場のヒデキとバイトたち、それに俺にいわせれば、ランサーのママさ加減といったら感心してたね。好色な男のことを豆男といいます、よくいったものだと思います。

仄聞するところによると、ランサーはユースの会員証に補助カードを勝手に作って貼り、そこに自分の気に入った女性ホステラーのキス・マークを、収集してたらしいですからね。

それに、この文集に掲載される写真にもあるかと思いますが、三公は女の人の横に立つと自然に肩に手が回ってしまう、とか、自分の髪をかき上げてカッコつけるのが癖になってる、と公言してるようですしね。どちらにしても、大したもんだと思いますよ。

ある日の夜、俺はキャンプファイヤーの火の始末やらを終え、もう消灯時間も過ぎてた頃でした。そうしたら、広場の縁から森の方に入って行く男女の影を見たことがありました。

薄暗かったのでね、女性の顔ははっきりとは見えませんが、男の方は、キンタにとてもよく似ていましたね。目撃はしましたが、まさか俺は注意するなんて無粋なこともなく、黙認というよりもむしろ、それもありなんじゃないのかあ、と思いましたよ。

さすがに上田の父さんは、立場上、夜遅く肩を組んで歩いている男女を見かけると、度々、自制を促していたようですが。

それにしても当時、他のユースでは、異性間でのトラブルや嫉妬、ひとりの女性を中心にした派閥争いのようなことが起きてしまい、他の仲間たちが巻き込まれて分断され全体の和が保てなくなった、というような話も時々、聞いたりしていました。

ところが川湯では、不思議にそういうことはありませんでした。ユース全体に過度な男女交遊を抑制する雰囲気があって、各自それなりに自覚的に行動してたのかも知れないですね。それに極端なことがあると、ユースで長く過ごすことが窮屈になったり、不愉快に感じるのでは、と、感覚的に分かっていたのかなあ。いい加減なようには見えていても、実は各々の倫理観や規律が健全に働いていて、それがひとつの共同体となってもそれなりに機能して、自然に抑制できていたんじゃないか。つまり、みんなユースをととても大事にしていたんじゃないのかなあ。

悪くいえば、まだ大人になりきれていない幼児性がどこかに残り、一方では、なんでもありの不純交遊を良しとしない品格を持っていた、……ともいえるのかな。

それと、川湯に長逗留する女性ホステラーには、賢明で、清潔感ある人が多かったんでしょう。男たちは、そういう几帳面さに救われた側面も多々あるだろうしね。

とにかく野村川湯のOBとOGは過度に乱れず、一定の清澄さを永年に渡って維持してきたために、こうして集合の号令がかかればすぐに体勢が整えられるんだとも思いますよ。

それと、ひと言だけつけ加えておきますが、俺は石部金吉でもなければ、亭主関白でもありませんからねえ。当時ユースで、女子とバトミントンをやっていると喜色満面だよ、ともいわれてたし、ミーティングでのフォークダンスもそりゃあ楽しみのひとつだったしさあ、それはそれでサ、俺にとってもいい思い出なんだから。（談）



今になって「俺は石部金吉ではないからさあ」と、照れながらいう土方さん。

# 川湯は、 斜里と兄弟ユース？

フッコ (横関福好 Yokozeki Fukuyoshi)

オレは、川湯にヘルパーに入る前に斜里ユースでバイトしてて、というか、斜里ユースの経営者は、ホテルのオーナーでもあったんだよね。それでオレは、正確にいうとその酒屋の方でバイトしてた。酒屋でバイトしながら、ユースに住んでいたわけ。で、斜里ユースのヘルパーは春になってから、どこからかフラッと来たヤツだね。ほかに斜里ユースには、オレと同じように泊まり込んでバイトしてる女子高生がふたりいて、そのなかのひとりに、その遅れてきた青年が好意を持ちはじめたんだよね。オレは以前から彼女たちと一緒にいたから、その女の子たちとは仲がよかったし。それでオレが見かねて、恋の

橋渡しをしてあげたことがあったんだよね。

するとそれ以降、そいつはオレを信頼したというか、親近感をもって接近してくるような感じになって、しかも勝手に、野村川湯ユースと斜里ユースが兄弟ユースだと思いついてしまったようなところもあるしさ、ちっとも兄弟なんかじゃないからね。

でね、そいつは自発的に、斜里ユースから、野村川湯に行くホステラーをわざわざ募ってさ、斜里ユースのマイクロバス、母体は金持ちだし……、に乗せて川湯まで乗りつけて来るのが度々あったんだよ。いやー、申し訳ないねえってことだよ。

でね、そんな感じで、ちょくちょく川湯にバスで来ててさ、ホステラーを運んで来てたなかに、辻元清美さん(衆議院議員)もいたんだよね。

とにかくね、野村川湯と斜里は、兄弟ユースなんかじゃないですから。(談)

# 李下に冠を正さず

千歳 (新関睦子 Niizeki Mutsuko 旧姓・宮崎)

私は、高校2年の時、ひとりで川湯を訪れました。ひっそりと、といった方が正確かも知れません。でも、それが楽しくて、とてもいい思い出になったんですね。

そんなユースの様子を、仲の良いクラスメートたちに話したんです。じゃあ、私たちも行ってみるべえ、ということで川湯に向かったのが、高3になってたオグスとアズなんです。あのふたりは私と違って進んで前に行く積極的な性質ですから、ユース内でも活発に動き回っていたら、目立ってた存在だとも思います。それなのでユースでの思い出やドジ話は、ふたりに任せることにしようと思います。

……じゃあ私は、というと、やっぱりキリンさんとの思い出かなあ。

川湯からの帰途、キリンさんがふらっと千歳に立ち寄ったことがありました。

千歳は観光都市ではないし、定番といえばハイジ牧場か千歳川のサケの孵化場くらいなんです。それじゃあ、夜になったら、その孵化場のインディアン水車とやらを見に行くことにしようよ、と決まりました。行ったところで暗いし、よく見えないのにね。

それで夜風に吹かれながら気分よく川の畔を歩いていたら、いきなり私たちはライトで照らされ、「待てー、止まれッ！」と、緊張した怒号が川面に響き渡りました。最初、なんのことやらまったく分からずに、ビックリしましたね。するとキリンさんは、反射的に「ヤバイ、逃



硬派・軟派

みんなでストーブにあたっていると、暖かいんだよねえ。あれれ、キリンはどこを見てるのかなあ？

げろ」とか言って、駆け出そうとしていました。私はほとんど固まってしまい、すぐに監視員に捕まりました。サケの密猟者の取締りだったんです。

私たちは観光目的で来ていて、サケを獲ってるわけでもないのに逃げる必要もなかったし、ヤバイとか、逃げろ、なんてこともいわなくてもよかったんです。

昔から、警察やらガードマンと折り合いが悪いと噂には聞いてましたが、条件反射のように逃げようとするんですよね。そのことは、ホント驚きましたが、今、思い出してみると笑っちゃいます。それに、まだ女子高生だった私をそんなふうな夜間に連れ回して歩き、今時だったら未成年者略取・誘拐で捕まっちゃうかも知れません。川湯の人たちと一緒にいると、なにをしても面白くて珍しく、それに少しだけ歳上の、都会から来てる人たちは輝いて見え、いくつかの出会いはとても新鮮でした。そういう経験が私の一部となって今があるのだと思うと、不思議な感じもします。そして、いつだって人生は楽しい、と私は思っていますから。 ■

# お姉さんに伝えられてないお礼

ミルキィ (福田尚司 Fukuda Shoji)

忘れもしない1978年、15歳の夏。

その年の3月、高校入試で第1志望を突破したら北海道旅行を許可するという、両親との約束を目指して、やっとの思いで受験を乗り越えました。

その高校1年生の夏休み。単独で、自転車北海道を周遊することに両親も驚き、高校の担任にも強く反対されました。両親を説得し、担任を説得し、やっと出発に至りました。反時計回りに北海道を1周する計画で、1日中走り続けて2週間くらいの予定でした。ユースホテルからユースホテルへ移動するなか、何日目だったでしょうか、野村川湯小学校に出会いました。

当時の印象は強く残っています。お兄さん、お姉さん達、野村川湯小学校のお父さん、お母さんがとても親切で優しいかったこと。楽しかったこと。1泊の予定が10泊くらい延びてしまいました。自分の家庭と中学校くらいしか知らなかった高校1年生でしたので、見るもの聞くものが全て斬新でインパクトがありました。

かけがえのない思い出です。この文を書きながらほのぼのとした気持ちになっています。自宅に帰ってから夏休みの宿題に追われたことはいうまでもありませんが。

元来、夏より冬が好きのため、この年の冬、野村川湯小学校へ行くことに何の躊躇もありませんでした。高校生冬休みですから、クリスマスの頃始まって七草粥の頃

までです。今度は青春18きっぷを利用しました。夏のことがあったので、両親も担任もあまり反対しませんでした。

個人的な当時の感想ですが、夏の北海道はとても大きかったのですが、冬の北海道は怖いくらいさらに大きく感じました。この「感じ」を今でもはっきりと覚えています。

雪がたくさん降り積もり、寒い怖い冬の北海道にあって、野村川湯小学校の中は想像できないくらい明るく暖かく、安心できました。これで完全に野村川湯小学校のファンになったわけです。(2月生まれですので、この時、まだ15歳でした)

この年が暮れ、野村川湯小学校で新年を迎えました。記憶が曖昧で詳細は不明なのですが、みんなで初詣に行く予定を立てましたが、当日あいにくの大雪で中止になってしまいました。残念に思っていると、気の毒に思ったのでしょうか、ひとりのお姉さんが川湯神社(?)の初詣に連れて行ってくれました。といっても大雪ですので歩きだったと思います。橋を渡った記憶があります。狭い道の両側には高く雪が積もっていました。私はコートこそ着ていましたが、マフラーも手袋もありませんでした。まだ、服装に無頓着な子供だったのだなあ、など思い出します。橋を渡って雪の降る道を歩きながら、そのお姉さんは自分の手袋をひとつ貸してくれたのです。このことも、思い出すと今でも心が温かくなります。このお礼はいまだにいえません。

野村川湯小学校との出会いが、世の中の温かさや優しさを教えてくれました。

今でも自分に、「こうあれ」と思い出します。■



硬派・軟派

# 夢中で話した 1年先の旅の計画

難民 (金城新成 Kinjyo Shinse)

俺が最初に川湯に行ったのは、社長（屋宜盛春）と2人だったのよ。

会社の休みを利用して、本当は田吾作（神谷佳弘）と3人で行く予定だったんだけど、田吾作が怪我して入院して、結局2人で1週間くらい、だったかな。

それで川湯に泊まったとき、友野から「連泊しろ、連泊しろ」といわれ、追い討ちをかけるようにランサーにも「連泊しなよ」と誘われ続けた。

仕事も予定もあるから、その時は大人しく帰ったけど、帰ってから大阪の大正区のカンボ（山口重勝）の部屋に、毎日のように寄せ集まっては、来年の北海道行きの話、俺と社長と田吾作で夢中でしてたね。まだ、1年も先の計画をだよ。熱かったねえ。

俺たちはみんな沖縄出身でさ、学校や職場、それにアパートも一緒に、昔からキャンプや麻雀したりして遊んでた仲間だったのよ。

そうして毎晩のように、楽しかった思い出を話しているうちに、いつしか来年の川湯へ行くための旅の具体的なプランにもなったりして、それは少しだけ大げさという生きる目標というか、希望のようなものだった気もするし、日常の暮らしからのちょっとした解放みたいにも感じるんだよ。とにかく、遠い北海道の川湯を思っ取りとめのない話を続けるのって、ホントに楽しかったし、生きるための活力でもあったんだろうねえ。

そんなことしてるうちに、あんまりにも楽しそうなので、アパートの住人のカンボが「俺も仲間に入れてくれよ」ということになって、4人になったんだよ。で、次の年、4人とも会社を辞めて、途中、1週間ほどキャンプしながら車で川湯に向かったんだよ。

それで着いたら、友野やキンタ、毒、土方さんなんかがいてさ、とにかく楽しかったなあ。

俺たち4人は、カンボジアから来た難民のような雰囲気とかいわれて、まとめて「難民」と呼ばれたのよ。で結局、この年は1ヶ月くらいいたなあ。

ミーティングにも飛び入りで出て行って、芸を披露したりしてたよね。たとえば、ポリネシアン・ショーみたいに、灯油を口に含んで吹き出しながら火踊りとかやったりしてて、受けたよねえ。俺たちが、なにをいっても、やってもみんなに笑ってもらえたし、拍手もしてくれた。それが一瞬だとしても、あの川湯の輪の中心にいられたんだよ。あの感覚は……楽しいを飛び越えて、もう忘れられないよ。

3年目は社長が沖縄に帰ったので、代わりにビデオ（高橋一八）が加わって行ったんだ、また会社を辞めて、ね。後から、俺の従姉妹のキー坊（金城菊江）も来たし。この頃だったよなあ、ペアレントが変わってしまい、それでいい争いになって喧嘩もしたなあ。

それにしても、なんで会社を辞めるかといえば、だって辞めなくちゃ長い休みはもらえなかったし、それと川湯への旅を、辞めるための踏ん切りや口実にしてたってのも、どこかにあったのかも知れないしさあ。とにかく川湯は、それほど俺たちに合ってたんだ。

……俺たちの、たくさんの、いい思い出なんだよ。（談）



熱狂・休息



熱狂・休息

## 全盛期を 体感したかった

りょうこ (佐々木良子 Sasaki Ryoko 旧姓・佐藤)

友人とふたり、高校生のときには、ほんの数泊しただけでした。

姉(尚子)と従兄弟(川村礼子)からは、かねてから川湯のユースの噂を聞いていて、だったら1度は訪れてみたいな、と思っていました。

それで行って見たら、周囲は薄ら寂しいような森に囲まれていて、ちょっと不気味。建物も心細く感じられて、ああ、こんなところだったのかあ、という印象でした。やがて硫黄山に闇が迫り、夜になると、広場には赤いキャンプファイヤーが焚かれました。

知らない誰かが、汗を光らせながら旗踊りをしたりする姿を、私はやや遠巻きに眺めていました。やってる人たちは、一生懸命で、楽しそう。なかには、ずっと笑いながら旗を持って踊る人もいて、滑稽で、こんな光景をそれまで私は、見たこともありませんでした。土俗的というか、儀式とか呪術のようでもあり、知らないところに連れて行かれてるようでした。不思議だなあ、と思いながらも、こんな世界もあるんだ、と感心し、このユースに興味も湧いてきました。ひょっとして、姉たちがいつか聞いていた関心は、こういうことなのかもな、と、少しだけ納得もできました。これまで体験したことのないものでした。

再び川湯を訪れた1981(昭和56)年頃には、少し様子も違っていました。1カ月間、ヘルパーとして働

きました。布団干しやトイレの掃除、キャベツの千切りなんてやったこともなくキツかったですけれど、ここでひと夏を過ごすことを固く決めていましたからね。それに、長く家に帰らなくていいという解放感は、この時はじめて味わえました。

結婚し、家庭を築きはじめてからというもの、川湯のことはほとんどなにも思い出せませんでした。家のことや子育てとか、仕事や、やらなければならないことが次々とありました。ささやかな暮らしであっても、子供たちや家族と過ごす時間は充実していて、幸せだと感じていましたけれど、気持ちに余裕もなかったのかなとも思います。

姉が亡くなったとき、テツヤさんに連絡してみようと思いましたが、本名を知りませんでした。では、友野正さんでやってみる? と思って検索して出てきた時は嬉しくて、ドキドキしました。食事を作るのも忘れてしまいそうなくらい、時間を忘れて携帯ばかり見てました。姉のことがきっかけなので、悪いことをしているわけではないけれど、そんなふうに見入ってしまった自分を責めたりして、それからもう、探すことを止めました。ユースにいた人の印象というと、トモノさん、テツヤさん、ナガサカさん、キンタさんでしょうか。テツヤさんは姉から聞いていたので前から知っていましたが、トモノさんは、目立っていて、とてもカッコよくて!!……。もう決してかなわないことなんですけど、できれば私も野村川湯ユースの全盛期に行ってみたかったなあ、と、今、つくづく思っています。そこにはきっと、たくさんの憧れや熱狂や感動と、共感があったはずだと思うからです。(談)



熱狂・休息

## 私を変えた 野村川湯小学校 での出会い

マヤちゃん（福井真也子 Fukui Mayako）

大学1年の時、仲良くなった友人とアルバイトをして、夏休みに初めて行った北海道。苫小牧から入り2泊目に訪れたのが、野村川湯小学校でした。

足を踏み入れたとたん、一瞬で引き込まれた世界。目の前の光景と仲間たちの姿が、あまりにも衝撃的で、魅力的で、アツという間に虜になってしまいました。

周遊券で北海道を1周する予定だったのに、もっとここ

にいたいという私の勝手な想いを友人が許してくれ、私ひとりが残って連泊。本当に楽しい毎日で、結局、夏休みが終わるまでいてしまいました。

父さん母さん兄さん直ちゃん、フッコと真くん、そしてたくさんの仲間たちとの出会いが、私を大きく変えてくれました。野村川湯小学校で過ごした日々は、私の人生の中でとても大切な宝物です。

本当はもっともっとたくさん行きたかったけれど、それもかなわず残念。ただ、8年前に娘と2人で中標津に行き、父さん母さん、直ちゃんに会えたことが、とてもうれしかったです。

いまでも野村川湯小学校で流れていた音楽や、歌った曲を耳にすると、あの頃の楽しかった思い出がよみがえります。ああ、タイムマシンがあったらすぐにでも戻るのにな。出会った人たちみんな！ 素敵な思い出ありがとう！ ■







1981.8.15

8月15日 はれ くもり

今日はソフトボール大会。俺たちは駅前ユースチームで出場、2位だった。

野原がショート、俺はセカンド、1がドテラ、3高田さん、P加とうくん、キャッチ17才のやつ、レフト拓、センターそば屋、ライトは鉄や。なぜ、こうむいんは野球がうまいのだろう。

高田さんの家はこりたので、今日はYHにとまった。そしたら、おとうさんがよろこんで、ぜんぶただにしてくれた、うれし。

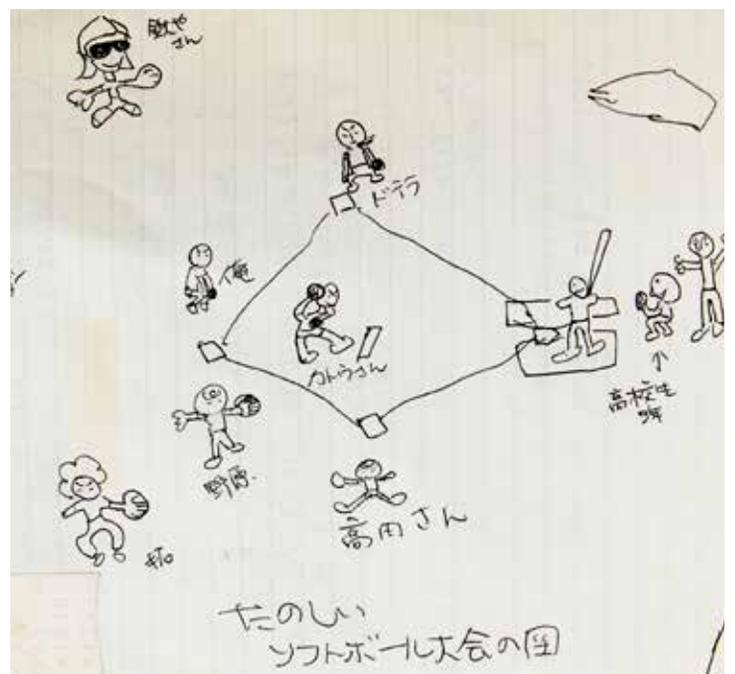
夜、ぼんおどりをした。YHにかえってからふつうのMeeting。拓がギターをかかえて、今年さいごの人間なんて、たのしかった。

明日はきっと、ここを出よう。19の青春ばんざい、18の青春ここにねむる。(日記より転載)

熱狂・休息



ソフトボールの試合に負けて、意気が揚がらずに疲労感だけが支配するユースチームの選手たち。



たのしい  
ソフトボール大会の図

# 笑えるように、 がんばれた

ネズミ (藤原夕歌里 Fujiwara Yukari 旧姓・中山)

いつか書けるものなら、書いてみたかった夏。  
キセキがあるなら、この夏のすべてがキセキ。  
砂でできた城のように、あっという間に波にのまれたけれど。脈々と生きていたキセキが、この文集への参加かも。  
中学から高校への春休み、いとこ姉妹と長崎旅行。その旅行がよかったのか、大学生のいとこ姉の立てた夏休みの北海道旅行に、行けなくなった友人の代わりに、また3人旅行。  
このいとこ妹が「たぬき」である。  
私がお気に入りの水色ストライプのスーツで、イン日間賀島へ行かなければ。  
「だるまさんころんだ」で、スーツが遠目にねずみ色に見えなければ、うっかり動いて「そのねずみ色の人」なんて呼ばれなければ。  
私がネズミで、目のパッチリしたいとこ妹が「たぬき」になることもなかったのに。  
ごめんね、たぬき。  
野村川湯ユースホステルには、たった2泊。  
当初の予定にはなかったが、道内をまわるうちに、各地で評判を聞くにつれ、行ってみたいくなり、斜里ユースの滝めぐりツアーのあと送ってもらった。当日は、祭り？  
身体の小さな私は神輿に乗せてもらい、楽しかったことしか覚えていないが、前開きのシャツが全開のまま

笑っていたらしい。翌日、ユースを離れるエチケットと同じ電車になり、互いに東海地方出身で、写真を送るからと、住所交換。  
これがなければ、ここにいない。  
イン東京の存在も教えてもらい、懐かしさ、楽しさ、そのルーツを知りたくて、ほぼ参加。  
それには、高校生活の影響も。  
北海道へ行く直前の私は、入学した高校で気づけば、スクールカースト上位組へ。  
急に北海道へ行くことになり、その場しのぎで、色々な決断をした。帰ったあと、その選択に縛られてゆき、少しずつ身の丈に合わない位置からすべて行った。  
砂の城から砂漠へ。川湯のイン〇〇はオアシスだった。  
3年後、ようやく自力で北海道へ。  
父さん母さんはいないけれど、目指せヘルパー。1週間でクビになり、父さん母さんちの隣で高田さんたちと小屋生活。  
と、まあ、野村川湯ユースホステルに、ネズミはほぼ存在していなかったけれど、こうして思い出を共有しあえる人たちに出会えた。  
東京タワーから手を振ってくれた人。  
泊まるどころないんだろ、と泊めてくれた人。  
学費は時間を買うようなもの、とってくれた人。  
ここがあったから、いつか会った時、笑えるようにと、  
がんばれた。

キセキに感謝。■

## 熱狂・休息



ネズミのような、熱く、湧き上がるガッツある女ホステラーを得た野村川湯ユースは、大したもんだと思うなあ。

# 一生忘れられない おもてなし

ヤマハ (根上京巳 Negami Kyoji)

北海道上陸から5日目の1976年7月某日、野村川湯YHに飛び込みで宿泊予約。

摩周湖展望台からひとつ走り着いたユースが、野村川湯小学校だった。真君の厳しい面接を経て、無事に入学できました。

開放的な運動場と懐かしいような校舎、広い風呂は最高でした。母さんの揚げたおいしいトンカツに舌鼓を打ち、その後は楽しい夜のミーティングが始まる……連泊の開始でした。最初の頃は美幌峠や裏摩周にと、昼間、周辺を観光していましたが、そのうちやることもなくなり、父さんに相談すると、近くの牧場で牧草の片付けのアルバイトを紹介してもらうことができました。牧草をトラックの荷台に持ち上げる仕事はちょっと大変だったけれど、仕事の後でいただいたとっても濃い生牛

乳が、なんとも美味しかった。

それと、風呂焚き爺さんも実は人間で、たまに休む日もあったんですよ。そんな時の風呂掃除は、私がやっていたのでした。別のある日は、父さんとエルフに乗って弟子屈まで行き、スーパーでの買い物の手伝いもしましたね。トンカツ用の肉も沢山買ってきました。母さんに頼まれて、運動場脇の草刈りをしたこともありましたよ。こうして父さん母さんが、暇なホステラーに暇つぶしを与えてくれました。感謝ですね。

そういえば、フォークダンス中にコンタクトレンズを落とした子がいましたよね。バイクや車を広場に集めて一斉にライトを点灯し、ホステラー全員で探したら、なんとあの広いグラウンドでコンタクトレンズが見つかったのです。それも確か、落とした本人が見つけたんでしたよね。劇的でした。それからラストまでは、もう最高潮に盛り上がったのはもちろんです。

そんな楽しい思い出ばかりの、野村川湯小学校でした。父さん母さん、真君、フッコさんの心温まる“おもてなし”が、今でも忘れられない私の一生の思い出になっています。■



この階段を駆け上がったら、あの渋い風呂場だ。1度、ひとりでゆっくりと浸かってみたかった。



熱狂・休息











トドワラで焼きそばを食べるらんさあと、辻元清美（右から2人目）とフォーリーブス。



屈斜路湖の和琴の温泉に入っでご満悦な悪ガキ衆。不謹慎にも難民は、夜、こっそりここで排便したという。するとウンは湯に沈まずに、ぶかぶかと屈斜路湖方面に流れていったらしい。



お正月のスキーツアー。美羅尾スキー場



紋別に流氷を見に行こうぜ、という遠足があった。それを称して非公式ながら「野村川湯イン紋別」という。流氷？目を凝らせば、遠くにわずかに白く光るものがあり、どうやら流氷の欠片らしい。1980年3月



イン日間賀。1980年



人形家のミチカから真くんはお年玉をもらっていた。



悪いことはいつもこの4人でやっていた。



たまたま停まっていた「温根湯」行き貸切バスと一緒に記念撮影。



小田急線の祖師ヶ谷大蔵駅からしばらく歩いた先に、ホーセーのアパートがあった。鍵もほぼ自由に使えだし、一時期、川湯の合宿所のように利用されていた。上京の折に世話になった人はあまたいた。



みんなで酔っ払い、暴れてエレベーターを止めて大騒ぎした新宿の夜。



お気に入りの鼠色のスーツを着たネズミ（中）と和ちゃん（右）。



ここは、羽田空港の搭乗口。この旅行で、直ちゃんのはじめて飛行機に乗ったんじゃないかなあ。飛行機は全席座席指定だからね、と、毒がいったかどうかは分からない。



加藤くん（右端）のこの車に世話になり、泊まった人は多いはずだ。タイヤまで積んでいて、居住性は抜群だった。ただし定員が3、4人と限られていて、ジャンケンに勝たないと泊まれなかった。



本誌の対談取材の翌日。左から5人目がフッコ、その右が真くん。その他省略。岐阜県美濃市にて。2018年6月



千歳空港に乗り降りしたら、オグス（前中央の和服）の店「ダイニングバー8月」に電話する。そこで「合い言葉」さえいえば、大体、飲み放題になり、翌日は周辺の観光地ガイドもしてくれる、とか。



土方さん（左から2人目）が上京したので開かれた宴席。右端がミルクィだが、当時の面影はなく、心臓外科の名医として活躍中だ。2017年10月



何人かの人たちが上京するというので、では、とまた宴席が持たれた。キャプションを書くのもだんだん疲れてきて……もうメンツは省略する。2016年10月、中央区八重洲にて。



父さん（前左から3人目）と母さん（前左から2人目）を中標津の自宅に訪ねたら、とても元気だった。兄さん（後右端）も変わらない笑顔で、ムサ苦しい連中を暖かく迎えてくれた。2009年7月



女房孝行のトモノ（左）が純子ちゃん（中央、トモノ妻）を鳶温泉に入れさせたくて出掛けたついで？ に、高田さん（右）の自宅（青森県・七戸町）に本誌の取材のために立ち寄った。高田さんは、自らが選んだ生き方を、13匹のネコと一緒に穏やかに全うしていた。

# 姫路での建設 リホームは (株)長谷川商店

談合 偽装なんでも相談して下さい。

経験を元に長谷川浩司(キリン)が相談に乗ります。

野村川湯小学校連泊者には消費税サービス。

長谷工ではありません。長谷川商店です。

〒671-1523 兵庫県揖保郡太子町東南301-2



# 今も忘れられない 高田さんの言葉

加藤くん (草薙修二 Kusanagi Syuji)

一緒に北海道旅行に行こうとってた友達にフラれちゃって、不意のひとり旅になりました。旅の計画は、その相棒にすっかり任せっ切りになってたために、オレはこれといった目的もなく、北海道に出かけました。まあ、しいていえば、牧場で馬でも見てみようかな、くらいのことでしたね。

それで日高などの牧場を巡ってから、たまたま川湯のユースに1泊だけしました。1980(昭和55)年の8月でした。

レジャー牧場に行って、馬を見ていました。じっと、きっと何時間も。他にやることもありませんしね。そしたら、いつの間にか猫を抱いた人がそばにやって来ていて、なんとなく一緒に、ぼーっと草を食む馬たちを、眺めたりしてました。しばらくすると、「君、なにやってるの？」と声を掛けてくれたのが、高田さんでした。やることのないのなら、今、小屋を作っていて、それを手伝ってくれるかい、と誘われました。多少のウサン臭さもありましたけど、猫がよく懐ついているので、きっと悪い人ではないだろうと判断し、どうせ暇なんだし、ついて行ってみることにしました。

それで最初に連れて行かれたのは、駅前にあった上田さんの自宅でした。

皆さんからは、父さんと呼ばれていて、最初は、事情がまったく飲み込めませんでした。

上田さんは、お茶を出してくれ、炭火で餅やイモを焼いて振る舞ってくれました。そのうちに母さんと呼ばれる人も出てきて、高田さんと昔話をして笑ったりしてました。そんな折にも、初対面のオレに対する上田夫妻の自然な気遣いが伝わって、なんだかとても身に浸みましたよね。優しさが、さり気ないですよ。

さてその小屋は、高田さんが父さんの家の隣に建てようとしていて、土台作りがはじまっていた。枕木を使っているといいと父さんにいわれ、壁はダンボールで囲むという、失礼ながらなんとも簡素な宿泊所でした。

そのうちにドテラ、オバケ、毒、ネズミ、たぬき、それに三公、茶、良子ちゃん、美奈ちゃんらが次々とやって来たり、様子を見に来たりしてましたね。オレはもう、なんのこともやらわけも分かりません。

でも、どっちにしろオレは、皆さんのジャマをしちゃあいけないな、とは思っていて、小屋がひと通り完成したら、さっさとここを出て行こう、と決めてました。どこ



高田さんが基礎を築いて作った俗称「エビの家」。壁はこんな感じにダンボールで囲まれていた。高田さんの熱と情によって作られた避難施設だった。

かでオレは冷めていたし、身勝手な疎外感のようなものもあったんだと思いますよ。

でも、やって来る人たちと話をしたり、飯を一緒に食べて、翌朝、起きてみると、なんだか旧知の仲のような親しい感じになっていきました。いつの間にか仲間になり、楽しくなって、ユースにはたった1泊しかしてないオレなのに、きっと連泊してるみたいな感覚？ だと思いました。オレもかなり図々しいですよ。

会ってすぐに、友野さんからは、「まるで、金八先生の加藤君みたいだな」なんていわれて、すぐにあだ名がつかれました。だから、「加藤」は本名じゃないですからね。皆さん、そこんとこよく承知して下さい。でも、オレにもあだ名があって、嬉しいですよ。

……ある日、高田さんに、なぜ、この小屋作りをはじめたんですか、と思いついて尋ねてみたら、「みんながここ(川湯)に来たら、困るんだ」と、静かに、少し怒ったようにいってましたね。この言葉は、40年経った今でも、忘れられません。

高田さんにとってのその小屋は、ユースに泊まりたくない人や、やや複雑な立場の人を受け入れるような、いわば一時避難受け入れ施設みたいなシェルターだったんですよ。

そんな高田さんは、皆さんがたくさん集まって来れば来るほど、いつの間にか隅っこの方にポツンといて、決して中心には入りません。友野さんとテツヤさんが話しているのを横でじっと聞いてると、とてもふたりの仲がいいのがよく分かるんですよ。オレは、そういう皆さんの関係性が羨ましくて、眩しくて、いつも憧れてましたね。ユースには1泊しかしてなくても、こうして「川湯の」卒業写真文集作りの仲間にも呼んでもらって、オレはひとり、嬉しさを噛みしめていますから。(談)



## ヒリつく背中痛みと、楽しい日々

コケムシ (嫁兼啓司 Yomegane Keiji)

川湯に1泊した後、北の方面をバイクでぐるっと廻って、斜里の辺りまで南下してきました。快調に走っていたら、道路のほぼ真ん中に、握り拳大の石が落ちていて、アッ！と思った瞬間には、それに乗り上げ、転倒していました。ボクの体は飛ばされて、路肩まで滑り落ちていきました。じわじわと背中が痛み、ちらっと見たらズル剥け状態でした。バイクの方は、確かクラッチ・レバーの先っぽが折れていて、それでもなんとか走行だけはできました。その日のうちに川湯に出戻って、その後は、お金が尽きるまで、ずーっと川湯に滞在していました。高校3年の夏休み、1978（昭和53）年のことです。

ユースに着くと、すぐに背中ケガの手当を親身にしてくれて、そりゃあ嬉しかったですよ。そういうことがあって、いつの間にかボクのあだ名はコケムシになりました。

ひとり旅で心細くもあるなか、川湯ではみんなが自然に声をかけてくれたし、親切にもしてもらいました。そういうユースは、いいよな、と感じますよね。

連泊中に覚えているのは、みんなで弟子屈の「人形の家」によく通っていて、とぐろを巻いてたことですかね。ボクは、ちょっとだけバイトのような手伝いもしてたくら

いでしたし。なにもかもが珍しくて新鮮で、楽しかったんでしょう。

1981（昭和56）年の夏に、川湯に再訪しました。もう顔を知ってるかつての仲間はありませんでしたが、その時は、タクと一緒にヘルパーをして、精一杯盛り上げようと思いました。それなりにバトンを受け継ごう、恩返しをしよう、みたいな気持ちもあったんだろうとは思いますが。

あのユースの魅力って、大人の世界や理屈はあまり関与してなくて、ルールもない、自由な雰囲気があることなんじゃないでしょうか。それに、ひと癖も、ふた癖もある人らが集まっては来るけど、誰とでもフランクに、気さくに話せる気風もありますしね。

あの、背中のヒリつく痛みと、ユースでの楽しかった日々は、今もボクの体に焼き付いているようです。（談）



# 北海道に住んでいます

後輩（宮地鎮雄 Miyachi Shizuo）

野村川湯のユースホステルに連泊したのは、大学1年生の夏休みが最初だった。大学に居場所がなく北海道の旅が自分の居場所だった。

ドラマ「北の国から」の影響もあり、そのまま本物の居場所にするべく、家具作りを目指した。札幌のカメラ店でサラリーマンをしたあと、家具の産地、旭川の職業訓練校へ。このとき、同じく北海道に何度も来ていた京都出身の妻と結婚。

その後、冬の厳しさもあり、バブルの時代も相まって、いったんいろいろ考えなおそう、と旅に出た。1年近く東南アジア、インド、ネパール、ヨーロッパ、アメリカを旅した。東南アジアでは安宿で、世界中の人と出会った。インドではインド人と喧嘩し、ネパールではクーデターで逃げ惑い、ヨーロッパではヒッチハイク、夜はテントという旅をした。ベルリンの壁が崩壊し、イラク戦争の開始をフランス人の車の中で知る。バックパッカー

をしてみたら、生きていくのに必要な持ち物って15キロ分くらいなんだ、って思った。

で、そんなにいろいろ見てまわったのに、やっぱり自分たちには北海道しかない、と思ったのは1991年のこと。工房宮地を開設し、数年後に上川郡東川町に移住。

5年目くらいから横浜そごうや、新宿伊勢丹など首都圏のデパートで展示販売。最初はなかなか大変で、妻が英会話スクールで教えていたが、気づけば、工房も27年目。旭川家具工業協同組合の組合員として、常設展示もするようになった。

子供が生まれてから家も建て、夫婦で子育てをしてきた。今ではすっかり東川町民。町には北海道最高峰の旭岳があり、素晴らしくおいしい大雪山の水が湧く。移住組も多く、おしゃれなカフェ巡りで今や結構人気の町になっている。写真の町でもあり、世界中から人が来る。今は敷地内にショールームを建てているところ。

雪の多さには、うんざりすることもあるけれど、それでも雪は美しい。春の芽吹きにカエルの合唱。水田に沈む真っ赤な夕陽。秋の穏やかな日差し。厳しくも美しい自然の中で暮らしている。

ユースホステルの連泊が、こんな人生を作ってくれました。私を受け入れてくれた仲間と、北海道に感謝です。■



無頼・漂白

# 煙草屋の角を 曲がってみたら…

「野村川湯YH写真文集」発刊に寄せて

土方さん（佐竹正明 Satake Masaaki）

「野村川湯YH」に投宿した日は1978年7月30日。あれから40年、また旅が大きく動き始めた。これを機に今までの総括をしておきたいと思っていた矢先に、有志達が発起人となって「野村川湯YH写真文集」が編纂されるという。当初の原稿依頼の内容からは遠く離れてしまうが勘弁してもらおうことにしよう。

当時は「旅行」か？「旅」か？という命題がいつも付き纏っていた。なぜ「旅行」ではなく「旅」なのか？単なる言葉遊びではなく、自分にとって確かに「野村川湯YH」は「旅行」ではなく「旅」だったと思う。「旅行」とは帰るべき日常があり、「旅」とはそれ自体が目的である……と、当時は漠然と考えていた。

もちろん「旅行」を否定するものではない。日常から離れ休息をとり、リフレッシュして帰っていく……。現代人には必要なことである。つまり「旅行」が目的ではなく、日常生活に寄与することが目的なのである。当然「旅行」する側は消費者でもあるから対価を支払い、それに見合う以上の、食、風景、歴史、人、心……全てを貪欲なまでに要求して獲得しようとする。「旅行」される側も、あらゆる手段を使って満足を提供しようとする。これは現在でも普通に行なわれる経済活動の一形態である。

「旅」はどうだろうか？移動、食事、宿泊……それは結果的に消費・経済活動でもある。この点においては「旅行」と大きく変わりはない。一体、何が違うのだろうか？「旅行」と「旅」を同一視してしまうことに違和感を覚えていたのは自分だけだろうか？

森有正氏の『経験と思想』という著作の中に「体験」と「経験」の決定的な違いが考察されている。今ではこのふたつはほとんど混同されて使われているが、氏はこう峻別している。

・経験と体験は共に一人称の自己、すなわち「わたくし」と内面的につながっているが、「経験」では《わたくし》がその中から生まれて来るに対し、「体験」はいつも私がすでに存在しているのであり、私は「体験」に先行し、またそれを吸収するという本質的相違が存在するのである。

・この「経験」と「体験」とは、内容的には、同一であることが十分にありうる。差異は一人称の主体がそれと

どういう関係に立つか、によって決まるのである。

・体験はどんな阿呆の中でも機械的に増大する。  
・「経験」とは、たしかに「現実そのもの」でありながら、同時に「自分を含めたもののほんとうの姿」に一步近づくとということ。

辻邦生氏の解題によると、「体験」は偶然的に人生のまにまに外側から与えられるもので、それは単に機械的に増大し、全てが主観の歪みのもとに置かれ、主体がそう感じ、そう味わっているのであり、それに自己満足し、容易にそこに安住する……という、体験主義が安易な主観主義に墮しやす傾向を指摘する。それはそれだけの事であり、殆ど物質の変化レベルでの出来事と変わりが無い……とある。

この森有正氏の思索は非常に示唆に満ちている。「旅行」を「体験」、「旅」を「経験」と置き換えてみるとどうだろう。見事なまでに本質を突いているのではないだろうか。「野村川湯YH」に出会う前の自分は確かに「旅行」者であった……と思う。それが「野村川湯YH」に出会ってからは自転車どころか北海道すら目的ではなく、「野村川湯YH」での日々そのものが目的になってしまった。「野村川湯YH」が日常になってしまったと言えるだろうか。つまり帰る場所を失い、故郷喪失とも言える人生に飛び込んでしまったということだろう。これはもう「旅」そのものではないだろうか。「闇の夜に啼かぬ鳥の声聞けば 生まれる前の親ぞ恋しき」という言葉を寺山修司氏の著作で知って以来、宗教（禅）問答や一通遍の通俗的解釈よりも、その言葉の持つ深淵さに囚われてしまった者の運命でもあろう。「野村川湯YH」の開祖たる真君&フッコの（どちらが言ったのか忘れてしまったが）「煙草屋の角を曲がってみな」という言葉を聞いた時に、この「闇の夜に……」を想起して慄然としたものだった。自分の行くべき場所、帰るべき場所、本来の自分の居場所が日常とは別にどこかにある！これはもう天啓としか言いようのないものだった。森有正氏



の言う、《わたくし》が生まれてしまったのである。何が自分を「旅行」者ではなく、「旅」人にしてしまったのだろうか？ それは「野村川湯YH」に流れていた緩〜い時間と倦怠な空気、怪しげな情景、父さん母さんのお人柄、そして出会ってしまった(?) 悪しき友人達の所為に他ならない。劇薬と言え程の強烈な媚薬でもあった(蠱毒かも知れぬ)。その後の全行程を取り消して「土方さん」と呼ばれるようになるまでそう時間はかからなかった。闇の夜に啼かぬ鳥の声を聞いてしまった、そして煙草屋の角を曲がってしまった哀れな「旅行」者の末路であった。

そして「旅」人になってしまった自分とはいうと、この「旅」から流れ始め、その後もずっと流れ続けることになってしまった。先日長年の職場を去るにあたり、町長に挨拶に伺った際に「今後は第二の人生ですか？」と聞かれ「いや、まだ旅の途中です」と返したのが広報誌から削除されたのも致し方のないことだろう。

結局「旅行」は日常の消費活動の延長であり、単なる「体験」の一形態でそれによって「私」が変わるわけでもないが、「旅」とは凄絶な精神活動の過程であり、その「経験」から自分を含めたものの本当の姿に一步近づくといいことではないだろうか？

「旅」は逃避か？ これもまた命題であった。現実が辛くて逃げているのだ……と言いたいのであろう。自分も言われて考え込んだものだ。実際、傍目にはそう見えるだろう。確かに現実の生活は辛いことが数多くある。それは人によって様々で、その許容量も千差万別である。「旅」は「逃避」だと、自分が「体験」した稚拙な尺度でしか物事を考えられない人に何を言っても「バカの壁」が存在するだけで無駄ではあるが……。

「旅行」が日常生活の延長上にある行為なら、日常から「逃避」をしたとしても同じ日常が待っている。とすると「逃避」などあり得ず、「逃避」に見えて、実は機械的な「体験」行為でしかないと言えるだろう。

では「旅」はどうか？ 帰る場所のない「旅」人には休息の必要はなく、「旅」人こそ「逃避」行ではないか？ しかし《わたくし》を求めて螺族のように立ち向かうのは決して「逃避」ではない。

この答えも何十年も見つからなかった。実は面倒な現実から逃げ続けてきたのではないか？ こういう思いがどうしても消えなかった。その澱のようなものに終止符を打ったのが「R I D E」初代編集長・鈴木典久氏である。それは「逃避」ではなく「退避」だ……と言うのである。鈴木氏も彷徨していたのだ。つまり彼も「旅」人なのだ。「旅」は「逃避」ではなく、新しい《わたくし》が現れて来る過程に必要な「退避」ではなからうか？ ただそれはいつまで続くのか。再び森有正氏の言葉を借りれば



「暗黒の中に在って、光が射して来ることが不可能ではない——ということは、唯一の頼みの綱となる。見栄えがなくてもこのつつましい点から出発する外にない」ということであろう。

「逃避」と「退避」という言葉も「旅」や「旅行」と同じように同一に見える。が、その「退避」している辛い時間が「旅」人だけの特権のような気がする。

「野村川湯YH」から始まった「旅」も40年。北海道に流れ来て35年。今まで「旅」の中で多くの人の知己を得てきたが、このところ毎年、同志・仲間と言える友人達が先に鬼籍に入り始めた。彼らと語った夢はまだ見えているのか？ このまま留まるのは停滞である。色々な状況を鑑みて「今しかない」と判断した。Like a rolling stone……。移転先探しでこの立地を見た途端にピンと来た。A・ワイエスの描く「クリスチーナの世界」があった(と、思った)。資金的にはかなり厳しいが「旅」を続けるにはやるしかない！ 毎朝5時から樵夫の日々である。詳しくはこの写真文集に新事業の広告を掲載していただけるといのでそちらをご覧ください。

最後になったが、この写真文集の発起人の「キンタ」「ランサー」「友の」「ながさか」「テツヤ」「ホーサー」の各氏に感謝の意を捧げたい。そして開祖「真君」&「フッコ」、上田のとうさん & かあさん、YHのみんな……。旅の途中でまた逢おう。あの頃のままだ。 ■

編集部注◎森 有正(1911-1976) 哲学者、仏文学者/辻 邦生(1925-1999) 小説家、仏文学者/寺山修司(1935-1983) 劇作家、「天井桟敷」主宰、歌人/螺族(らぞく) 東本昌平「キリン」Point of no-return より/ Like a rolling stone ポブ・ディランの歌詞(1965)の意味とは違い「転がる石に苔は生えない」の意/アンドリュウ・ワイエス(1917-2009) アメリカの画家

# この道をずーっと 行ったら……

加藤敏子 (Kato Toshiko) +  
荒井充子 (Arai Mitsuko 旧姓・宮地)

野村川湯ユースに宿泊してから、40年が経ちました。私たちがそれなりに歳をとり、目も見えにくくなって老眼鏡を使用するようになりましたが、現在まだ、仕事をしております。

記憶もあまり定かではありませんが、ふたりで当時のことを思い出してみようと思います。

私たちが野村川湯ユースにお世話になったのは、神奈川県の教員採用試験が終わり短大最後の夏休みということもあり、ホッとした気持ちで北海道に出かけた時でした。利尻、礼文島をまわっている時に「北海道3バカ・ユース」があると聞き、道東に行ったら野村川湯ユースに泊まってみようと思いました。

着いたその日、ヘルパーさんに「この道をずーっと行くと温泉がある」といわれてふたりで行って見ましたが、歩いて歩いて温泉は見当たらず、前から来た人に聞

いてみると「温泉なんてありませんよ」といわれ、騙されたことに気づきました。

初日からこのお出迎えて、びっくりするやら戸惑うやらで何を信じたらいいのか。「何てところに来てしまったのか……」と思いました。

このユースで名古屋から来た藤井さん、久納さんと知り合い、一緒にヒッチハイクをしてトラックの荷台に乗せてもらいました。最初で最後のヒッチハイク。風が心地よかったのを覚えています。おふたりともお元気でしょうか？

その後、野村川湯イン東京では新宿に集まってワイワイしました。

数年前には、仕事で川湯温泉に泊まりました。嬉しくて、出来ることならユースがどうなっているのか見に行きたいと思いましたが、実現できませんでした。

振り返ってみると人生の区切りの時に、野村川湯ユースが関係していたのだと思います。採用試験の時にこのユースと出会い、退職の時にこうして文集のお話があり、長い時間がたっても繋がりがあることに驚いています。これからも、どうか皆様お元気で。 ■



当時はこんなふうに着た川湯の仲間たちと連れだって、遠足がよく企画されていた。山梨県・清里高原にて。1979年

無頼・漂白



# 周遊券のはなし

カメラ魔 (川井 聡 Kawai Satoshi)

旅をナリワイにして生活したい。10代のころからそんなことを考えてた。今にしてみれば「なんのこっちゃ？」だが、実現すると勝手に思った。

小学校のころ初めて行った北海道にあこがれ続けて、高校出たときから北海道に入り浸って、何やらわけのわからない写真を撮ってた。おかげさんで、今は旅をナリワイに写真の仕事させてもらってる。願い通りと言えばその通り。でも「失敗した!」とつくづく思う。「写真をナリワイに大金稼ぐ!」にしとけばよかった、とこれまたしみじみ思う。

……そういえば、あの頃は周遊券使いの“名人”みたいな旅人がいた。

今ならさしづめ「俺は周遊券のプロや」という勢いだろう。といっても当然、専門家なんてものは存在しない。道内と帰りの乗車券がセットになった「B券」を、ほかの人と交換して「北海道に居座るプロ」である。もちろん規則違反なんだが、大方は交換したからといってずっと鉄道に乗り続けるのではない。同じところに居座って、

帰りの日にちをグダグダと伸ばすわけである。

それともうひとつ、「下車印」集めも専門家のような人もいた。当時は各駅に駅員がいたし、10分停車とか1時間停車なんてザラだったわけで、停車時間に改札口に行って印を押してもらうのである。ツワモノともなると券面も文字が見えないほどになり、改札口で「これじゃあ見えないから新しい切符に交換する」といわれ、臨時の券を再発行されてしまったという噂も流れていた。その噂にビビって「集めすぎちゃまずいなあ」と、ほんのり自粛したものだが、あれは本当だったのだろうか。一般周遊券が誕生したのは1955年。翌年には北海道エリアが使える「北海道周遊券」が登場。以降九州、四国などと続いた。65年には片道飛行機が使える「立体周遊券」が、70年にはミニ周遊券が登場した。81年にはフリーエリアで特急自由席が使えるようになり、便利さはマックスに到達した。

そんな周遊券も、末期のころには有効期限が20日から14日に減少、冬季に割引だったものも1割引きに改訂された。そして98年に周遊きっぷに衣替えし、エリアも期間も大幅に縮小され利用価値はほぼ壊滅。2013年にはきっぷごと消滅してしまった。

急行や、夜行がふんだんに走っていた頃の、贅沢な思い出話である。■

無頼・漂白



# 都市にも生きる 野村川湯ユースの 気っ風

あさ子（岡部あさ子 Okabe Asako 旧姓・三浦）

今から40年前の大学3年の夏、友人の村松（旧姓・相田）美里ちゃんと周遊券で北海道を周り、旅の終盤に行ったのが、忘れもしない野村川湯ユースホステルです。

なにもないところなのに、そこにいる人たちが実に個性的でユニーク！ 受付から笑ってしまい、校舎のあちこちに笑いのツボがあり、センス抜群でした。1泊で終わるのがもったいなくなり、予定変更し3連泊してしまいました。

野村川湯のヘルパーや常連さんたちって、个性的でありながら寛容なので、まったりと過ごす時間が心地よかったです。

秋に、川湯イン東京が開催され、西新宿の高層ビル近くに集まりましたよね。ちょっとオシャレして来た人たちとも硫黄山音頭で意気投合し、その日、私のアパートに初めて会った地方の女の子を泊め、夜更けまでたわいのない話をしてました。

当時、私は小田急線の生田に住んでたので、ホーセーのアパートがあった祖師谷辺りでも美里やヘルパーたちと会って遊んでいました。

あれは確か、9月のある暑い日の午後でしたね。

祖師谷の駅前から電話をして、着いたことを知らせてから、八百屋の店先にあった大きな西瓜を手土産とし、ホーセーのアパートに向かいました。

西瓜はズッシリと重く、美里とふたりでこんなものを買ったのを後悔しはじめていたら、前から、一見、都市の暮らしには融合しにくいだろう男たちが、道案内を兼ねて迎えに来てくれました。さすがに、旗は振ってませんでしたけど……。

この人たちの不思議なところは、まるで催眠術でも操るように、楽しく話をして笑って過ごしているだけなのに、ふと気がつくと、いつの間にか私たちの私生活を赤裸々に喋らされてしまっていることなのです。しかも、割と肝心なことまでペラペラと。

また別のある日には、電話が掛かってきて、無言電話っぽいような、今でいうストーカーみたいな、あるいは性的変質者からのような、どちらかという動物的な、荒い息づかいだけが聞こえてきてビビっていたら、数分後に野村川湯軍団の仕業だとわかり、「ハァー!？」と軽く怒りながらも、爆笑したことがありましたよ。まったく油断も隙もない、イタズラ好きな連中なのです。

川湯にいても、都市にあっても、本質的な気っ風や遊び方が変わらないのには感心します。

私の20代は、旅といえばユースでしたが、その中でも野村川湯は最強でした。本当に楽しい思い出をたくさん頂き、ありがとうございました。■



無頼・漂白

# ワイルドな男子たちとの出会い

加奈ちゃん (小川加奈子 Ogawa Kanako)

明日は、足寄で開かれる松山千春のライブに行く。そのための旅程で、私は久美ちゃん (本田久美子) と野村川湯YHを訪れました。

敷地に入った瞬間、今までに見たこともない光景が目に入りました。ここはどこ？ 私も、久美ちゃんも女子高、女子大でしたので、男子との出会いの機会はほとんどなく、土方さん筆頭に、あまりにもワイルドな男子たちとの出会いは衝撃的でした。まるで異次元です。人も、設備も、環境も。入学の面接時、らんさあに連泊を無理強いされました。その見返りとして、千春のライブへ車で連れて行って頂きました。ワイルドさは車にも見られ、

国防色の車内には鉄パイプまで仕込んでありました。帰りには、オンネット経由のオプションもありました。ユースに帰ってからは必死に逃げたり思い切り蹴ったりの缶蹴り、バドミントン、フォークダンス、どれも小学生に還ったように一生懸命でした。とにかくよく遊び、毎日が楽しかったです。野村川湯小学校で様々な個性抜群の方たちと出会ったことで、シャイだった私も、その後は構えることなく人と接するようになったのだと思います。人生の転機だったとも思います。

翌79年12月、私たちのハワイアンバンドのファイナルステージに、川湯の同級生が大勢来てくれました。MCの私に大声援が送られ、ファンクラブかと間違われたほどでした。おいでいただききました皆様、ありがとうございました。

この書面をお借りしまして、お礼を申し上げます。■



無頼・漂白

# 気がつけば 連泊してた私

久美ちゃん (吉原久美子 Yoshihara Kumiko 旧姓・本田)

ただいま。

友野さんからおハガキを頂いて、YouTubeを見ました。若き頃の自分も映っていたし、何より懐かしい野村川湯ユースでの思い出が、蘇ってきました。

正直にいうと、高校と短大は女子校でしたので、初めて川湯ユースに足を踏み入れた時は、個性的であり、アウトローな雰囲気大丈夫か？ 私たち……と思いました。

でも、キャンプファイアで踊ったり、ウ○コの歌詞で笑ったり、見かけとは違って優しい仲間たちと出会い、最初の心配が払拭され、気がつけば連泊をしていました(笑)。一番の思い出は連泊中に足寄であった松山千春のライブへ行ったことです。今でもその時のチケットを大切にしています。

卒業の日、川湯駅まで見送りに来てくれて、泣き笑いの旅立ちとなりました。

今回、らんさあから連絡を頂き、懐かしい話も聞けて、一気にタイムスリップ出来ました。

写真などは見つからなかったのですが、是非、卒業文集を見て、さらなる思い出に浸りたいと思っています。■

# 男っぽい大胆不敵 と、優柔不断

## 追悼・毒リンゴ

キンタ（木下 透 Kinoshita Toru）

毒リンゴ（堀越貴子さん）とボクとは、1979（昭和54）年とともに川湯でヘルパーをすることになって、心やすい間柄になりました。

夏のユースに漂うたくさんの熱気や興奮に囲まれながら、長い時間を一緒に過ごすうち、親しみ以上の気持ちに変わっていったのかも知れません。それは健康な若い男女の間には、ごく普通にあるような、自然な話だと思います。

もう詳しいことはうろ覚えになってしまいましたが、最初、彼女の方から積極的に感情をぶつけられて、びっくりしたような気がします。それで、そういう様子を見ていた廻りの人たちも、ボクたちをくっつけようとしていたような、そんな感じですかね。

それにまだボクも若くて、そうして思いを寄せられるのであれば、あまりそのことに抗いもせず、かといって、性急にボク自身の気持ちをはっきりとさせよう、とも思わない、どっちつかずの状態だったような気がします。どうしたらいいのか、よく分からなかった、ともいえます。もう少しだけ正確に言えば、相手の期待に応えられなかったり、がっかりさせたりするのを避けたかったのかも知れません。まあ、優柔不断？ でした。

彼女はいつも明るくて、行動力もありました。姉御肌というか、面倒見もよくて、男っぽい大胆不敵さが



あって、サッパリした気性だと感じていました。でも、その陰に隠れている敏感で壊れやすい、個性的な感受性もあったような気がします。

やがて秋も過ぎ、年も改まり、ボクたちは、互いに日常の暮らしに還っていきました。

将来に向かい、ひとり暮らしをはじめていたボクのアパートに彼女が訪ねてきたこともありましたが、もう接点を見つけることなんてできませんでしたし、ふたり一緒の姿は先にありませんでした。

今から思えば、あの頃のボクは頑なで、ちょっと冷たかったかな、とも思いますが、その当時は気持ちに余裕もなく、別々の、互いの路を進むことしかできませんでした。やがて直接の連絡は途絶え、歳月が流れて、彼女も僕も、家族を持つような暮らしぶりに変わっていきました。

そんなある日、突然、知らせがあって、彼女が病に倒れてそのまま亡くなったと聞かされて、言葉もありませんでした。とても驚き、なにより早過ぎると感じたし、哀しさが胸一杯に広がりました。

川湯をふたりで出て札幌に向かう途中、夜汽車のレールのきしむ音や固い座席の感触を、今も時々、思い出すことがあります。どうか安らかに。（談）

# 毒との思い出

## 畑本貴子（旧姓・堀越）さんを悼んで

みゆきちゃん（工藤みゆき Kudo Miyuki 旧姓・広瀬）

彼女は耳の痛いことを口に出していってくれたり、気が付かない自分の幼さに気付かせてくれる貴重な友人だった。毒というあだ名は、そういうところからついたのか……？ テツヤ、ホーセーさんの名が度々登場する川湯YHの話は、私に興味を抱かせてくれた。

誘われるまま、翌年の夏、ヘルパーとして働くことになり、昼間は遊び惚けていた。

ある夜、お腹を壊した貴ちゃんをトイレの前で、おばけ（大川教子さん）と一緒に体を丸め、声を掛けながら待った。裸電球の光が妙に眩しく、可笑しな光景だがそんなすべてが楽しかった。

東京行きの旅費を稼ぐためにふたりで札幌ビール園、自衛隊員相手のスナックで、アルバイトをした。家にもよく遊びに行き、お風呂に入れてくれ食事までご馳走になったこともあった。色んな節目で、私に勇気を与えてくれた。感謝の言葉しかない。

結婚後、川湯の友人を交えて会う機会が増えてきた40代半ば。パソコンの字が霞んで見えないと知らされた時は、とても驚いた。

お見舞いに持参したバンダナを、嬉しそうに巻いてくれていたのが印象的で、悲しかった。

夢に出てくる桜の木の花びらが、所々黒いのだと聴かされた時には胸が詰まった。

48歳という若さで亡くなった貴ちゃんに、私はもらうものばかりで何もしてあげられなかった。

今では、にこにここと笑う貴ちゃんの顔しか思い出せないのが、せめてもの救いで彼女の優しさだと思う。

きっと天国でも、穏やかに笑っていてくれるだろう。

ありがとう～ありがとう～、貴ちゃん！ ■





## 声の届かなくなった友たちへ

ナガ（長坂 肇 Nagasaka Hajime）

彼は以前、小坊主と呼ばれていた。そういう雰囲気、なかなか的を射ているなあ、と感心していたのだが、ある時から茶坊主と呼ばれるようになった。最後はそれも面倒臭くなり、ちゃ、と今は呼ばれている。まったくいい加減なものだ。

札幌時計台の近くに茶坊主という喫茶店があった。そこにはホットパンツを履いた脚の綺麗な女の人が出て、コーヒーを運んできてくれた。そのウェイトレスさんを見るために、よく川湯の仲間たちと行ったものだ。喫茶店、ホットパンツ、ウェイトレス、みんな死語になってしまった。ガチョーン！

彼女は以前、毒りんごと呼ばれていた。まあそんな雰囲気だなあと思っていると、面倒臭くなったのか、毒、と呼ばれるようになった。この呼び方がさらに合っているようだ。

彼女は、川湯にいる時にナナハンから振り落とされたり、腹を壊してトイレから一晩中出られなくなったり、中華鍋持ってウロウロしたり。なにかと豊富な話題を提供し

ていた。

それから10年、20年が過ぎたある日、札幌の居酒屋で彼女たちと飲んだ。

人生とか生活態度にいい加減な毒とあたしは、その場の会話で、マジメなヒジカタさんを怒らせたりしていた。そうやって飲んでいると、面倒臭そうだと思っていた彼女とは意外と気が合い、何回か楽しく過ごした。

だが、もっと一緒に飲みたかったのに、毒がある日突然、先に逝ってしまった。もうこちら側にはいない。

今頃どうしているだろうか。あの世の居酒屋で待っていてくれるだろうか。あと30年もすれば川湯の連中はだいたい揃うので、あっちでまた一緒に飲めると嬉しいな、と思っている。■



当時、札幌の「茶坊主」で終始フザケ合う、左から筆者、トモノ、キリン。現在、札幌市西区に「茶ぼうず」という喫茶店が現存すると、ナガがいていた。

# いつの間にか 疎遠になっていて

## 板垣和子さんを悼む

テツヤ (森下泰文 Morishita Yasufumi)



1週間ほど前、かーこ（板垣和子、旧姓・竹花）から、「私も来週、川湯に行くことにしたワ」とかいう電話が、ユースにいた僕にあった。

そして、当日の夕方近くになってから、今度は、どうも飛行機の到着が遅れそうで、列車がなくなるかも、というような連絡があって、夜、父さんが弟子屈まで迎えに行ってくれたのを覚えている。そしてユースのバスを降りるなり陽気に、夜路にキタキツネが飛び出てきてさあ、ねえ、父さん、とかいって、ひとしきり騒いだりしていた。まだ、あまりホステラーも多くなく、のんびりとした時を過ごすことができるような夏のはじめ頃だった。とくに雨の降る日が続いたりすると肌寒く、そんな時は、三々五々、いろんな場所で、深い話もできてとても濃密だった。高田さんやダックスも、それにマッキーや博士もいた。学生生活を終えて、やがて彼女が郷里へ帰ることになったと聞いたのは、確かに聞いたけれど、どんなふうになったのかとか、今、記憶をたぐり寄せようとしても僕はすっ

かり覚えていないし、嫁ぎ先が関西に決まった、というような話も、あとから、しばらく経ってから知らされたような気がする。

殊更なにかがあったというわけではなくて、僕たちは、いつの間にか疎遠になっていた、ということだったのだと思う。

だから、友野から連絡があって、重篤な状態で入院していると聞かされ、少しだけ逡巡したのは事実だとしても、もうその時の僕にできることはないな、と思った。彼女の若い頃の処世訓は、私は最悪を想定していつも行動するのよ、だった。そそっかしい、それでいて、肚の据わって動じないところのある人だった。

それでも、早過ぎた自らの死に対しては、覚悟も、達観も、きっとまだ、できていなかったとしか僕には思えない。……今、健やかであることを祈っているよ、竹花和子。■

## オンネトー 遠足の思い出

### 尚ちゃんを悼んで

テツヤ (森下泰文 Morishita Yasufumi)



少しだけハスキーな声の、ゆっくりとしたピッチの話し方。

おっとり、とも少し違う、ふわっとした柔らかな受け応えが、いかにも独特だった。

たとえば、返事をするとき、普通は「はい」とか「うん」、「違うよ」「イヤ」とかいう。尚ちゃん（畠山尚子さん 旧姓・佐藤）は、とくに僕たちとの会話においては「うーん」とか、「ちがーう」と、伸ばしているのが常だった。しかも「うーん」と、もう1拍長く伸ばすこともよくあった。やっぱり、のんびりというか、穏やかな、ゆったりとした人柄だったんだろうなあ。

ユースにいる時、日帰り、オンネトーに遠足に出かけたことがあった。父さんがバスを貸してくれて、大きなおにぎりをたくさん握って出かけた。

ランサーが運転し、トモノ、エンダン、チョビなどもいて、それに友ちゃんとオバケ、のりちゃんも一緒だったから、多分、賑やかを通り越していたはずだ。そんななかにあっても、尚ちゃんだけはみんなの話を丁寧に聞き取り、「うーん」「うーん」と返事を繰り返しながら、時々、窓に抜がる北国の空でも眺めていたんだろうか。その日は、8月とはいっても少し寒かったようだ。尚ちゃんは長袖のトレーナーの袖口を引っぱったりしていた。この本の、実際の編集作業に取りかかる前、刊行の計画

などを知らせるために仲間たちに通知を出した。ところが様々な理由から転居した人も多く、手を尽くしてみるものの、現住所や所在が分からないままの人も多かった。尚ちゃんもそんななかのひとりだった。

そのうち川湯のホステラーであり、従兄弟関係にあって尚ちゃんに川湯を紹介した川村礼子さんと連絡が取れた。そして尚ちゃんのことを尋ねてみたら、亡くなっていると知らされた。2011年のことだったという。5年間の闘病だったらしい。

いつか冬の寒い日の夕暮れに、小坊主と一緒に、約束もなく、仕事帰りの尚ちゃんを新宿のオフィスの入り口で待ったことがあった。僕たちの姿を見つけると、少しだけ驚いた様子だったものの、イヤな顔ひとつせずいつものように柔らかく笑い、そのまま3人で近くのコーヒー店に入って、しばらく話し込んだことがあった。今から思えば、なんとも強引なやり方だったけれど、そうやって尚ちゃんとゆっくり話す機会が持てたのも、よかったのかな、と今は思える。

こうして、文の最後を、いちいち過去形で締めくくって書かなければならぬ辛さや寂しさは、尚ちゃんを知る人たちときっと共有できているはずだろう。

そこから、ひょっとして窓辺に置かれた赤い花が見えるかなあ、尚ちゃん……。今度こそ、元気でね。■

# 俺の男泣き

ホンダ（山本正吉 Yamamoto Tadayoshi）



もう昔のことで、ほとんど覚えていませんが、俺と同時期の連泊者たちが、俺を泣き虫だった、と口を揃えているから、きっとよく泣いてたんだと思うよ。しかも、ワー、ワーと男泣きしたらしいから。そうだったかなあ、もう忘れちゃった、ホントに。

それで、ユースのなになが好きだったかという、年齢も、出自も考え方も違う全国から集まっていた旅人たちが、あそこでは人を思いやる優しさを底辺に置き、そのうえに強い連帯感や仲間意識が乗り、全体としてひとつに固く結びついていましたよね。それを結びつける接着剤は、情熱なんだよ。いいよねえ。俺はそういう人と人のつながりって、これまであんまり身近に感じたこともなく、いいよなあ、としみじみ思いましたよ。

それに、各自の個性は批判したりせずに尊重しつつ、でも、ひとつの方向に向かってみんなで一緒に進むような、和して同ぜず、みたいなのも気に入ってました。

そういえば、俺はホンダと呼ばれてましたが、同じく、バイクでひとり旅をしていたカワサキ（氏名不詳）という東京の高校生がいましたね。コイツも川湯がとにかく好きになっちゃって、ずっと連泊してた。俺と同じです。カワサキとホンダだから、兄弟みたいな、かといえ、タイプはまるで違いますからね。

カワサキは、俺と違って優等生タイプで、ユースが大好きなくせに馴染めずに浮いていて、観察者のような姿勢でいましたね。イヤ味な感じなところもあって、仲間の

なかに飛び込んでいって力を合わせようとしないうし、なにより熱が感じられなかった。

そういうカワサキの態度が歯がゆくて、俺は我慢できずに拳を握って、殴りつけた騒動があったなあ。みんなが役割を持って一生懸命なのに、オマエの態度は、なんだ！ みたいな感じだったんでしょかねえ。

相手も若く、みんなとどう接したらいいのか分からなかったんだろし、俺も自分の感情をまったく抑えることができずに、獣みたいに殴りかかってしまった。このことは、忘れられませんねえ。で、殴った後のことはどうしたか？ ……もう、忘れちゃったよ。

確か、1977（昭和52）年の春、友ちゃんやナガサカたちが川湯駅に見送りに来てくれて、俺は帰りたくなかったけど、お金も底を尽き、いよいよ帰らなくちゃならなかった。

どうもその時も、号泣したそうです。

駅での別れ際、兄さんに、「おい、弁当だ。持ってけ」って、手渡してくれた。普通、これって泣けるシーンですよええ。

で、列車はどんどん川湯から遠ざかり、泣き疲れて、眠り、俺は、腹が減りました。

それで、兄さんからももらった弁当の包みをそっと開けたら、まるで隠すかのように、小さく折り畳まれたお札がそこに入っていました。

きっと、掃除や厨房の片付けを手伝った手間賃ということでもあったんだろうか、とにかくその気持ちが、ありがたくてねえ。父さんらの暖かい心が伝わってきて、俺はまた泣いて、泣いて、今、思い出しても、ほら、目頭がじんと熱くなってくるようです。

それで列車が札幌に着くなり、早速、ユースに電話して、もちろん父さんにお礼をいったんだろうなあ……多分。けど、なにをいったかは、もうすっかり覚えてませんから。（談）

落涙・寂寥



# 切ない気持ちを 秘めて過ごした川湯

けいちゃん(土元桂子 Tsutimoto Keiko 旧姓・呉田)



青函連絡船の上で私達3人組と便所下駄 タケ 友野。

1976年7月、私たち女子大生3人組(和ちゃん、ももえ)は大学時代の思い出を作るべく、有効期限20日という北海道ワイド周遊券を手し、未知の国・北海道へ期待と不安を胸に旅立ちました。

とはいえ、貧乏人のお嬢様育ちだった私は、父の激烈反対を振り切ったのであり、この日は、親離れ子離れの日であったかもしれません。

北海道は遠かった〜。大阪22時発の寝台車に乗り、青森に着いたのは翌日の夕方17時。そこから青函連絡船に揺られ函館、そして札幌まで電車に乗り、結局、最初の目的地・札幌にたどり着いたのは翌々日早朝だったから、なんと所要時間33時間ほどかかっているんですね。今では地球の裏側まで行けちゃいます。まあ、大阪からはそのくらいの最果ての国ということでした。

すべてYH利用の旅でしたが、食事のことはほとんど覚えてません……。稚内ユースが毎日カレーと玉ねぎのお味噌汁だったこと、あとはどこかで頂いた味噌汁に見たことのない貝が入っていて、それが岩にこびりついているフジツボだと聞いて驚愕したこと、くらいです。

旅は毎日、初めてのことの連続でした。旭川駅の構内での野宿、なんだか大勢の人が寝袋もなくぎゅうぎゅう隙間なく寝ていました。

サロマ湖畔を周遊したいならヒッチハイクがいいと勧められ、3人で話し合っただけでそれは危険かも知れないから止めましたね、野宿はするのに(笑)。でも、サロマ湖畔を大きなフキの葉っぱを傘にして歩いて、おとぎの世界も経験できました。

利尻富士登頂のご来光ツアー。希望するホステラーの中からリーダーを選び、懐中電灯とおにぎりを持って、まっすぐ登れば着くからというので30人くらいで夜10時

くらいから真っ暗な中登ります。途中、空を見上げると流れ星がジュンジュン落ちてきて、まさに星が降るってこういうことなんだと感動しました。島の海辺を歩いているときには、漁師さんに食べていけて、採れたてのウニを開いていただきました。

礼文島の「愛とロマンの8時間コース」、島を縦断するトレッキングコースです。

エーデルワイスを見たり、今では危険なので通行禁止になっている岩場を登ったり、ここもヘルパーさんが付き添うわけでもなく、初めて会ったホステラーたちだけで実際には10時間くらいのウォーキングでした。

層雲峡から黒岳、旭岳を縦走しようと思って、なんの装備もないスニーカーとジーンズと半袖Tシャツで登りかけてたら、下山中の登山者にその格好で行くの? と驚かれ、これは無謀なのかもしれないと気づいて、諦めたり。驚いたり迷ったり、感動したり笑ったり、すべての感情を働かせ続けた北海道の旅の最後の目的地が、野村川湯YHでした。

ここでは、まったりの時間を過ごしたと記憶しています。ゴツゴツの岩山にあった硫黄山温泉、牧場に行ったり、ヘルパーさんホステラーさんとひたすらたわいのない話で笑い合っ、ミーティングで騒いで楽しんで……。

でも、旅の終わりは近づいていました。周遊券の有効期限があるし、もう2度と会うことがないかもしれない人々とも別れがたく、旅を終わらせたくなく、そんな切ない気持ちを胸に秘めながら過ごした川湯でもありました。毎日、力一杯お出迎えお見送りしてくれたヘルパーさんたち、出会った人たちはやさしくて、暖かかった。初めての経験も楽しいことだけで。私にとっては宝物の思い出たち。

この旅での幸福感により、その後、人生をすべて肯定的にとらえ、基本人生は善であり、喜びであるという人生観の基礎を築けたのだと思っています。

40年も経ちました。記憶があいまいなところがあり、調べられるところは調べたのですが、間違っているところがあればお許し下さい。今回川湯小学校の卒業生として声をかけていただいて驚きましたが、感謝しています。そう、いろんなことがあって人生は楽しいです。■



# 楽しかった 野生のような暮らし

ちんぺえ (坂牛 聡 Sakaushi Satoshi)



アメリカ留学中の次男とちんぺえ。

# 残されたままの 錆びたバイクの片端

Z 2 (三宅広雄 Miyake Hiroo)

四国・徳島県から、ひとりバイクで北海道に――。バイクで走るのに、北海道は憧れの場所でありました。なぜなら、美幌峠を走ることは最高の楽しみだったからです。そして川湯に、長く連泊することになりました。

ある日の午後、ランサーがバイクを貸してほしい、と頼みに来ました。

毒リングを乗せて、摩周湖に上がりたいというのです。うーん、私の心中は、正直いってやや複雑……。でも貸さないなんて私の主義にも反するし、それにランサーなら大丈夫だろうよ、と信頼して、キーをポンと投げて渡しました。

後部シートに毒を乗せて、私のカワサキ750 z 2のエンジンは、低く心地よい音と匂いを残して颯爽と走り去って行きました。

ところが、15分もしないうちに、毒だけが見慣れない車に乗って戻ってきました。

登りはじめてすぐのカーブで、転倒したといいます。それで後続の車に救助してもらって、無事に毒だけはユースに戻ってきました。そうと聞いて、すぐにユースにいた数人と現場に走って行ってみると、なんとかランサーも立ち上がっていて、安堵しました。

どうも100キロ近いスピードが出ていたらしいです。ふたりとも軽傷ですんだのは、たまたま運がよかっただけだな、と思いましたね、とにかくよかった。

この度は、忘れかかっていた野村川湯ユースの思い出を (Youtube 上に) 再現していただき、思わずのことで、驚き、感激しています。

自分は、大学卒業前の旅行で、ユースの居心地に感動し、長居していたことを思い出します。

キャロル (確か?) の音楽で目覚め、野生のような生活を楽しんだように記憶しています。たくさんの友達との共同生活、楽しかった。

おそらく私が最年長で、帰りには何人かの方と、青函連絡船で帰郷したことを思い出しています。

自分は62歳になり、最後の仕事で、今年にはリタイヤかなと思っています。

皆さんも、あちらこちらに羽ばたき、活躍していることと思います。ますますのご活躍を祈願しています。(友野正へのメール文より転載)

## 経年変化

もちろんバイクにもダメージがありました。果たして四国まで、これに乗って走って帰れるのかなあ、と、私はぼーっと思いを巡らせていました。

ランサーはしおらしく反省し、責任を感じているのももちろんでしたが、ユースのみんなからは、すぐさまカンパが集まってきて、部品調達の資金の足しに使ってくれよといわれ、ありがたかったし、なによりその気持ちが嬉しかったのです。

川湯には、そのz 2のフロント周りスクラップが未だに残っているとのことなので、一度は見に行ってみたいものです。

そんなことがきっかけとなって、私はZ 2と呼ばれるようになりました。

私にとって、今となってはとてもよい思い出であり、沢山の人に出会えたこと、そして現在でもこうして、川湯の仲間たちと交流があることに深く感謝しています。■



修理の終わったZ2を見送る。

# 9年間ユースを見続けた生き証人として

ドテラ (藤崎勝士 Fujisaki Katsushi)

経年変化



俺が最初に川湯に行ったのは、76年の8月後半。高校2年の頃で、森脇という同級生と周遊券を使って行った。前半は道内をあっちこっち回り、川湯は最初から3連泊の予定を立ててた気がする。川湯を起点にして、知床、阿寒湖、摩周湖、屈斜路湖などを回ろうとしてたから。ところがみんなと同じで、真くとフッコの面白さにやられてしまった。で、なにが面白かったか……というと、俺にはそれはちゃんと説明はできないけど、とにかく川湯を離れたい面白さがあった、と感じるんだよ。そして周遊券が切れるまで、そのまま川湯にずっといたね。あの時は高校生だったのに、ユースでは大学生だとかいって背伸びして、悪いこともしてたような、ね。だから、いつか学校の帰りに地下鉄に乗ってたら、川湯で会ったお姉さんにいきなり声を掛けられたりして、焦ったねえ。具合の悪いことに学生服を着てた俺は、そこはもう知らぬ存ぜぬを押し通すしか術はなかったし、なんてこともあったりして。

2回目は3年後の79年、大学1年の時にネムイノと一緒にいった。最初に川湯に行ってしまうと、他を回れなくなるからと、積丹や礼文を回ってから、8月の後半に川湯に入った。その時は先輩、後輩、タク、うりゃ、とら、くまさん、たんつぼたちがいたんだと思う。3回目は80年、今度は車でネムイノと一緒にいった。この時は川湯に直行してヘルパーをやった。岐阜、あきおくん、でんしんボー、ナナハン、ミミズ、カズノコ、めぐ、なほこ、えり、ジャッキー鈴木くん、お玉、景子たちがいたかな。

4回目は81年。この時は片道切符を握りしめ、しばらく北海道で暮らそうと心に決めて、タクと2人で川湯に向かった。当時の俺にしては、大きな決断だったんだろ

うね。

それでユースに着いたらペアレントがドグウじゃなくなっていて、コケむしがヘルパーをやってたよ。あとで誤解だと分かったんだけど、ペアレントとの間に金銭トラブルなんかもあって、ユースにいられなくなったりしてねえ。

それで高田さん、タク、加藤君、コケむしの5人で、上田さん家の横に小屋(シェルター)を建てさせてもらって泊ってた。その小屋は、カニの家を真似して「エビの家」と呼んでたね。その後タクは富良野へと向かい、倉本聡さんの膝元で丸太小屋を建てる中心人物になっていくんだよ。そのへんのところは倉本さんの書いた「谷は眠っていた—富良野塾の記録」に詳しく、タクは本名の「鬼さん」(鬼塚)として出ているので、みんなにも読んでほしい、感動的だよ。

それでその後の俺は、知り合いが塩狩の小学校を借りていたので、82、83年とそこに行き、帰りにちらっと川湯にも立ち寄ってはみたけれど、泊まりはしなかったね。それから、結婚式や知人の家を訪ねたりで、川湯を通りかかってもユースには寄ってないしね。

そうして76年から通いはじめ、84年にユースが営業を止めるまでの9年間の移り変わりを、俺は生き証人として、とりあえず見続けてきたことになるんだと思うんだよ。

学生時代は川湯バカだったと自分でも思うけど、今も、なんの悔いもないね。(談)



# 高田芳雄さんの 生き方

トモノ (友野 正 Tomono Tadashi)

痩せていて、背が高く、髭を生やしていて寡黙な人だった。まさか、私たちの罪をあがなうために天から遣わされた人とは思わなかったが、高田芳雄さんは、イエスに姿がとてもよく似ていた。

そんな高田さんを、青森県・七戸町の自宅に訪ねた。この写真文集の取材のためだ。

当初は、ほとんど話をしてくれないのではないかと思っていたら、意外にも饒舌で、放っておいたら次々に話題を変えて話し続けたりしていた。川湯にいる頃には、滅多に自分のことを話さなかったのに。

……なに、川湯の話？　じゃあ、日記を引っ張り出さないとなあ。俺は中学の頃からずーと日記をつけていて、それを見れば、どこでなにをしていたかとか、どこまで何キロ走ったかと走行記録もつけているから、全部分かる、とまでいう。そんなふうに、少しだけ自慢話なんかも織り交ぜつつ、高田さんはとても明るくて元気だった。

高田さんと出会ったのは、1978（昭和53）年の夏だった。

私とは歳が10近くも離れていて、もうとっくに学生ではなかったし、立派な大人に見えた。そして落ち着いていて、自らのことはほとんど話さなかったから神秘的でもあり、とくに女子には人気があった。

物静かで、思慮深い感じのお兄さんが、それにしてもなぜ、川湯に魅力を感じて連泊……というよりも、居着いてしまったのか。

そもそも高田さんは、なぜ川湯にやって来たかという、知床方面からバイクで走って来て、たまたまだったという。清里の峠を越えて眼下に硫黄山が見えたときに、直感的にそこにいってみよう、と思ったらしい。よくあるように、ただの通りがかりだった。

野村川湯ユースに投宿し、すぐに旅立つ予定だったが連泊した。興味を持ったとか、面白かったからというよりも、そこにいた人たちから誘われて、気が向いてのことだという。

それよりもずっと以前から、片雲の風に誘われて漂泊の思いやまず、高田さんは、なぜ旅を続けていたかという、話は千葉での学生時代にまでさかのぼらなければならない。

20歳の時、ちょうど大阪万博の年だった。友人とふたりで北海道への旅に出かけたことがある。離島なども

回って、道内をひと通り巡って歩いた。まだユースを使うなんてことも知らなくて、シュラフに潜り込んで駅やその軒下なんかで寝て過ごしていた。そういうことが許される時代でもあったのだ。その年は、「知床旅情」が流行っていた。

元々、子供の頃から身体が弱く、地図を見るのが大好きな高田少年だった。そして、学生時代の友人と旅をしたりして見聞を広め、話をし、考え、あるいは古今東西の偉人たちの言葉に触れて、悩み、ひよっとしたら、大切な人の死を身近に感じたこともあったかも知れない。とにかくそうするうちに高田さんは、好きなことをするためには、時間や肉体を売ってはい人生がムダになるのではないかと、という考えに至ったのだという。

そして、人はいつ死ぬか分からないのだから、就職などしないで好きなことをしよう、と心に固く決めて以来、バイトで喰いつなぎながらの漂泊の旅暮らしとなり、それを揺るぎなく実践し続けてきたのは、見事に一貫性があって潔い生き方だと思う。

積算したら、もう何カ月間、川湯に滞在してたのかなんて、両手の指を折っても数えられないほどだろう。川湯は、高田さんにとっての人生だという。

それを顕著にいい現しているのが、高石ともやの「私に人生といえるものがあるのなら」という歌の詞だそう。私と出会って過ごしたあの川湯での夏の日々と、その歌詞が絶妙に一致するというのだ。

その歌詞に書かれる「私」を、「私たち」と変えてみればいいんだよ、というのが、高田さんから私たちへの伝言だった。

青森の自宅に、13匹のネコとともに暮らす高田さんは、私とやっぱり同じように歳を取った。「今、思うと、ホントに好きなことをしてきたなあ。だから、今、こうやって生きていられるんだよ。やりたいことやったから、そう思って……」

高田さんは、自らが選んだそんな生き方に、まったく後悔はない、と静かにつけ加えていった。■



校舎を冬仕舞いしたあとのワンカット。当時の越冬はドライブイン大雪で。1980年9月

経年変化



## 厨房から見える ユースの風景

ホーセー (吉川 誠 Yoshikawa Makoto)

豚肉を叩いて、伸ばして、つなぎの卵につけ……夕食の準備である。

これが私に任された、重要な仕事のひとつだった。すりこぎ、包丁の背、ある時はピンなどを用いて肉を叩いて薄く伸ばすのが、母さんからのミッションだった。叩き終えたら、卵には形通りくぐらせて、パン粉もごく薄くつけるために、余分なものはわざわざ払い落とししたりした。そこまでを支度したら、次の行程に送り出した。母さんを中心に直ちゃん、ダイちゃん(直ちゃんの友達)らによって、スムーズにトンカツが揚げられて、出来ていく。大きく、厚く見せる技術には、いつも感心して見ていた。

そんなふうにして夕食の準備に忙しい頃、「ただいまー」といってホステラーたちが、ドライブイン兼食堂に入ってくる。

「ユースの受付は、その細い道をずーっと奥に進んだところだよ」とかいいながら案内するが、どの顔も疲れなどほとんど見せず、元気に疎林のなかに向かって歩いて行く。

夕食を作りながら、父さんも母さんも直ちゃんも、ダイちゃんもそうしてホステラーをニコニコと笑顔で迎えるのが、毎日変わらない光景だった。

そして厨房は、だんだん忙しくなり、それとともに母さ

んの機嫌はやや悪くなる。ちょうど夕食の、いい匂いが漂いはじめる頃だ。

ところで私は、ここでしか味わえない旅はどうですか、などという驕った気持ちでホステラーと接したことなどなく、ずっと自分たちが楽しいこと、やりたいことをしてただけだったような気がする。そんなに、なにかを深く考えたこともなかったし。

ただ、「おととい泊まった者ですが、明日、また行きたいんですが……」という電話を取った時など、本当に嬉しかったのが忘れられない。到着時間に合わせて、駅まで迎えに行ってしまったほどだ。

そうしてじわじわと連泊者が増えてきて、そういうみんなと一緒に同じ場所にいるだけで、あんなに腹の底から楽しく笑い、遊びでも、冗談でも、仕事も真剣にやっていた気がする。

たとえば、昼飯のおにぎりに正露丸や噛んだガムを入れて、それを誰かが食べただけで最高に楽しかった。肝だめしのために皆んなで仕掛けを考えて、マジだった。そういうことが、最高に面白かった。自分たちが純粹に楽しいと思えることだけをやり続けた日々であったのだ。だが、そうして長く川湯に留まっていると、情が移り、仲間たちをたびたび見送って別れる時の寂しさや哀しさを、何度も何度も味わうことになる。そんな経験は川湯でしかしたことがなく、友との楽しい交遊の裏側には同時に辛さもあって、オヤジになった今でもそんなことを思い起こし、心を熱くすることもあったりするのだ。ひよっとすると、定年近くのオヤジになったから、なお染み渡るんだろうか……。■

## ▲ 野営場 ▲

2021年春オープン予定  
オートバイ専用キャンプ場  
川湯連泊者には薪一束サービス



# Grünherz

( グ リ ユ ン ヘル ツ )

- ♥利用はオートバイライダー&会員&会員が直接紹介した者に限る。  
(排気量は問わず。同乗者も可。会員及び会員直接の紹介があれば自転車や他の交通手段でも可)
- ♥走行時にヘルメットを装着しない主義の方は、会員直接の紹介があっても利用不可。  
(同乗者を含めて側車付二輪車やトライク、四輪バギー等、普通免許でも走行時常時ヘルメット着用者は利用可)
- ♥オートバイに同行の自動車も利用不可(例外有。事前に要相談)。
- ♥テントも含めてコンロやキャンプ用具の貸し出しはしない。
- ♥利用の場合には必ず事前に電話予約する事。♥連泊制限なし。
- ♥トイレ、シャワー、炊事棟、露天風呂、簡易宿泊小屋、・・・その他付随施設設置検討中。
- ♥北海道を単独または少人数でキャンプツーリングするオートバイライダーの為のキャンプ場。
- ♥開設は6月から10月(検討中) ♥テント設営可能数は当初10張程度
- ♥当野営場の基本趣旨は『自分でやった方が楽しいぞ♪』ですから、各種素材は用意いたします。
- ♥薪も原木を斧で好きな大きさに割ってお使いください。斧はお貸しします。
- ♥露天風呂も薪割から水張り、火熾し、湯沸しもご自分でやってお楽しみください。
- ♥鶏小屋完成の折には卵の採取、鶏の解体も楽しめます。解体もお教えします。
- ♥会員は管理者が「野営場・グリーンヘルツ」の趣旨に相応しいと認めた者のみとし、会員証を発行する。
- ♥会員資格に関しては検討中。

佐竹 正明 (土方) まで

〒089-0787 北海道中川郡幕別町字明倫114-6  
e-mail [jj8nnr@coral.ocn.ne.jp](mailto:jj8nnr@coral.ocn.ne.jp)  
電話 090-1389-2443

中央の緑の濃い防風林周囲が野営場予定地



長坂



のりちゃん



ダックス



に一さん



土方さん



加古さん



良子



みるきー



真くん



チャック



さっちゃん



高田さん



くみちゃん



下関



キンタ



フッコ



の一まくん



# ブラトモノ

きりん



三公



ひでき



らんさー



ジュンちゃん



ホーセー



ホンダ



よしみ



たみ子さん



ちょび



テツヤ



すーさん



オグス



ねむいの



ドテラ



おばけ



岐阜



なおちゃん



# ブラトモノ

トモノ (友野 正 Tomono Tadashi)

フリーのカメラマンになって32年。仕事であちこち行ってる。時間に余裕があれば川湯の卒業生にあって昔話、近況報告など話す。連絡も入れず突然の来宅にびっくりする姿を見たり、ひさしぶりに逢ってあまりにも変貌した姿に驚いたり、懐かしさのあまり涙したりする。驚いたことに私が知ってるだけで10組のカップルが川湯で誕生している。

数年前、住宅メーカーの仕事で北海道に行った時は、土方さんの住む忠類村の歯科診療所にお邪魔した。診察室の横にはナイフ作りの作業部屋。待合室には熱帯魚と熱帯魚雑誌、コンバットマガジン、バイクと無線の本。土方さんの趣味の本がいっぱいあった。本人曰く同じ趣味の患者さんが多いので、経費だそうである。自宅は借家なのにお城のように石垣を組み、井戸を掘って来客用にニジマスを飼っていた。

川湯に行くヒデキの駅前の家に泊まらせてもらった。ヒデキのアンティーク・コレクションはかなり多く、スーパーカブのコレクションに驚く。今は弟子屈町の議員になり観光に力を入れてるようだ。去年、NHK美の壺「北海道の駅」で川湯駅オーチャードグラスが放映されていた。オーナーのヒデキの話が取材慣れしていて、びっくりした。

雑誌の仕事で旭川の後輩の家に行った。当時プレハブであった「工房宮地」が自宅一角にショールームを作ったと連絡があった。東川町に行ったら是非寄ってください。後輩の椅子はNHKイッピンで紹介されている。

札幌に行く千歳にある小楠のお店「ダイニングバー8月」が集合場所となる。チャックやよしみ達が駆けつけてくれる。飲み放題が得意のお店です。

最近西に行くことが多く、よく会っているのがフッコである。冷蔵庫事件で家をリフォームして、憧れのアイランドキッチンも入ったのでみんなで泊まりに行きましょう。大阪ではドテラ、ねむいのにも会った。甲子園ではバースの場外ホームランのボールが飛んできたのりちゃんのお花屋さん「アベイユ」にも行った。浜松のホンダにも会った。まさか二人でマクドナルドに行くとは想像もつかなかった。大阪のタンツポには何年前に会ったのですが、とつてもハゲていた。おそらく今あったら1本も無いと思う。きりんとは定期的に会ってる。相変わらず面白い。そしてついに去年、結婚した。もちろん、オッパイの大きい奥様です。おめでと。

長坂とはこれまた長い付き合いであるが、残念なことに去年、福岡の単身赴任から東京に戻って来てしまった。

福岡では長坂の家は居心地がよく、テレビ、WiFi環境がないキャンプのようなストイックな生活であった。今年からミャンマー駐在の所長になったので近くミャンマーに遊びに行こう。またキャンプのような生活をするのであろう。

三公の「バーバー矢尾板」にも行った。明治中期に曾祖父が大森でパーマ屋さんをやっていて、創業100年を越える老舗であることを知った。そして、キリンとよく遊んでいたこともわかった。八王子に住む良子とも会った。当然おばさんになっていたが、相変わらず可愛い話し方だった。埼玉県の加須にいるランサーとはよく会っている。宇都宮に行く時はトイレを借りに寄る。孫も大きくなった。みるきーも大きくなった。当時の高校1年生が、今では東京医科大学病院心臓血管外科の准教授である。みるきーと呼んでいいのだろうか？この文集企画で苦労したのが住所探しである。加古一さん。名前に特徴があった。ネットで検索すると大手電気メーカー役員であることがわかった。迷うことなくM電気姫路事業所 役員 加古一様でハガキを出したら本人に届いた。さすが役員。東京に転勤してた。昼飯を一緒した。川湯で撮った写真を再現してそろばんを持って撮影。役員が東京駅の駐車場でそろばんを楽器代わりにしてる姿が撮れた。ありがとうございました。

茨城のの一ま君の家にも数回お邪魔してる。の一ま君に会いたいのではない。奥さんのミキちゃんに会いたいのだ。フッコと行ったとき、益子町で買った益子焼のMyマグカップをの一ま君の家に2個置いてきた。これからもちょくちょくコーヒーを飲みに行こう。

そしてホーセー。名古屋に行って暇だったので、ブラトモノをした。当日、残念なことにホーセーには会えなかったが、後日、数年ぶりに会った。そこから始まったのがこの企画である。ホーセーがみんなで温泉に行こうと企画したのだ。するとテツヤが折角だから昔の写真を見んなで見ようといひ出した。仕事柄スライドショーはお手の物。音楽を探してたら昔のユースの音源を発見。ついでに昔のビデオも出てきた。編集したら良くてきたのでYouTubeにUPした。泣けた。いろんな人と連絡が取れて、野村川湯小学校卒業アルバム制作が始まった。アルバム制作が始まってから、ダックス、下関、加古さん、スーさん、岐阜、チョコビ、真君に逢った。みんなの生きざまを聞くのが楽しい。立派です。何よりも川湯の卒業生は優しい。そこが共通点だと思った。そして青森の高田さんに24年ぶりに逢った。青森の実家に暮らす高田さんは13匹の猫を抱え旅には出れない状態であった。移動手段は自転車だけ。携帯電話、テレビも無いロックな生き方をしていた。明日はあなたの家に行きます。まだまだ続くブラトモノ。■

# 小伝・川湯の立役者たち

## 「カスガイ」の本懐

野村川湯ユース・ホステルは、日本ユース・ホステル協会の記録によれば、登録上は1964（昭和39）年に開設され、90（平成2）年に廃止されているという。とすると、ユースとしては25年ほどの歴史があるのに、個人的なつながりや関係は別としても、残念ながら公認された組織的な集まりや同窓会などはなかった。

ところが、76年にペアレントが上田上さんへと変わり、真くんとフッコによって「野村川湯小学校」というコンセプトで旅人たちを持ってなしたその年の夏から4、5年間ほどは、緩くもタイトでもない、ほどよい天然の結束のようなものが保たれていた。

そのつながりは、上田の父さんがペアレントを務めていた時期に重なる。これは父さんと母さんの、主に人柄から滲み出た面倒見のよさや親しみやすさ、温かさ、自然な心遣いなど、旅の思い出として消費され難い別のもので、私たち利用者の胸のなかに濃密に残ったからだろう。

ペアレントとしての父さんが優れていたのは、忍耐強さと、生来の人の良さを基本とした博愛的な精神にあった。若者たちの笑っている姿を見ていたかったから、といて、余計なことはいわない聡明さがあり、大人としての野暮な自己主張もほとんどしなかった。前には出ない、いつも控え目な大人なのである。でも一貫して、まあ、みんなで仲良くやりましょうや、という方針だけは徹底されていて、つまり臆病や差別もなくニュートラルに接してくれていて、そのことでどれほどのホステラーが救われてきたことか。その裏側には、ひょっとしたら大きなストレスもあったかも知れない。そうした一見、無色の、形さえないような受け皿に、真くんとフッコというふたつの鬼才であり、インフルエンサーが現れて鮮明に着色し、その魅力がマグネット・ポイントとなってひと夏、旅人たちを引き寄せ続けて完成したのが「野村川湯小学校」だった。

高校2年の夏休み。友野正もたまたまそんなユースを訪れて、多分、異界にやって来たような、カルチャーショックを受けた、のだろう。高校生が普段の生活からは感じられない刺激や面白さがそこにあり、フッコと真くんからはぶ〜んと、強い異能が発散されていた。だから友野がその頃の真くんに会って、予言者か、または絶対神のように感じたとしてもちっとも不思議ではない。それに長期の連泊者たちなど、周囲が作り出す熱狂やエナジーも渦を巻いていただろうし。

そんなユース滞在中の出会いのなかから生まれた多士済々な仲間たちとの交遊は、その後の友野にとって貴重な、楽しみともなった。同年代の友達とも、仕事上のつき合いともまったく異なり、川湯で出会った人々には利害関係もなく、そして格別に個性的で、面白かったからだ。つまり変なヤツも、偏屈な人も、女好きだけの男も、情熱の塊みたいな女たちや冗談みたいなアホ男も混在しているけれど、それすらもこれまで未知の人間的な魅力として感じられ、予測不能な、常識とは違う尺度の面白さがあったのだ。

そうした興味に引かれて40年前から更新を続けながら、ずっと使われてきた友野の川湯関係者のアドレス帳は、だからとても年季が入っていて、美しいほどだ。住所や仲間たちの動向だけでなく、いつの間にか友野自身がカワユ・エンサイクロペディアのような情報庫ともなっていて、時々、その詰まっている量の多さに驚いたりする。

では、そういう友野の消えない情熱は、どこからやって来るのだろうか、と、ふと考えることがある。ベースとなるのは、友野の持ち前の人に対する強い好奇心だ。

一見、飄々としているので見逃しそうだが、そこに独特な感受性と、性質の素直さや情の厚さが加わるんだと思う。仕事柄が機動性もある。そうして川湯を知る人に会って交感を受け、さらにサラサラと川湯愛が注がれ続けるのだから、熱は深くなれど冷めることはないのだろう。

これは誰もがそう思うだろうが、川湯の基本的な人間関係こそは、連帯感と信頼によって成り立っていて、資本主義の浮き世のようにまったく生臭くなんかないのである。

そうはいつでも、暮らしに追われて忙しいとか、他に優先する雑役があるとか、生きるのただ精一杯では、とても川湯の仲間と連絡を取るのもままならないはずだし、単純に、疲れたとか、腹が減った、理由はないが面倒臭いなど、なんとなく億劫に感じたりすることだってあるだろう。

冷静にふり返るまでもなく、私たちが仲間とともにこうしてここに一緒にいることができるのは、互いの間をつなく「カスガイ」また「接着剤」としての役割を日頃からなにくれとなく果たし、また、組織としての自覚でなくて個人的な楽しみだとしても、事実上、卒業生総代として広く仲間たちに接触し続けてきた友野正という稀な人材を得て、野村川湯同窓会には今でも命が吹き込まれ、生気を保っているのである。つまり、今の私たちがここにあるのは、ほぼ友野ひとりのお陰なのである。父さんと母さんの人柄を礎とし、真くんとフッコが創設者として「野村川湯小学校」を起こした立役者らで、だとしたら友野は中興の祖として裏方に回って情熱的に支え続け、また、仲間同士をつなぐ最も大切で基本的な役割を、義務や使役でなく苦にも感じず果たしてきたという点で、やはり顕彰されるべき川湯に貢献してきたひとりだと感じるのだ。そのことをここにぜひ明示し、記録しておきたいと思う。

友野正の本懐とは、恐らく、川湯の仲間とともにひと時を過ぎて空白を埋めて懐かしみ、互いの成長を確認しあって、笑い、感心し、たまに泣いたりして、往事の価値を共有し確認することにある。その意味では、この写真文集の刊行もとてもよい機会となったし、近い将来には、ノーアポであなたの家のドアを叩くかも知れず、突然、電話がかかってくることだってあるだろう。なにせ、友野はプラトモノの真っ最中だからだ。

そんな時には私たちは決して動ぜず、ご苦労さま、ありがとう、と友野にいつたくさんの時間を取ることにしよう。そろそろ、私たちはそんな柔軟な対応ができる歳にもなったんだろうと思うから。それに友野は、面白い、なかなかいいヤツであるのだし。（む）

# 感謝状

## 友野 正 殿

### 友野がいてこそ

今回、この文集企画に参加、協力するにあたり40年ぶりに会う仲間や、消息を知ることができた人たち。

そのすべてに対し、友のが間にいての技の妙。人間性もさることながら、普段からの尽力に感謝。お陰で楽しく仕事ができました。

これからも人懐っこい、お節介ジジイでいてくれれば私も楽しいに違いない!! (木下 透)

### 繋がりは、とものからはじまる

野村川湯小学校を卒業して会社員となった。その後、結婚と引っ越し。いつの間にか同級生とも、連絡が取れなくなっていた。そんな折、1996年川湯を訪れた。駅舎で秀樹と再会。ともの連絡先を教えてもらった。自宅に帰って ともの宅へ早々押しかけた。

それから時々ともの宅を、襲撃している。とものは幅広く同級生の情報を積極的に収集し、大切にしている。とものネットワークのお陰で、本文集を出版できた。ありがとう、ともの。(国分秀夫)

### とものへの感謝の気持ち

去年、実家に帰った時、とものからの葉書が届いていました。

懐かしい川湯の写真と共に、「ハガキが着いた旨、ご本人に伝えていただければ幸いです」と。この1枚の便りが、今こうして、てつやとも繋がってます。

以前にも、とものからは何度か連絡をもらっていましたが、引っ越しを幾度かして、私も連絡もしないままに、音信不通でした。

この、葉書に印刷された川湯の写真を見て、懐かしくなり、連絡しました。

解けたままの靴紐を、結んでくれた、しっかりと。だからまた歩き出して、みんなのところに着きました。とものに、ありがとうを伝えたいです。

とものがいるから繋がっている、いつまでも、みんなの手をしっかりと結んでいてね。

ありがとう、そしてお世話になります。(高木友子)

### 友野タラシ

たぶん1975年くらい、当時未知の北海道を旅しました。その時に友達ができて、しかもけっこうたくさん。それが今でも友達で、しかも卒業アルバムまで作ってしまおうというのは、これはもう奇跡だと思います。

皆それぞれの人生を歩んできて、いろんな特技を身につけて、その役柄を演じられるというのは、現代版「七人の侍」みたいだ。最近そのおかげで皆と会えることも嬉しいし、おもしろくなってきた、と感じているところです。変な、ふざけた、妙な人たちばかりですが、なかでも友野はマメで、人タラシで、だから友野正は、タラシです。情の人です。そんな友野を称えたいというのが、今のボクの素直な気持ちです。いつもお疲れ様、ありがとう。(長坂 肇)

### 突然やって来る人

引っ越しを繰り返して、住所録をなくし、携帯も変え、誰にも連絡出来ない状況で20年が経っていたある日、彼は突然家にやって来たのだ。40年前にたった1度だけ来た家に仕事で名古屋を訪れた時に……。

ただ、ちょうど家にいなくて、家族からこんな人が来たという話を聞いた時、すぐに、とものだとわかった。昔から、突然来たから。

家族は、連絡先も聞いていなくて、何とか連絡を取りたいととものブログを探し、ブログ経由で連絡し、しばらく堰き止められていたせせらぎが流れ出した。

テツヤとも連絡が取れ、皆んなが集まるからと東京に行き、土方さん、おぐす、おぼけ、キンタ、ながさかたちに久しぶりに会えた。年は重ねても、いまだ変わらない人たちがいた。本当に嬉しかった。

テツヤと温泉にでも行って、積もる話でもしようと思画し、とものに話すと皆んなに声をかけてくれて、伊豆の温泉で、ランサー、キンタ、ながさかとあの頃の話に盛り上がり、笑った。そこで今回の文集の話が出て、今に至るわけであるが、すべてともののお陰。

再び、流れを取り戻したせせらぎを大切に、心地よい流れの音に浸りながら、あの頃に似た感情を取り戻すことが、とものへの感謝の形かなと思う。もちろん自分のためでもあるが。(吉川 誠)



温泉合宿で悪企みするオヤジたち。2017年11月。

# 風呂焚き爺さん

作詞 作曲 横関福好 (フッコ)  
記譜 福井真也子 (マヤちゃん)

い とし いい とし い - ば あさん と の か な し い わ か れ  
あ し - に す が - る ば あさん を し り め に きょうも き ま し  
た じ て ん しゃ な ん そ - を こ - い で か わ - ゆ め い ぶ つ  
ふ ろ た き じ い さ ん か わ い か わ い い ば あさん の た め  
や る - そ わ し - は - ど こ ま で も そ ら に か が や く い ち ば ん  
ぼ し - の - よ う に み ら い に は ば た け ふ ろ た き じ い さ ん  
だ け ど わ し に も た の し み が ほ し い い っ し ょ う け ん め い  
は た ら く - だ け が い き が い - じ ゃ な い そ だ け ど け れ ど も ふ ろ た き  
じ ん せい ふ ろ - の こ と な ら に ん げ ん - こ く ほ う  
お も い か た が き が こ の み を し ぼ る わ し - は か な し い  
ふ ろ た き じ い さ ん



北海道の空の玄関  
千歳空港に着いたら  
私が千歳近郊の  
温泉、北のグルメ、秘境など  
ご案内します。  
ダイニングバー8月で  
お酒を飲みながら  
地元の人と交流し  
楽しい時間を  
お過ごし下さい。  
野村川湯小学校卒業生には  
記憶が無くなるほどの  
飲み放題を用意してます！

●○○○○●  
*Dining Bar*  
8月



ママの小桶



人間なんて 落陽が流れるお店



みんなで騒げるダイニングバー

## ダイニングバー8月

北海道千歳市清水町2丁目7-10新川ビル1F TEL 080-3292-2607 mail 8888hatigatsu43@gmail.com

# はないちもんめ

野村に集まり はないちもんめ 川湯に集まり はないちもんめ  
用事があるから ちょっとおいで 鬼がいるから よういかん  
お鍋かぶって ちょっとおいで お鍋がないから よういかん  
布団かぶって ちょっとおいで 布団がないから よういかん  
何でもいから ちょっとおいで あの子が欲しい  
あの子じゃわからん この子が欲しい  
この子じゃわからん 相談しましょ  
そうしましょ

## 旅の終わり

作詞：舟橋俊久

<sup>C</sup> 夢のような旅だった <sup>Dm F Am</sup> 遠い北の国の  
<sup>C</sup> 僕は旅の喜びと <sup>F G G7</sup> 旅のつらさを知った  
<sup>C</sup> 北の国の少女たちと <sup>Dm F Am C F G G7</sup> 過ごした夢のせつな  
<sup>C</sup> 今日君もほかの街へ <sup>Dm F Am C F G G7</sup> 僕もほかの街へ  
<sup>C</sup> こんなつらい旅なんか <sup>Am Em Am Dm</sup> もういやだ  
<sup>G7 C</sup> 旅を終わろう 汽車に乗ろう

共に山に登ったね 君と手を取りあって  
共に海を見ていたね 水は青く澄んで  
君の心青く澄んで 僕の心が取り戻す  
海の青さ

人と人との出会いなんて いつも別れで終わる  
僕は君のくれた夢を 明日も持ち続けよう  
こんなつらい旅なんか もういやだ  
旅を終わろう 汽車に乗ろう  
こんなつらい旅なんか もういやだ  
旅を終わろう 汽車に乗ろう

# 硫黄山音頭

作詞・作曲 フッコ (横関福好)

山に登ってウンチを踏んじやった  
踏んだら裏見てウンチを舐めちゃった  
舐めたら下痢して野糞を垂れちゃった  
紙がないのでお手てで拭いちゃった  
水がないのでお手てを舐めちゃった  
舐めたら下痢してとうとう死んじやった  
硫黄山に登るときゃ紙と水を用意しろ  
判った人は手を上げて何の気なしに笑いましょ  
わっはは わっはは わっはは わっはははは



## あの山に登ろう

作詞・作曲 真くん (堀 真也)



C Em Am Dm G7  
あの山に登ろう 緑の小路をぬけ  
C Em Am Em G Am  
あの山に登ろう 君と二人きり  
C Em Am Dm G7  
白い雲が頭の上 通り過ぎようとしたら  
C Em Am Em G Am  
手を伸ばしてごらんよ ほら雲と握手さ  
C Em Am Dm G7  
君はどこから来たの どこへ行くと言うの  
C Em Am Em G Am  
古いベンチに二人 誰かの笑声  
C Em Am Dm G7  
夕焼け空に誰かが 飛ばした風船一つ  
C Em Am Em G Am  
二人の心むすんで 高く舞い上がれ  
C Em Am Dm G7  
あの山に登ろう 緑の小路をぬけ  
C Em Am Em G Am  
あの山に登ろう 君と二人きり

野村川湯ユース・ホステル写真文集刊行委員

木下 透 (写真当番)  
国分秀夫 (会計・事務当番)  
友野 正 (写真・デザイン当番)  
長坂 肇 (渉外当番)  
森下泰文 (執筆・編集当番)  
吉川 誠 (渉外係)

日本音楽著作権協会 (出)  
許諾第1806882-801号

本書の刊行にあたり、以下の方々に特段の篤志  
をいただきました。  
(敬称略)

小楠 厚子  
加藤 仁久  
佐竹 正明  
武山 秀樹  
長谷川浩司  
宮地 鎮雄  
山本 正吉



■お断りとお願い

本書の写真・記事の掲載に当たっては、住所、  
転居先など不明となっていて連絡や確認など  
できない方がいました。心当たりの方は、刊行委  
員会までご一報下されれば幸いです。  
また、連絡はついているものの、諸般の事情な  
どあって、やむを得ず本書の作成には参加でき  
なかった仲間もいます。次の機会には是非に、  
と思っています。

「野村川湯小学校卒業アルバム」  
野村川湯ユース・ホステル写真文集

発行日：2018年9月20日  
発行者：野村川湯ユース・ホステル写真文集刊行委員会  
発行所：埼玉県入間市二本木531-2 (友野 正)  
電話：04-2934-7304  
メール：nomurakawayu@gmail.com

印刷製本：株式会社加藤写真印刷所

© 野村川湯ユース・ホステル写真文集刊行委員会